



北海道大学大学院 消化器外科学教室 I ～教室年報：2017年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2017





北海道大学大学院
消化器外科学教室 I
教授 武富 紹信

巻頭言

1年が経つのは早いもので、もう教室年報発刊の時期となりました。出来上がった原稿を見ながら、1年の反省をするのが習わしになっており、本年も多くの反省材料が見つかりました。

さて、教室員には日頃から論文を書くように指導しています。数を書けばいいというものではありませんが、日々の臨床や研究成果を世の中に出して評価していただくための論文執筆は外科医師として当然の行いだと考えております。大学在籍者はもちろんですが、地域医療を担っている第一線の病院に勤務している教室員にも学会で発表し論文にまとめる作業を是非実践してもらいたいと考えております。

なぜ、論文を書かなければならないのか？例えば、珍しい病態の手術を経験したとしましょう。おそらく現場では患者さんの生命を助けるため、術後に合併症を起こさないように、また長期的な不具合を残さないよう最善の努力をして手術を行い、術後管理に専念します。そこでは担当医師のみならず、同僚医師、他科医師、看護師、検査技師など多くの人が協力してくれることでしょう。また、患者さんやご家族の思いもそこにあるはずです。術後無事に経過し退院までこぎつけて、ホッとする担当医。ここで仕事は終わりでしょうか？いやそうではありません。仲間が協力し、患者さんが頑張り、自分が苦勞したものを後世に伝える義務があります。論文にまとめる作業を通して現場では気づかなかった課題や解決法がみつきり反省する良い機会になります。論文を公表することで自身の医療行為を多くの人に評価してもらえます。さらに英文で書けば、全世界の医師が同じような症例に遭遇した場合に、あなたの経験を共有し、さらによりよい医療を提供できることにつながるはずです。

現在、われわれが行っている外科医療は先達が積み上げてくれた一つ一つの業績のもとに成り立っています。手術方法、周術期管理、合併症管理、さらに先進的な臓器移植、内視鏡外科、再生医療など様々な分野で先達の助けを借りて医療を行っていることを忘れず、現在の経験を後世に伝えていかなければなりません。これまでの成果を利用するだけで後世に伝えることを疎かにすることは、外科医としての大きな義務を放棄することになります。

現在ではエビデンスに基づいた医療が行われています。エビデンスとは治療法が論理的に検証され、正式な記録に残されたものであり、その記録として査読者の審査を経た虚偽のない、確かな証拠として論文が成立しています。世界医師会が採択した臨床研究の倫理指針であるヘルシンキ宣言の中でも「研究者は、人間を対象とする研究の結果を一般的に公表する義務を有し報告書の完全性と正確性に説明責任を負う。(中略) 否定的結果および結論に達しない結果も肯定的結果と同様に、刊行または他の方法で公表されなければならない。」と明言されています。

“Without publication, science is dead”という言葉は肝に銘じて、将来の外科医療の発展に寄与できる外科医を一人でも多く育てていくことが私の最大の職責と考えています。

今回2017年教室年報を編纂するにあたりご協力いただいた教室員および同門の諸先輩方に、ここにあらためて御礼申し上げます。特に、編集委員長として多くの時間を費やし頑張ってくれた宮城久之君、市川伸樹君、担当秘書の生野さんに心より感謝申し上げます。

“志”ある外科医が集まり、厳しいながらもさわやかな風の吹く外科教室を目指してこれからも努力してまいります。

(2018年2月26日)

contents

目次

巻頭言

目次

3 2017年教室紹介

- 4 2017年度 教職員役職一覧
- 7 2017年度 教室体制
- 8 2017年年間業績一覧
消化器外科 I・週間予定表
2017年ジャーナルクラブ
2017年M&Mカンファレンス

〈診療部門〉

- 10 肝胆膵グループ
- 14 移植グループ
- 18 消化管グループ
- 21 小児グループ

〈研究部門〉

- 26 リサーチ統括部長より
- 28 研究グループ紹介
 - 28 移植グループ
 - 29 保存グループ
 - 31 腫瘍（肝胆膵）グループ
 - 33 腫瘍（消化管）グループ
 - 34 小児グループ

〈留学生〉

- 37 国内留学
- 44 海外留学

- 50 〈2017年入局後期研修医〉
- 54 〈秘書・クラーク・実験助手〉

56 業績紹介(学会・論文・研究費一覧・学位取得者)

- 68 〈学位取得者〉

71 2017年の年表・年間行事

- 106 〈学会・研究会主催〉

109 関連病院紹介

- 132 編集後記

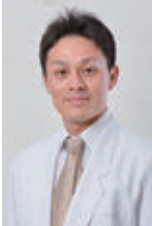
2017年教室紹介

2017年教室紹介 / 組織構成・教室メンバー一覧表

■ 2017年度 教職員役職一覧

Faculty

大学教員

	Taketomi Akinobu 医学研究院/ 消化器外科学教室 I 教授 武富 紹信		Kamiyama Toshiya 医学研究院/ 消化器外科学教室 I 准教授 神山 俊哉		Shimamura Tsuyoshi 病院/ 臓器移植医療部 准教授 嶋村 剛		Takahashi Norihiko 病院/手術部 准教授 高橋 典彦
	Kamachi Hirofumi 病院/ 消化器外科 I 講師 蒲池 浩文		Kawamura Hideki 医学研究院/ 消化器外科学教室 I 特任教授 川村 秀樹		Yokoo Hideki 病院/ 消化器外科 I 助教 横尾 英樹		Fukai Moto 医学研究院/ 移植外科学分野 特任助教 深井 原
	Homma Shigenori 病院/ 消化器外科 I 助教 本間 重紀		Honda Shohei 病院/ 消化器外科 I 助教 本多 昌平		Orimo Tatsuya 医学研究院/ 医学教育推進センター 教育支援部 教育助教 折茂 達也		Goto Ryoichi 病院/ 消化器外科 I 助教 後藤 了一
	Wakayama Kenji 医学研究院/ 消化器外科 I 特任助教 若山 顕治		Yoshida Tadashi 病院/ 消化器外科 I 特任助教 吉田 雅		Miyagi Hisayuki 医学研究院/ 消化器外科学教室 I 特任助教 宮城 久之		Hyasaka Takahiro 医学研究院/ 消化器外科 I 教室 I 特任助教 早坂 孝宏

Instructors

インストラクター



**Watanabe
Masaaki**
病院/消化器外科 I
医員
渡辺 正明



**Koshizuka
Yasuyuki**
病院/消化器外科 I
医員
腰塚 靖之



**Kawamura
Norio**
病院/消化器外科 I
医員
川村 典生



**Ichikawa
Nobuki**
病院/消化器外科 I
医員
市川 伸樹



**Shimada
Shingo**
病院/消化器外科 I
医員
島田 慎吾



**Nagatsu
Akihisa**
病院/消化器外科 I
医員
長津 明久



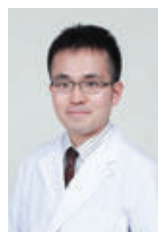
**Ohno
Yosuke**
病院/消化器外科 I
医員
大野 陽介



**Ara
Momoko**
病院/消化器外科 I
医員
荒 桃子

Residents

後期研修医



**Ebinuma
Syota**
病院/消化器外科 I
医員
海老沼翔太



**Sirakawa
Chisato**
病院/消化器外科 I
医員
白川智沙斗



**Haneda
Hiroki**
病院/消化器外科 I
医員
羽田 光輝



**Kobayashi
Tadayuki**
病院/消化器外科 I
医員
小林 正幸



**Suzuki
Mayu**
病院/消化器外科 I
医員
鈴木 麻由



**Saitou
Tomoya**
病院/消化器外科 I
医員
齋藤 智哉

Ph.D.Course Students

大学院博士課程



Master's Degree Students

大学院修士課程



■ 2017年度（平成29年度）教室体制

教 授	武富紹信
-----	------

医 局	医局長	副医局長
	本間重紀	本多昌平 折茂達也

(2017/1/1-2017/12/31)

病 棟	病棟医長	蒲池浩文	副病棟医長	本多昌平 吉田 雅
Group	小 児	消化管	肝胆脾	移 植
Chief	本多昌平	川村秀樹	神山俊哉	嶋村 剛
Sub chief	宮城久之	本間重紀 吉田 雅	蒲池浩文 横尾英樹 折茂達也 若山顕治	後藤了一
Instructor	荒 桃子	市川伸樹 大野陽介	島田慎吾 長津明久	渡辺正明 腰塚靖之 川村典生

Junior Fellow	海老沼翔太、白川智沙斗、羽田光輝、小林正幸、鈴木麻由、齋藤智哉
---------------	---------------------------------

Super Rotation	武田賢大、柿添英文、伊藤 和、横山大輔
----------------	---------------------

外 来	外来医長	横尾英樹	副外来医長	川村秀樹、後藤了一
	新 来	再 来		
月	○	小 児 外 科	本多昌平、宮城久之、荒 桃子	
		肝 胆 脾	神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、 折茂達也、若山顕治、島田慎吾	
火	—	外 来 医 長	副外来医長	
水	—	—	—	
木	—	外 来 医 長	副外来医長	
		移 植	嶋村 剛、後藤了一、 渡辺正明、腰塚靖之、川村典生	
金	○	小 児 外 科	本多昌平、宮城久之、荒 桃子	
		消 化 管	川村秀樹、本間重紀、 吉田 雅、市川伸樹、大野陽介	
		移 植	嶋村 剛、後藤了一、 渡辺正明、腰塚靖之、川村典生	

Research	(Chief) 深井 原、早坂孝宏 (3年目) 梅本浩平、豊島雄二郎、岡田尚樹 (2年目) 木井修平、巖築慶一、鈴木崇史、藤好 直、中藪拓哉（修士） (1年目) 柴田賢吾、脇坂和貴、渋谷一陽、杉山 昂
----------	---

2017年年間業績一覧

○手術：564例

2017年総手術件数：

(手術内容詳細については各グループ紹介参照)

- ・消化管G手術：196例
- ・肝胆膵G手術：168例
- ・移植G手術：27例
- ・小児G手術：173例

○学会発表：173

国内：162

国外：11

○論文発表：40

英文原著：19

英文症例報告：8

和文原著：5

和文症例報告：8

消化器外科 I ・ 週間予定表

	7:30	8:30	8:50	13:00	14:30	15:00	17:00
月曜日	術前症例検討会			総回診	学生指導（縫合結紮実習）		・薬剤説明会 ・MRIカンファレンス ・ほくたけセンター
火曜日	リサーチカンファレンス			手術日/病棟業務			
水曜日	術前症例検討会		当直報告	手術日/病棟業務			
木曜日	M&Mカンファレンス 学会予演会			手術日/病棟業務			・消化器腫瘍内科との合同カンファレンスなど
金曜日	抄読会 /術前症例検討会 (予備日)			手術日/病棟業務		15:00 クルズス	・消化管カンファレンス

2017年ジャーナルクラブ

1月13日	柴田 賢吾	臨床研究 胆道閉鎖症の早期移植因子	6月30日	武田 賢大	先天性横隔膜ヘルニア (前期研修)
1月20日	田中 友香	重複癌	7月7日	坂本 沙織	周術期血糖コントロール
1月27日	川村 典生	Marginal Graft②DCD・Ischemic Cholangiopathy	9月1日	羽田 光輝	小腸癌
2月10日	阪田 敏聖	肝移植～肝動脈合併症～	9月8日	荒 桃子	膵ヘルニア
2月17日	若山 顕治	Intraductal Papillary Neoplasms of the Bile Duct (IPNB)	9月22日	柿添 英文	外科における手術部位感染 (SSI) (前期研修)
2月24日	中本 裕紀	タクロリムスの薬物動態に関する考察	9月29日	本多 昌平	なぜ肝臓にがんができるか？ ～肝発生と分子生物観点から～
3月10日	吉田 雅	大腸切除のSSI低減について	10月20日	白川智沙斗	周術期抗血栓療法 (DOAC含め)
3月24日	脇坂 和貴	混合型肝癌の癌幹細胞マーカーについての検討	10月27日	市川 伸樹	直腸癌と術前化学療法
4月14日	本多 昌平	ニューージーランド留学の帰朝報告会	11月10日	海老沼翔太	術後食事開始のタイミング
5月12日	渡辺 正明	移植成績の改善に向けて	11月17日	島田 慎吾	Pringle maneuver は術後アウトカムに影響するのか？
5月19日	川村 典生	Platelet, Serotonin, and Liver Regeneration	12月1日	腰塚 靖之	腹腔鏡を用いた生体肝移植ドナー肝切除
5月26日	大野 陽介	大腸癌と遺伝子	12月22日	蒲池 浩文	膵癌治療の現状と進歩 肝転移に対する外科治療の可能性への考察
6月9日	後藤 了一	Immune monitoring assay for predicting acute rejection & operational tolerance			
6月23日	神山 俊哉	肝エキノコックス症			
	市川 伸樹	ASCRSの帰朝報告			

2017年M&Mカンファレンス

1月12日	肝胆膵	肝前区域切除後の胆汁漏の一例	8月3日	移植	PBC脳死肝移植待機中の死亡例
1月19日	小児	終末期医療	8月31日	小児	先天性空腸閉鎖・胎便性腹膜炎・重複腸管に対して根治術をおこなった新生児例
1月16日	移植	急速な転帰をたどり肝移植を実施できずに死亡した、B型急性肝不全昏睡型の1例	9月28日	肝胆膵	遅発性腸管穿孔の一例
2月9日	肝胆膵	術後胆汁漏を認めた一例	10月5日	消化管	直腸癌吻合部再発
2月23日	小児	18Trisomyに合併した特殊型食道閉鎖の1例	11月16日	移植	アルコール性肝硬変に対する脳死肝移植術後、感染源不明の敗血症性ショックを繰り返し、6ヶ月後に死亡した症例
5月25日	小児	虫垂切除後にイレウスを発症し長期入院を要した1例			CCAM/CPAM
6月15日	移植	Immune monitoring assay for predicting acute rejection & operational tolerance	11月30日	小児	慢性腎不全を合併した肝細胞癌に対する肝切除後の出血
7月27日	肝胆膵	肝右葉切除後に肝不全をきたした一例	12月7日	肝胆膵	

2017年教室紹介

〈診療部門〉

2017年教室紹介 / 診療部門

■ 肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》



神山 俊哉 (チーフ)

今年度も臨床、研究、教育を中心に活動してきた。臨床では、市中病院では手におえない肝臓手術を数多く紹介いただき、mortality zeroで施行してきました。これは現肝胆膵チームが、非常に成熟してきた証拠であり全国学会での他大学の成績と比較しても良い成績があげられていると感じています。最近では腹腔鏡手術のマスコミ報道から始まり、肝胆膵領域の手術成績が世間の注目を集めているため、今後は、さらに胆膵外科手術手技、周術期管理を進歩させ、後進へ伝え、自信に満ち溢れ将来性に希望が持てる肝胆膵外科スペシャリストを育てたい。またそれらの裏付けとし高度進行肝細胞癌、胆管細胞癌、大腸癌肝転移に対する肝切除を中心とした multidisciplinary treatmentの確立を行っていききたい。研究では個々の癌細胞の発現糖鎖から癌悪性度・転移能を予測することを目標としている。これが可能となれば癌治療法選択に利するのみならず、癌転移の本態に近づくことができると考えている。



蒲池 浩文 (サブチーフ)

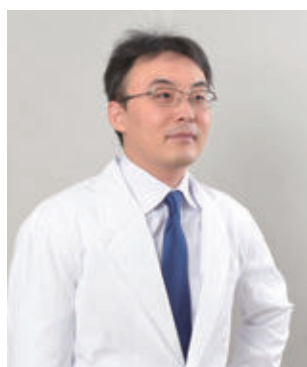
昨年に引き続き、肝門部胆管癌、局所進行膵癌の大部分の手術を中堅の先生に施行してもらいました。さらに自立性を上げるため自身は従たる助手として参加し、中堅の先生達自身で手術を構築していくという形で臨床を行ってきました。その中で、より深い解剖学的理解、方針決定の理論的根拠など頭で解決する部分も多く、指導を進めていくポイントと考えています。個人的な目標としては昨年同様ですが、①中堅の先生に負けない様に手術技量を向上させること、②いくつかの論文を完成すること、③臨床試験で進めているメトホルミン併用膵癌術前放射線化学療法を進め、その解析の中で新たな基礎的知見を得ること、④メソテリン研究での院生の学位取得を仕上げることを目標にしたいと考えております。



横尾 英樹 (サブチーフ)

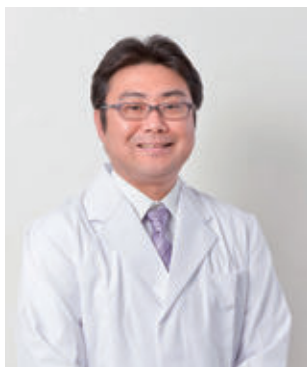
臨床ではこれまでと同様に厳しい症例が集まるようになってきておりますが、綿密な術前計画のもとシミュレーション技術も取り入れほとんど合併症なく行えております。大腸癌肝転移症例も学内とのカンファレンスを密に行い切除のタイミングを内科と共有するようにしたのでかなり風通しのよい環境になってきました。一方、肝細胞癌再発治療の一つとしてソラフェニブを取り入れて一定の成果をあげておりますが、ソラフェニブ後の治療薬のレゴラフェニブが昨年承認され、その成果が待たれるところです。

研究ではプロテオミクスにて同定された肝細胞癌の悪性度に関わる分子であるFABP5を大学院生に解析してもらい新規の予後再発マーカーとして有用であることを突き止め論文にすることが出来ました。今後、マーカーのみならず最近増えているNAFLDにおける役割なども追求することができればと思っております。



折茂 達也 (サブチーフ)

今年度は肝胆膵外科学会高度技能専門医を取得し、最低限の目標は達成できました。しかし同年代の外科医たちの全国的な活躍をみていると、さらなる向上の必要性を学会のたびに感じています。また研究と論文作成に関しては当初の目標を大幅に下回っており、来年度の課題としたいと思います。



若山 顕治 (サブチーフ)

肝胆膵グループでも主に肝臓を担当し、今年で6年目となりました。最近も高度進行肝癌症例の診療にあたることが多い状況ですが、グループ一丸となって、綿密な治療計画の策定および実行を心がけており、幸い大きな問題もなく日々の診療にあたっております。このような環境のなかで診療経験を積ませていただき、今年はかねてから準備を進めてきた肝胆膵外科学会高度技能専門医に申請することができました。現時点では合否は不明ですが、晴れて取得できたあかつきには、後進の資格取得に向けた指導やサポートなどが今後の自分の役割となろうかと思います。肝臓外科領域は一部特殊なところもあるかと思いますが、継続的な人材の育成体制を維持していくことが重要であると考えます。これからも、自己研鑽に加え、後進の指導においてもお役にたてるよう、日々まい進してきたいと思います。



島田 慎吾 (インストラクター)

病棟インストラクターの島田慎吾と申します。今年は肝胆膵グループへ配属されて3年目の年となりました。現在、定型の手術から高難度手術まで安全・確実に施行しうる肝胆膵外科医を目指して修練中です。

日々、臨床・研究ともに全力で取り組んでおりますが、なかなか満足できるアウトカムを達成できず、反省しております。しかしながら、できることを確実に地道に取り組んでいく所存であります。

今後ともグループ、教室全体の発展に寄与できるように微力ながら尽力したいと思います。



長津 明久 (インストラクター)

昨年度の九州大学第二外科への国内留学を経て、今年度から大学の肝胆膵グループで病棟インストラクターをしております。7年ぶりとなる大学病棟勤務で慣れるのに時間を要した一年となりましたが、最近では徐々に全体の仕事にも手を付けることが出来てきています。また、個人的には今年度内視鏡外科技術認定医と消化器外科専門医を取得することができ、比較的充実した一年でもありました。しかし、アカデミックな活動に関しては十分とは言えず、今年のそして来年度の課題としようと思います。

微力ではありますが、今後は腹腔鏡の経験と肝臓・移植を学んできた国内留学の経験を活かして臨床・教育・研究において教室の発展に尽くして行きたいと考えております。

現在の取り組み

〈肝臓〉

北海道の特徴としてHBV関連HCCが多く、大型HCCの外科的治療を行う機会が非常に多い。これらの手術は高難度手術とされ、高い技術を要求されるため、手術の安全性の向上を常に目標にしながら日々の臨床を行っている。大型HCCの切除方法の工夫、肝移植の手技（体外バイパス下での肝切除）などを取り入れている。Major肝切除が必然的に多くなることから、新規の肝予備能評価法としてGSAシンチを用いた機能的肝予備能評価の有用性を検討しつつ、進行HCC切除後に多い肝細胞癌多発再発に対する治療法としてIA-call+UFTを導入しその治療効果、遠隔転移再発に対するネクサパールの治療効果を評価している。一方、肝切除の低侵襲化を目指し、腹腔鏡下肝切除を積極的に導入している。周術期管理はERASプロトコルをクリニカルパスに導入している。胆管細胞癌では肝門型、末梢型の生物学的特徴の評価とリンパ節廓清の有無を含めた治療方針を検討している。

多発転移性肝癌に対しては、抗がん剤をどのタイミングで行うかなど、新しい治療方針の策定を目指している。さらに北海道特有の疾患である高度進行肝エキノコックス症に対する治療を肝切除技術の進歩、向上から構築することを目指している。

〈胆膵〉

1. 局所進行膵癌患者に対するMetformin併用術前放射線化学療法の有効性の検討
2. PK-NACRT-Gmet試験」 UMIN000017694
3. 胆膵悪性腫瘍術後の補助療法としてのS-1週4日投与の効果
4. 肝門部胆管癌における門脈塞栓術後の肝再生と肝線維化が術後肝不全に及ぼす影響の解析
5. 肝門部胆管癌における血管胆管3D-fusion imageを用いた手術navigationの有用性
6. 膵癌術前放射線化学療法によるSMA周囲神経叢浸潤への治療効果と縮小手術の可能性に関する研究
7. 膵癌同時性肝転移症例に対する外科治療の介入に関する検討

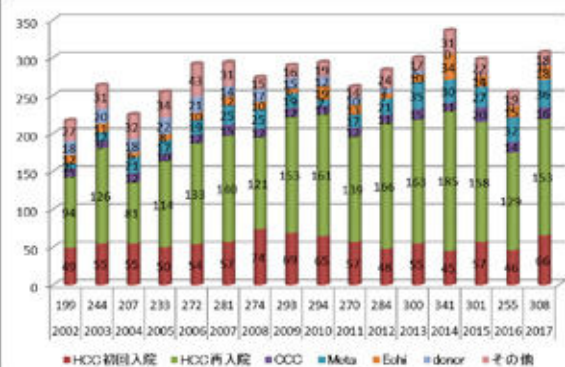
■臨床研究

1. 慢性膵炎による難治性疼痛に対する外科治療 施行症例の検討-多施設共同後向き観察研究-厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究班 難治性膵疾患に関する調査研究
2. 慢性膵炎に対する外科治療の実態調査と普及への課題解析 -多施設共同後向き観察研究- 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究班 難治性膵疾患に関する調査研究
3. 切除不能胆道癌に対するGEM/CDDP/S-1とGEM/CDDPを比較するランダム化第Ⅲ相試験 Kansai Hepatobiliary Oncology Group (KHBO) 関西肝・胆道オンコロジーグループ KHBO1401 BTC GCS vs GC Randomized Phase Ⅲ UMIN 000014371
4. 膵全摘患者に対する前向き実態調査 UMIN000018763

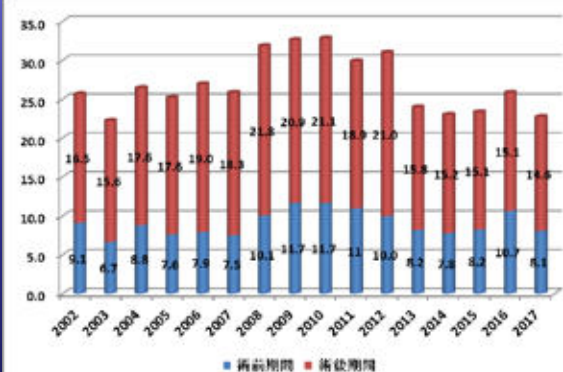
■基礎研究

1. 抗mesothelin抗体を用いた細胞接着阻害が膵癌細胞に及ぼす影響の解析
2. 膵癌細胞株を用いた癌幹細胞の多様性と役割の解析、および癌幹細胞をターゲットにした治療法開発に関する基礎研究

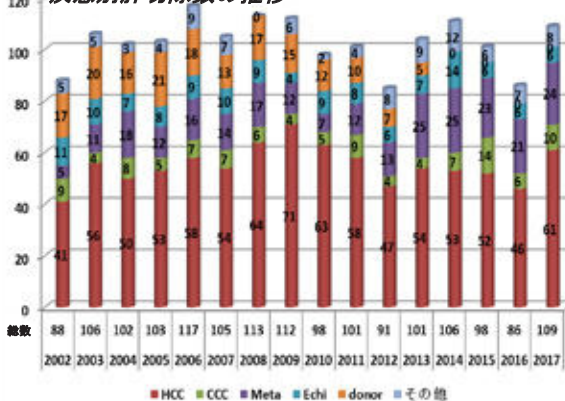
疾患別入院患者数の推移



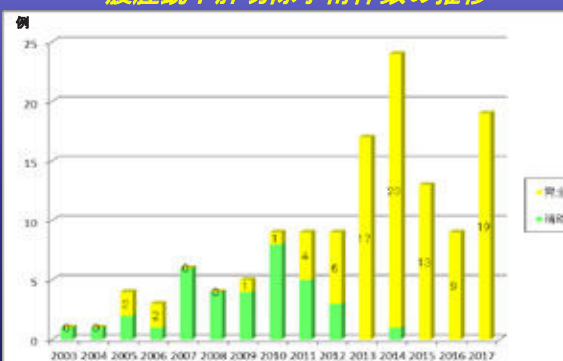
HCC肝切除例の平均入院期間



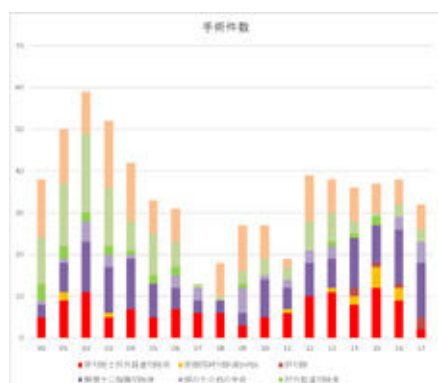
疾患別肝切除数の推移



腹腔鏡下肝切除手術件数の推移



手術件数



■ 移植グループ

《スタッフ紹介》



嶋村 剛 (チーフ)

北大病院における第1例目(1991年)の生体肝移植に続き、1997年から本格的に始動した肝移植プログラムに開始当初から参加し、成人生体肝移植183例、小児生体肝移植75例、脳死肝移植49例、脾腎同時移植6例、脾単独移植3例に従事しました。肝移植総数は307例となり、ここ5年間の術後生存率は生体・脳死肝移植ともに95%以上となりました。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植にゆっくりと移行しつつあります。成功率を考慮しつつ生体肝移植と脳死肝移植を症例毎に的確に選択すること、後進へのハンドオーバーを進めていくことがこれからの主眼です。臓器提供推進を目的とした公益財団法人北海道移植医療推進財団の副理事長としても活動しています。北大病院では臓器別診療に向けた病棟改編が始まりましたが、変化に応じ対応したいと考えています。



後藤 了一 (サブチーフ)

当院の2017年肝移植医療は、2016年の脳死中心から再び生体中心となりました。胆管癌に対する移植をはじめ、高齢ドナーのアラジールなど稀な症例から貴重な臨床経験を得ると共に、日々の臨床からも多くを学ばせて頂きました。また元気に退院する症例を積み重ねることで、患者-医療者、医療者間、施設としての信頼を積み重ねた1年であったと思います。研究においては当初からの目標を少しずつ達成している実感はあるものの、日進月歩の研究速度に追いついていないもどかしさも感じています。

今年は血液型不適合移植を見据えた安全な肝移植治療の提供と益々の症例数増加に努力したいと思います。研究面では新しいツールと知識の獲得に向けて現状の刷新に努力したいと思います。



渡辺 正明 (インストラクター)

本年は、生体肝臓移植・脳死ドナーから提供を受けての脳死肝臓移植を定期的に行いました。脾臓移植を含め、今後さらなる成績の向上を目指してゆきます。研究面では、移植における免疫寛容誘導の機序解析、新しい移植分野としての細胞移植や脾臓移植の臨床応用を見据えた基礎的研究を行ってきました。これら研究をさらに進め、臨床の現場で大きく貢献できることを目標にしております。これまで携わってきた基礎研究を積み上げて、臨床移植における新しい治療法の開発・臨床試験、そして免疫寛容を目標とした臨床試験に向けてさらなる努力をして参ります。



腰塚 靖之 (インストラクター)

移植グループの腰塚です。だんだんと月日の経過を早く感じるようになり、今年は例年以上にあっという間に1年が過ぎ去り、自分のすべきことがほとんどできずに終わってしまいました。来年は、自分の目標を見据えてぶれることなく、臨床、学会発表、論文作成、後輩指導に邁進します。移植を通じて一人でも多くの患者さんのお役に立てることができるよう頑張りたいと思います。



川村 典生 (インストラクター)

2017年は北大の肝移植総数が300例を超える、記念すべき年となりました。これまで支えてくださった皆様に、感謝申し上げます。

臓器移植ネットワークの方のお話によると、2016年は脳死下腹部臓器摘出（肝臓＋膵臓）を最も行った病院は北大病院だったらしく（公式発表ではありません）、その全例に参加させていただきました。残念ながら2017年は少し数を落としてしまいましたので1位の座からは陥落しそうです。移植適応となる紹介患者さんはいらっしゃるのですが、生体ドナーが見つからず・また脳死移植が間に合わず移植に至らない患者さんが未だ多いのが現状です。2017年からは我々移植グループの若手もドナーアクション等に参加を始め、現状の打破に努めております。これからも御指導御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



太田 稔 (臨床工学技士)

ME機器管理センター技師長を拝命し2年目となりました。臓器移植医療部には立ち上げから十数年携わって参りましたが、全国的にも臨床工学技士が肝移植に関与することは極めて珍しく学会などを通じ啓蒙活動が続けております。今年も肝不全患者さんの血液浄化療法や脳死下臓器提供時の手術、肝移植レシピエント手術のお手伝いをさせて頂きましたが、最近は優秀な後輩達が診療の中心となり自分はサポートに回ることが増えてきました。日々増え続ける日常業務に忙殺されておりますが初心を忘れることなく頑張りたいと思います。



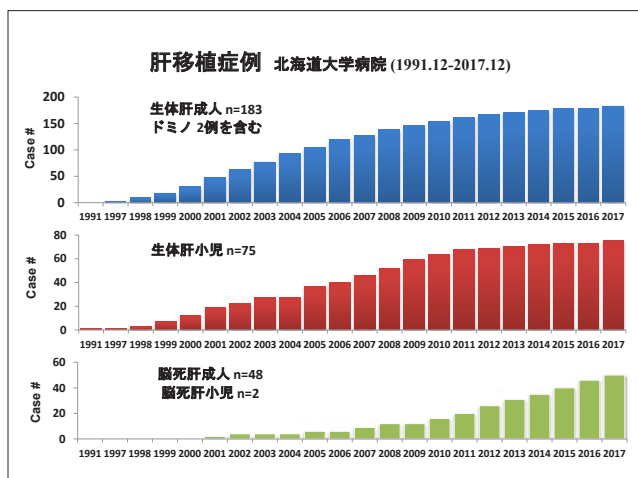
岡本 花織 (臨床工学技士)

移植医療に関連する血液浄化療法および手術関連業務に携わらせていただいている臨床工学技士です。血液濾過透析や血漿交換等の血液浄化に携わり、患者さんの状態の変化を見ていく中で、自分の知識不足を痛感することが未だにあります。血液浄化の分野は奥が深く、その分野でのスペシャリストとして自信をもって治療のお手伝いができるように、努力してゆかなければと思っています。先生達から様々な刺激を受けながら、安心と安全の医療を提供するために頑張っていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

現在取り組んでいること

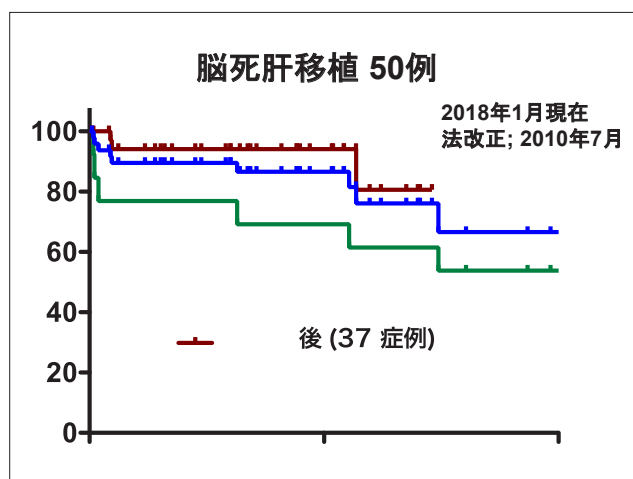
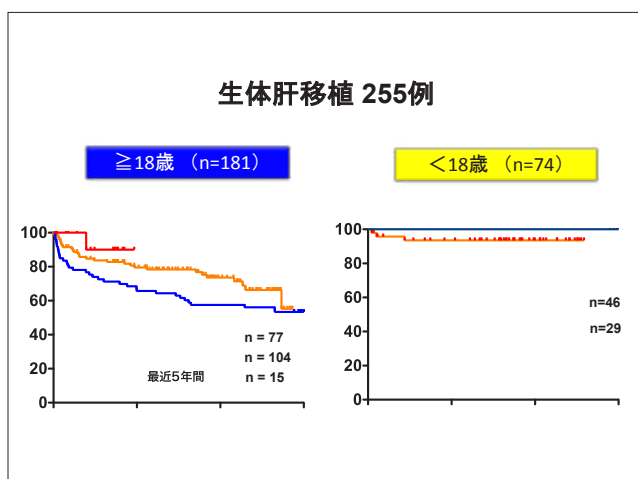
1. 脂肪肝グラフトのミトコンドリア機能と抗酸化能を増強する画期的な肝体外灌流法の開発
2. ヒト血管移植片に対する抗ドナー抗体の病的意義と免疫抑制性細胞による治療効果の検討
3. 膵島移植における長期グラフト生着のための治療法の開発
4. 慢性拒絶反応における血管平滑筋細胞に対する制御性T細胞の効果の検討
5. 脳死肝移植待機患者の栄養評価および栄養療法の最適化に関する臨床研究
6. 小児肝移植後患者に対する弱毒生ワクチンの安全性に対する臨床研究
7. 小児肝移植患者に対する、疾患・服薬教育システムの確立
8. ドナー安全性の調査報告
9. 血液型不適合肝移植の確立
10. 膵臓移植後の1型糖尿病再発についての多施設共同研究
11. 血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究：厚労省エイズ対策事業・江口班
12. 多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化：前原班
13. De novo HCC, CKDに対するDAA, HBVに対するワクチン、拒絶反応とDAAなど。
14. 原発性胆汁性肝硬変に対する肝移植後予後因子に関する多施設前向き研究（多施設共同試験）
15. 生体肝移植後リンパ増殖性疾患の全国調査
16. アコアランの移植後周術期の効果





当科における肝移植症例
1991.12-2017.12

生体肝	成人	181
	小児	75
脳死肝	成人	48
	小児	2
	ドミノ	2
合計		308



■ 消化管グループ

《スタッフ紹介》



川村 秀樹（チーフ）

大学に赴任して2017年12月現在で4年9か月が経過しました。消化管グループのチーフを務めるにあたり症例数の増加、腹腔鏡下手術割合の増加、論文業績の増加などを目標にやってまいりました。優秀なスタッフに支えられ、それらが着実に進んでいることをうれしく思っております。また、学内だけではなく、関連施設を含めた内視鏡手術の普及にも取り組んでまいりましたが、教室関連の技術認定医取得者数も赴任前の約6倍に増加し、今後もさらに増加していく見通しです。関連施設の皆様のご協力に感謝申し上げます。



本間 重紀（サブチーフ）

下部消化管（小腸、大腸）を担当しております。大腸癌、潰瘍性大腸炎、クローン病の外科治療を中心に診療しております。何れの疾患においても、術前、術後の薬物療法の重要性が増しております。手術のタイミングを含めた、最適な治療法の選択を消化器内科・光学診療部、炎症性腸疾患グループ、化学療法グループの先生方と連携しながらおこなっております。また、地域の先生方からのご紹介、ご支援をいただき、着実に手術件数を積み上げてきております。安全第一をモットーに、また迅速に対応できるよう、グループ一丸となって尽力いたします。

第一外科関連施設の皆様とともに、多施設共同臨床試験をおこなっていき、北海道から独自のエビデンスを発信できればと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



吉田 雅（サブチーフ）

今年最も印象に残っている出来事は、前向きランダム化比較試験の自主臨床研究「腹腔鏡下大腸手術前処置におけるアスコルビン酸含有PEG腸管洗浄剤の有効性と安全性に関する検討（通称：TLUMP試験）」を開始出来た事です。臨床研究に対する規制が強くなり、前向き臨床研究を行うためには、緻密な計画と十分な準備期間が必要であることが分かりました。腹腔鏡下大腸切除術前の患者様に対し、2種類の下剤をランダムに割り付けて、服用してもらい、その効果を検討するものです。現在、札幌厚生病院、北大病院の共同研究で順調にスタートし、岩見沢市立病院、KKR札幌医療センターにも加わって頂いて、4施設共同で行う準備を進めています。武富教授をはじめ、共同研究実施施設の先生方には心より御礼申し上げます。

話は変わりますが、昨年に引き続き研修医係を拝命しております。今年は6名の先生方が入局宣言をして下さいました（2017年12月現在）。関連病院の先生方が、研修医の情報を提供し、勧誘の飲み会などにも積極的にご協力下さっているおかげと、感謝致しております。今後も、外科を考えている研修医がいましたら、お声をかけて頂けると幸いです。どうぞ宜しくお願い致します。



市川 伸樹 (インストラクター)

大学に戻りましてから、①腹腔鏡下直腸切除の技術向上、②大腸癌における術前化学療法の位置づけの究明、③ステージ4大腸癌における手術療法の位置づけの究明、の3つを個人的なテーマとして考えて参りました。①に関して。大学に戻って2年間で、ご指導のもとに上達を自覚しており、技術認定はほんの入り口に過ぎなかったと感じております。今後も目指すレベルに達せられる様、更なるステップアップを目指して努力して参りたいと思います。②に関して。現在データ集積を行っているR-NAC01試験の結果や、大腸癌肝転移における術前化学療法の効果検討など参考にしながら、進行直腸癌における術前化学療法の至適方法やその意義について究明して参りたいと思います。③に関して。切除不能大腸癌において原発巣の姑息切除が予後を改善するのか、あるいは、どんなケースにメリットがあるのか、科学的根拠を含めて究明して参りたいと思います。

現在進行中の臨床研究も同様なのですが、本年アクセプトされた論文はいずれも、関連病院の諸先輩や先生方の御協力を賜らない限り、ゴールし得ないものでした。この場をお借りし、心から御礼を申し上げたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。



大野 陽介 (インストラクター)

大学病棟勤務となって2年目を終えました。昨年度に引き続き、胃癌、大腸癌を中心に内視鏡外科手術の修練を積んで参りました。昨年度のビデオと比較して上達は感じるものの、まだまだ改善点や理解不足のポイントがあり、より一層の努力が必要と考えました。今年度は、消化器外科専門医を取得でき目標の1つを達成できたと思っております。また、内視鏡技術認定医取得を目指して今年度は審査用ビデオを提出いたしました。春には吉報が届くことを期待しております。日々研鑽を重ね、来年はさらなる飛躍の年を目指したいと思います。今後とも、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

グループでの取り組み

特定臨床研究

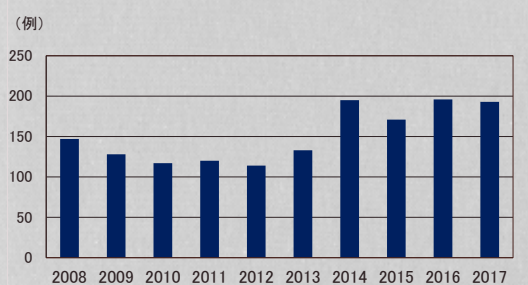
1. 進行胃癌 (Stage II, III) に対する腹腔鏡下胃切除の有効性、安全性に関する検証的臨床研究
2. 治癒切除不能 (Stage IV) 胃癌に対する姑息的腹腔鏡下手術の完遂率および安全性に関する探索的臨床研究
3. 局所進行直腸癌に対する術前化学療法後の手術の安全性に関するPilot study

4. 腹腔鏡下大腸手術前処置におけるアスコルビン酸含有PEG腸管洗浄剤の有効性と安全性に関する検討
5. 手術支援ロボットを用いた直腸腫瘍に対する腹腔鏡下直腸切除/切断術の探索的臨床研究

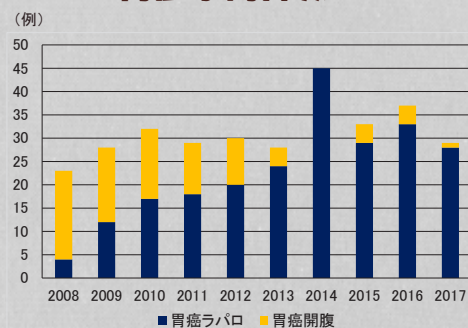
鏡視下手術教育

1. 研修医に対する基本手技教育 (ドライ・アニマル)
2. 後期研修医からの鏡視下アドバンス手術執刀経験
3. 関連病院を含めた内視鏡外科学会技術認定医取得支援

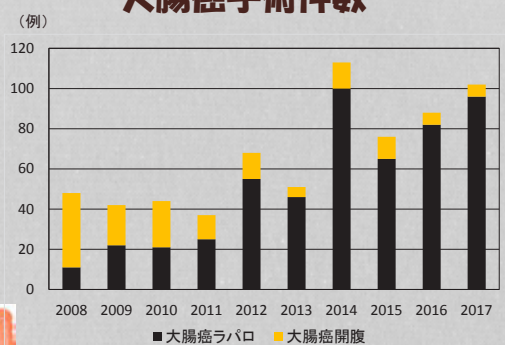
消化管G手術件数



胃癌手術件数



大腸癌手術件数



■ 小児グループ

《スタッフ紹介》



本多 昌平 (チーフ)

小児外科グループのチーフを任されてはや4年目に突入しました。昨年は宮城先生・湊先生に我儘を聞いていただき約5カ月半にわたってニュージーランドのダニーデンにあるオタゴ大学へ留学させて頂きました。肝芽腫の分子生物学的研究を国際共同研究として発展させる上で非常に有意義な経験となりました。また外科医としてちょうど折り返し地点となるこの時期に一旦職場を離れることで、仕事のみならず家族や海外から見た日本など多くの事をじっくりと考えて見直す大変貴重な時間を持てたことを心より実感しています。今後これらの経験を十分に生かしながら、6月より加わってくれた荒先生からの新しい風を取り入れて、小児外科グループ全員が一丸となって臨床・研究・教育をより一層充実させていけるよう邁進していく心積もりです。

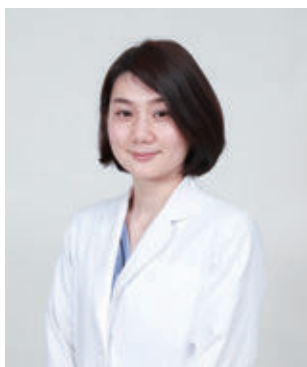


宮城 久之 (サブチーフ)

チーフの本多先生のもと、6月からは荒先生も加わり、スタッフは3人体制で行っておりますが、実際には留学などで人手不足の中（申し訳ありません）、縦横無尽に駆け回っております。

小児に対しては、特にきめ細かい診療が求められ、応えていかなければいけないですが、後期研修医の先生方にも執刀含めて積極的に診療の中心となって活躍してもらっています。日々成長されているのを頼もしく感じています。

外科専門医資格取得のための経験は勿論、国内・国外留学含め多施設の協力を経て、小児外科専門医としての修練に対しても力を入れています。益々魅力ある小児外科を、関連病院の先生方も含め、みんなでつくっていきたいと考えております。



荒 桃子 (インストラクター)

6月より小児グループに配属となりました。北海道生活、北大勤務も半年を過ぎ、ようやく大まかな流れが掴めてきたところです。グループの先生方や後期研修医の先生方に支えられ、どうにか無事に過ごせました。

来年度は病棟再編に伴い小児外科グループが小児病棟へ移動するとのことで、これまで以上に小児科をはじめ、他科の先生方と顔の見えるコミュニケーション、垣根の低いグループを目指し小児医療全体に貢献していければと思います。また、研究活動に関してはこれまで全く手付かずでしたので、何かテーマを見つけ取り組んでいければと考えています。まだまだ不慣れですが、もっとグループに貢献できるよう頑張ってまいりますので、引き続きご指導よろしくお願いいたします。

現在の取り組み

・2017年に取得した競争研究費

【本多 昌平】

基盤研究 (A) (海外学術調査) (H28 ~ H31) 分担
小児がん研究グループによる小児肝がんの海外診療状況調査と国際共同臨床研究基盤整備500 (10,400) 千円

基盤研究 (C) (一般) (H27 ~ H29) 代表
肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
1,300 (3,700) 千円

挑戦的萌芽研究 (H28 ~ H30) 分担
肝芽腫局所進展に関わるドライバージェノム変異の解明
1,100 (2,900) 千円

【宮城 久之】

基盤研究 (C) (一般) (H27 ~ H29) 分担
肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
1,300 (3,700) 千円

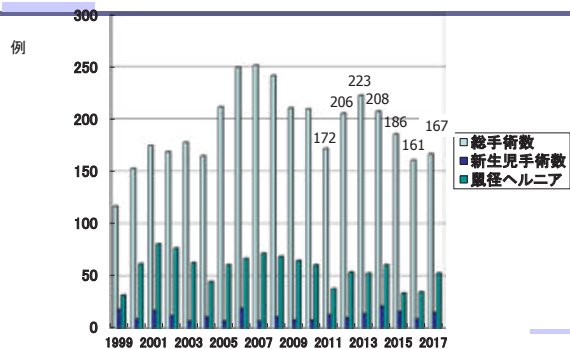
挑戦的萌芽研究 (H28 ~ H30) 分担
肝芽腫局所進展に関わるドライバージェノム変異の解明
1,100 (2,900) 千円

2017年診療実績 (1月~12月)

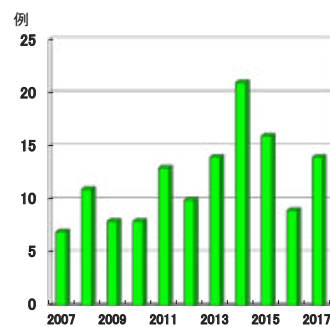
1. 外来実績
月曜、金曜の午前を中心に、15~25名/日程度、年間で延べ1,600名程度を3名体制で行っています。
2. 病棟実績
延べ入院患者数 (新生児、小児腫瘍含む) : 200例程度
3. 手術件数

総手術件数	167例
新生児症例	14例
小児固形腫瘍	10例
鏡視下手術	60例

小児外科の年間手術数



新生児手術数

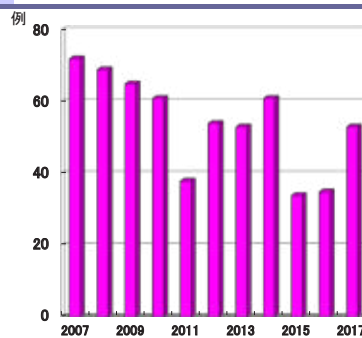


新生児症例の内訳

手術症例 14例		
先天性十二指腸 or 小腸閉鎖症	根治術	4
先天性空腸閉鎖 + 結腸閉鎖症 + 鎖肛	ストーマ造設術	1
先天性横隔膜ヘルニア	根治術	1
中腸軸捻転	腸切除術	1
鎖肛	肛門形成術、ストーマ造設術	2
仙尾部奇形腫 + 尿生殖洞遺残	腫瘍摘出術	1
先天性水頭症	VPシャント	4

その他: NEC, Catrell synd., CPAM/CCAM, リンパ管腫, Hirsch疑い 総数 25例

鼠径ヘルニア手術数



小児固形腫瘍の内訳

手術症例 10例		
神経芽腫	腫瘍摘出術	2
	生検術	2
Wilms腫瘍	腫瘍摘出術	1
仙尾部奇形腫	腫瘍摘出術	1
卵巣未熟奇形腫	腫瘍摘出術	1
副腎腫瘍	腫瘍摘出術	1
その他 (Myeloid sarcoma, Lymphoma)		2

主要手術疾患の内訳

鎖肛 (5例)

会陰式肛門形成術	1
ストーマ造設術	3

ヒルシュスプルング病 (2例)

経肛門的Soave法	1
開腹下Soave法	1
直腸粘膜生検 (便秘精査含む)	10

その他

- 食道閉鎖根治術・食道バンディング解除
- 十二指腸狭窄
- 胃食道逆流症
- 尿管摘出術
- 脾摘術

鏡視下手術

術式	例数	疾患
腹腔鏡補助下副腎腫瘍摘出術	1	アンドロゲン産生腫瘍
腹腔鏡下噴門形成術	1	胃食道逆流症
腹腔鏡下虫垂切除術	4	急性虫垂炎
腹腔鏡下脾臓摘出術	1	ITP
腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術 (LPEC)	50	鼠径ヘルニア
胸腔鏡下肺葉切除術	3	CPAM/CCAM

2017年教室紹介

〈研究部門〉

■ リサーチ統括部長より

消化器外科学分野 I における研究の概要



(リサーチ統括：深井 原)

研究体制の枠組みと、Bedside to bench、Bench to bedsideの方向性はこれまでと変わらず、肝胆膵G、消化管G、移植G、小児Gの臨床と研究が行われています。

内科医、基礎医学（病理、分子生物学、生化学、免疫学）、分析化学、薬学等のコラボレーションがオールジャパンの体制で進んでいます。そこで重要な役割を演じているのは、Tissue bankに収集された質の高い生体試料と臨床情報です。Tissue bankの有用性が国内から海外の研究機関に至るまで認知され、われわれとのコラボレーションが希望されています。先人から受け継いだ貴重な財産が医学研究に役立っていることは誠に喜ばしいことです。しかし、Tissue bankの重要性が認知され、注目されるとともに、これまで以上に患者さんの同意や同意撤回、個人情報保護、ゲノム解析の取り扱い等々に関して厳しい規制の下での運用が求められます。年々変遷する、研究を取り巻く諸々の規則に随時対応していく体制、コンプライアンスが問われています。

教室では研究専従の要員として早坂孝宏(特任助教)を迎え、私(深井)、小林希、堀米正敏、五十嵐瑠美、三好早香のメンバーで研究活動のインフラを整備しています。具体的には、実験者がすぐに着手できるように、Tissue bank関連はもとより、組換え実験や動物実験に関する実験室設置、整備、実験計画等について倫理委員会の承認を得て、活動を推進しています。技術面でも、PCR、Western blot、免疫染色、細胞の蛍光ライブイメージング、遺伝子のノックダウン、強制発現、組み換え、遺伝子編集、種々のELISA等々、多くの基本的研究手法がすぐに着手できる状態にあります。特に細胞の生死、エネルギー状態に関与するミトコンドリア機能、酸化ストレス、アポトーシス、オートファジー、細胞内Ca²⁺濃度、細胞内pH、細胞内redox、タンパク質や脂質の網羅的解析等の方法論は研究分

野を問わず活用できる技術であり、いつでも実施できます。新たに研究に入る先生方には、これらのインフラを十分に活用し、無駄なく成果が出してください。

Tissue Bank登録症例は2017年11月1日の時点で、147例が追加され(肝切除症例 75例、大腸癌43例、胃癌 3例、胆管癌 7例、胆管細胞癌3例、膵臓癌 7例、その他9例)、総数は5193例となりました。これまでにのべ1000例の生体試料が当科内の研究に供され、共同研究期間にはのべ1629例の試料が供与され、知見を世に発信してきました。また、新規症例では癌部、非癌部の線維芽細胞、肝細胞、癌細胞の初代培養も行い、遺伝子背景、背景肝の状態が異なる様々な肝細胞癌、あるいは、線維芽細胞の培養、ストックに成功しました。これらの線維芽細胞のストックは癌の微小環境における細胞間相互作用の解析をはじめ、幅広い研究分野に活用できる細胞リソースとなり、今後のTissue bankのステップアップに不可欠なマテリアルとなります。引き続き臨床、研究それぞれの立場で役割を果たし、将来の研究のための試料をコツコツ増やしていただければ幸いです。

今年度の研究費取得状況は、新規採採が基盤C 3件、若手B 1件、新規・継続合わせて19件、AMED 6件と併せて25件でした。挑戦的研究の採採が極めて難しくなったので、採採率が比較的高い若手B、基盤Cが確実に採採されるように、スタッフが若手の申請書作成を指導しなければなりません。企業からの研究助成も民間財団なみの研究計画、資金計画、成果報告が必要になりました。臨床の傍らで研究助成申請のための膨大な書類を作成するのは、生半可な気持ちではできないと思います。このような厄介な状況は考え次第ではチャンスでもあります。民間財団の研究費申請は、医学研究科内の選考を通過するのが難しいのに対し、病院長推薦を得るのは容易です。病院所属のスタッフ、医員は是非トライしていただきたいです。今年度は民間財団・企業助成金 合わせて23件を獲得しました。具体的な金額は記載いたしません、及第点は得られたかと感じております。しかし、エントリーすらしていないグラントがあることも事実なので、皆様の積極的なグラント申請をお願い申し上げます。また、同門の先生方からのご寄付、ご助力が教室運営の多大なサポートとなっております。教室員各位におかれましては、諸先輩のご助力に対する感謝を忘れず、教室員として仕事を進めていただきたくお願い申し上げます。

世の趨勢は専門領域に細分化し、ナンバー外科を無くしていく方向に舵を切り始めたことは周知のことですが、今こそグループの垣根を超えた情報交換の重要性を再認識する必要があります。当科の研究は異なる専門分野の研究内容がクロストークするところに大きな意義があります。癌細胞を死滅させる方法、移植細胞・臓器を修復する方法、相反する方向性の研究を進めており、生存シグナル、細胞死シグナル、エネルギー産生、オートファジー、増殖等々を概ね

逆の方向に制御したいニーズがあります。誤解を恐れずに言えば、悪性度の高い癌細胞の分子生物学的特性を短時間、一過性に発現させることが、移植臓器の修復には有用なはずで、このような視点で各グループの研究を俯瞰すると、日々のカンファレンスの中に多くのヒントが眠っています。リサーチカンファレンスが、そのような知的好奇心がぶつかり合う場として発展することを目指すべきと考えています。

研究専従

1. 研究テーマ・概要

今年4月に当教室のリサーチ部門に着任しまして研究のサポートをさせていただいております。これまでに三菱化学生命科学研究所、岡崎統合バイオサイエンスセンター、浜松医科大学、北海道大学保健科学研究院で研究を行ってきました。その間に新規タンパク質の精製と探索、極低温位相差電子顕微鏡によるタンパク質の単粒子解析、イメージング質量分析法 (imaging mass spectrometry: IMS) の開発、IMSによる食品成分の有効性と体内動態の解析に携わってきました。特に浜松医科大学で進めてきたIMSの開発は、私の研究生活において重要な仕事となっております。

IMSとは顕微鏡法と質量分析法を組み合わせた手法です。顕微鏡法は一般的に知られているように組織や細胞を観察し、その形態を調べる手法です。質量分析とは分子をイオン化させることによって重さを測定する技術です。さらに特定の分子に対して過渡のエネルギーを与えると分子特有の開裂パターンが得られ、この多段階質量分析の結果から分子構造を解き明かすことができます。これらの技術を融合したIMSではスライドガラスに乗せた組織切片に対してレーザーを照射することによって様々な分子をイオン化し、様々な分子の重さで構成される質量スペクトルを取得します。この質量スペクトルを組織上の一点一点から取得することによって、様々な分子の組織上における分布をマッピングすることが可能になります。特に消化器外科領域で多く扱われる癌組織の場合には、癌および非癌部を含む一枚の組織切片を解析することにより癌部において特異的に増減する分子群を明らかにすることが可能となり、その合成と代謝経路を調べることによって癌の進展メカニズムの一端を明らかにすることが期待できます。浜松医科大学在籍時には本手法を確立するだけでなく、島津製作所とIMS用の装置やソフトウェアを共同開発し、iMScopeという装置の販売開始まで携わることができました。一方で食品成分の動態解析では微量成分の検出を必要とするため、液体クロマトグラフィー質量分析 (LC/MS) の技術も導入しました。LC/MSは多くの研究室に導入されている技術であり、組織や細胞から抽出した脂質やタンパク質などを含む試料液をLCシステムで分離し、連続的に質量分析でイオン化・検出・構造解析することが可能です。この技術を用いることにより細胞に対してストレスを掛ける前後の発現プロ

ファイルの差を網羅的に解析するといったスクリーニングを行い、解析すべきターゲット分子を絞り込むことが可能になります。さらにはIMSとLC/MSの技術を融合することによって、ターゲットとなる成分が微量であっても検体中のどこにどれだけ含まれているかを明らかにすることができます。

自身の研究テーマとして、当教室が運営するTissue Bankに保管される大量試料から選定したヒト肝癌組織領域において特異的に変動する分子のIMSによる探索を進めています。これまでのIMSによる癌組織の解析では、5-10mm角の組織切片をスライドガラスに数枚ほどを貼り付けて分析していました。この方法では多くの検体を解析することが難しく、分けて解析するためデータ補正が必要となってきます。私が採用する方法では組織マイクロアレイ (tissue microarray: TMA) を作製し、数百の組織を載せたスライドガラス上を一斉にIMS解析することが可能になります。IMSでは組織上で多段階質量分析を行い、その分子開裂パターンから構造を明らかにすることも可能です。しかしながら微量分子については困難であることが想定されることから、LC/MSも併用した解析を行うことになります。これらの分析において数百の検体から予後を含めた様々な情報をデータ解析の項目に含めることによって、より信頼性の高いターゲット分子の探索が可能になると考えています。さらには高発現型および低発現型のヒト由来肝癌細胞においてターゲット分子を発現調節することにより、癌進展メカニズムの一端を解析することが可能であり、将来的に抗癌剤の開発につながることを期待できます。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

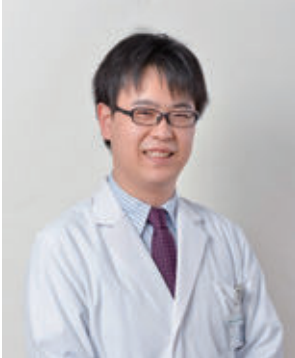
今年5月に個人情報保護法が改正されました。特に多くの研究プロジェクトがTissue Bankに紐付されていることもあり、それらすべての研究倫理申請書の修正に大変な労力を割くこととなりました。現状としては問題なく倫理委員会の承認を得ておりますが、Tissue Bankに関しては時代の変化と共に申請書のさらなる修正が必要になるものと考え、来年度に実施する予定です。

これまで医学部南棟5階で実施していた動物実験を医歯学総合研究棟7階へ全面移行しました。それに伴い、これまで動物実験を行っていた実験室をヒト切除肝組織初代培養、LC/MS分析およびIMS分析に対応したレイアウトに切り替えしました。初代培養用に倒立顕微鏡、LC/MS分析用に小型冷却速心機やインキュベーター等の装置を導入し、充実した研究環境を整えました。

自身の研究に関してはヒト病理検体を扱うにあたって研究倫理申請書の承認取得が必要だったこともあり、動物モデルを用いたTMAに関する基礎検討を中心に進めてきました。来年度はヒト肝癌TMAを作製し、IMS分析を進めます。また組織から抽出したタンパク質溶液のLC/MS分析も並行して進め、癌部特異的に変動する分子を特定することを予定しています。

■ 研究グループ紹介

移植グループ



巖築 慶一（2009年卒）



渋谷 一陽（2010年卒）

研究テーマと概要

現在、移植グループは移植免疫グループと細胞移植グループとに分かれ、それぞれ巖築（移植免疫、2009年卒）、渋谷（細胞移植、2010年卒）が研究に従事しております。

移植免疫グループ

臓器移植において、局所での免疫応答が移植片(グラフト)の生着に重要であり、特にグラフト局所での制御性T細胞の増加が免疫応答の制御に関与していることが動物モデルで報告されています。また、移植後の免疫抑制剤の開始時期は移植免疫における重要な問題の一つと認識されており、移植直後2～3日は免疫抑制剤の投与を控えた方が拒絶反応をより効果的に制御できる可能性があります。マウス心移植モデルでは免疫抑制剤の開始時期の調整により免疫寛容を誘導することも可能であり、その際にグラフト局所での制御性T細胞の増加を認めましたが、その成立の過程については明らかになっていません。我々は移植直後のグラフト局所での免疫応答の成立の過程をマウス心移植モデルを用いて明らかにする研究を行っています。

具体的には、移植後3日目の免疫応答が重要と考え、同時期にグラフト内に浸潤しているリンパ球を対象にその機能解析を行います。移植後3日の時点でグラフト内には一定数のリンパ球が浸潤しておりますが、非常に少数のためそのままではその免疫応答性を解析するのは困難です。そこで、移植後3日目のグラフトを取り出し、免疫不全マウスに再移植、グラフト内のリンパ球を免疫不全マウス内に再構築・増殖させることで機能解析を可能にする、マウス心再移植モデルを考案しました。モデルの作成に時間がかかりましたが、グラフトの再移植により免疫不全マウスにグラフト内リンパ球を再構築させることに成功し、驚くべきことに再構築の過程で

再移植片は拒絶されずに生着することを確認しました。今後はこの再構築されたリンパ球の機能解析を行い、この現象の詳細を解明していく予定です。

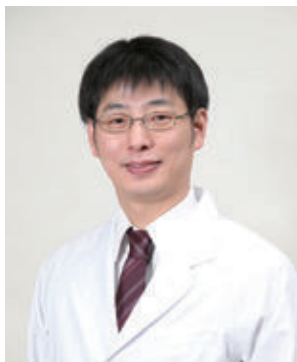
膵島・細胞移植グループ

1型糖尿病に対する膵島移植、肝不全や先天性代謝疾患に対する肝細胞移植は、再生医療分野の急速な発展もあり、その臨床応用の拡大が期待されている。我々はこれまでに膵島移植後早期膵島グラフト傷害の軽減法として、マクロファージや他の炎症担当細胞の活性において重要なNF- κ Bや、内因性修復受容体（IRR）に着目し、膵島移植時のNF- κ B抑制や、膵島単離時のIRR刺激がapoptosis、膵島傷害を抑制し、少ない移植膵島数でも糖尿病マウスの血糖が正常化することを報告してきた。膵島移植における移植グラフト長期生着のための治療戦略として、霊長類膵島移植における副刺激経路CD40-154抑制の有用性を報告してきたが、臨床生体肝臓移植における免疫寛容誘導試験の結果をさらに発展させ膵島移植、肝細胞移植への応用拡大を目指している。また、肝細胞移植の大きな問題である、移植後早期の移植された肝細胞傷の傷害や、長期生着が得られないことに対して、球状肝細胞の可能性に着目している。肝細胞を移植するためには、肝臓から肝細胞を単離精製し、必要十分量を1～2日にわたって繰り返し移植する必要があるが、これらのプロセスにより肝細胞間および細胞間構造が破壊・変性し、肝細胞機能は傷害をうける。単離肝細胞は、適切な条件下でアンカーされ培養されなければ、その機能は失われる。肝臓から単離精製された肝細胞を効果的に移植し、移植後の細胞傷害を軽減する新たな戦略が必要であり、細胞間環境や構造が生理的な状態に近く、また、構造的、機能的に単離肝細胞より優れている球状肝細胞に着目し、その有用性を検討している。

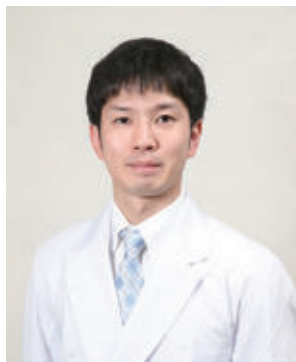
保存グループ



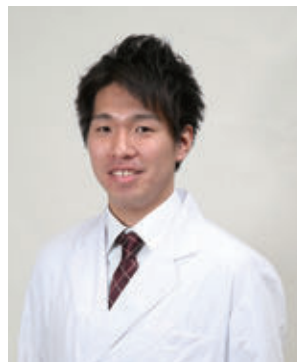
深井 原 (1994年卒)



梅本 浩平 (2008年卒)



柴田 賢吾 (2010年卒)



中藪 拓哉 (2016年卒)

今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

中藪拓哉：修士課程の大学院生として昨年度からお世話になっています。人工合成に成功した新規抗酸化物質を用いて、小腸冷保存再灌流障害の軽減法を探索し、作用メカニズムを解析しております。

今年度は昨年度に引き続き、小腸上皮細胞株を用いて、低温酸素化/復温モデル、低温低酸素/復温モデルを作成し、新規抗酸化物質の効果を検討した。何れのモデルにおいても、細胞死、酸化ストレス、ミトコンドリア障害を抑えることに成功しました。この細胞保護は、臨床応用されているデフェロキサミン、エタラボンと同等以上の効果であり、アスコルビン酸、トロロックス、エブセレンなどの既存の抗酸化物質よりも強い効果でした。その作用機序は、ラジカル消去による直接の抗酸化効果と随伴する生存シグナルの増強が主な作用機序と考えられました。さらに、本物質は抗酸化タンパクの発現誘導作用があり、多面的な細胞保護効果が発揮されることも見出しました。今後は、修士論文を日本語でまとめるとともに、英語論文化までできればと考えています。

二年間の大学院生活で多くの先生達のお世話になり、とても充実した研究生活を行うことができました。また、学会発表も経験でき、お世話になった皆様に感謝しております。満足度は現状 80%で、100%を目指して卒業前に論文化できるよう頑張っていきます。

柴田賢吾：肝移植におけるマージナルドナーの臓器提供を実現するための基礎的研究を行なっています。ラットの脂肪肝もしくは心臓死ドナーの肝臓を単純浸漬冷保存し、単離肝灌流を用いて新規抗酸化剤の検討を目標としております。まずは正常肝での単離肝灌流モデルの構築から行なっております。具体的な新規抗酸化剤として、AMPK系活性化剤 (AICAR)、

SIRT II 阻害剤 (AGK 2)、Nrf 2 活性化剤 (Bardoxolone methyl) といった薬剤を用いて、ストレス下でのタンパクのリン酸化、アセチル化を迅速に制御する方策を検討する予定です。現在モデルの構築を始めただけですが、動物実験手技の完成度など、満足度は70%程度と考えています。来年度中の国際学会発表を目指し頑張っていきたいと思います。

梅本浩平：H27年から研究を始めました。肝移植に置ける脂肪肝ドナーからの臓器提供を実現するための基礎的研究を行っています。脂肪肝ラットの肝臓を単純浸漬冷保存および低温灌流保存し、水素ガスや新規抗酸化剤の併用効果を検証する予定です。昨年度に引き続き肝グラフトの摘出、冷保存、単離灌流に夜再灌流などのモデル作成を行って来ました。単離肝灌流モデル自体は完成に近づいていますが、安定した脂肪肝モデルの作成に難渋しています。今後は脂肪肝モデルの冷保存再灌流（無治療コントロール）を作成し、データが安定したら治療として、1）再灌流時水素投与、2）新規抗酸化剤投与（冷保存、再 灌流時）、3）酸素化体外灌流（4、25℃）のいずれかでpositives dataが得られるように順次検討したいと考えています。モデルの完成度などを勘案し、満足度は60%と考えます。

深井原：臓器移植における非標準的ドナー臓器を対象に冷保存再灌流障害の軽減法を探索している。具体的には、単純冷保存の質の向上、酸素化灌流による臓器修復の方法論確立を目指している。多臓器摘出のワークフローを考慮すると、全臓器で現行法に対する非劣性が必要である。まず、冷保存障害を受けやすい心筋、小腸で有効な方策を創出し、さらに肝、腎、脾の長時間冷保存、心停止ドナー、脂肪肝での有効性確立を目指す。

心筋・小腸細胞：新規抗酸化物をUW液、UW-MP液に添加するのみで、冷保存時あるいは低温酸素化(灌流)におけるミトコンドリア障害、細胞死を軽減できることを明らかにした(中藪参照)。私が開発したFJ液が低温酸素化下でエネルギー代謝を促進することを既に確認したので、新規抗酸化物との相乗効果を検証したい。今後、心臓での効果のスクリーニングはランゲンドルフ灌流装置で行う(循環器外科で安定稼働中)。また、小腸の臓器レベルでの効果検証には、既に稼働中の単離肝灌流装置を用いて、小腸管腔内を種々の温度で酸素化灌流する(Luminal perfusion)。

肝臓：心停止ラット肝の冷保存再灌流障害を再灌流時の水素ガス投与によって軽減できることを単離肝灌流実験で示し、英文論文として投稿した(石川；Revise待ち)。また、脂肪肝の冷保存再灌流障害軽減、冷保存後の脂肪肝の酸素化修復灌流の実験系を立ち上げ、脂肪肝の作成、至適な脂肪化のprotocolなどを検討中である。

腎臓：移植件数が最も多い腎臓は酸素化灌流による臓器

修復が臨床応用されている。臓器灌流のスタンダードとなる灌流液、コンディショニング法は腎臓での有効性が非常に重要である。細胞の生存、エネルギー産生、細胞増殖等を促進する14-3-3ζの細胞保護効果を明らかにし、薬剤による機能増強法を探索した。尿管上皮細胞株でのコンディショニング法をもとに、心筋、小腸上皮、肝細胞でも同様にコンディショニングできることを確認した。単離肝灌流装置を用いて腎臓の灌流を行い、効果を検証する。

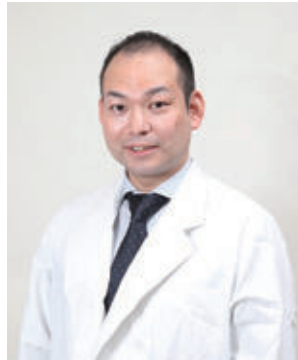
研究の進捗に関して、深井個人については満足度10%、グループとしては50%である。来年度以降は、オリジナルの臓器灌流液、酸素化灌流法の確立(至適温度、時間、添加薬)、体外灌流(再灌流)による効果評価、質量分析イメージング、LC-MS/MSによるタンパク、脂質解析、肝非実質細胞における現象の探索、などの幅広い実験系を活かした精査を進めていく予定である。大学院生と共に国際学会で発表し、論文のアクセプトを目指す。



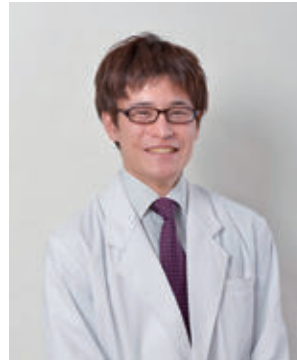
腫瘍(肝胆膵)グループ



岡田 尚樹 (2009年卒)



鈴木 崇史 (2009年卒)



脇坂 和貴 (2010年卒)



杉山 昂 (2010年卒)

1. 研究テーマと概要

〈肝細胞癌研究〉

近年、肝細胞癌は微小環境と呼ばれる癌周囲組織(線維芽細胞、免疫細胞、血管内皮細胞など)との相互作用において、癌増殖能・浸潤能・薬剤抵抗性などを獲得していることが判明しました。特に癌部の線維芽細胞は癌関連線維芽細胞(CAF: Cancer Associated Fibroblasts)と呼ばれ、SDF-1/CXCR4/AKT経路、Integrin/FAK経路、CCL2/CCR2経路など、多彩な経路の活性化を介して腫瘍進展を促進させると考えられています。肝細胞癌における微小環境の中心的役割を果たしているCAFに注目し、癌進展を制御する新規治療法の開発を進めております。

また、ジアシルグリセロールキナーゼ(DGK)はジアシルグリセロール(DG)をリン酸化してホスファチジン酸(PA)を産生する酵素で、DGKの基質と反応産物であるDGとPAには様々な標的タンパク質があり重要なセカンドメッセンジャーとして機能しているとされております。DGKにはその構造の違いにより、10種類のアイソザイムが存在しますが、中でもI型に分類されるDGK α は、肝細胞癌において発現と予後との相関や細胞増殖能との関連が報告されております。さらに、Tリンパ球のanergyを制御するとの報告もみられ、DGK α 阻害剤の肝細胞癌に対する直接的な抗癌作用および免疫系を介した抗癌作用を検証すべく研究を進めております。

さらに抗がん剤暴露により腫瘍細胞内のDGK α 発現が上昇する事も明らかになってきており、抗癌剤暴露による腫瘍細胞株およびT細胞でのDGK α 発現上昇を実証し、その分子機序の解明を目指しております。

またWnt/ β -カテニン経路を構成する分子(β -カテニン、APC、Axin)の遺伝子異常と発癌の関連が明らかとなってきた

ている一方、Wnt5aが関わる β -カテニンを介さないWntシグナル伝達経路と発癌の関連については未だ不明です。近年、悪性黒色腫や胃癌において β -カテニン非依存性経路と発癌の関連が示唆されており、肝細胞癌におけるWnt5aの発現と生物学的悪性度、予後について検討を進めております。

〈膵癌研究〉

近年の研究成果により、癌に対して分子標的薬を含め様々な治療法が開発されていく中で、膵癌は依然として最も予後不良な癌の一つです。当グループではメソテリンという癌細胞表面に発現する糖タンパクに着目し、膵癌、胆管癌といった種々の癌腫における発現の意義についてこれまでに報告を行ってきました。近年メソテリンを標的にした治療の開発が進められており、当グループでも膵癌の腹膜播種を模倣したマウスモデルにおいて抗メソテリン抗体を用いた補助療法の有用性を見出しました。現在そのメカニズムの解明を分子レベルで行っており、癌幹細胞等との関連を解析している段階であります。

2. 大学院生紹介

岡田尚樹 (2009年卒) :

Diacylglycerol kinase α 阻害剤を用いた消化器分子標的治療の基礎的研究

鈴木崇史 (2009年卒) :

肝細胞癌の微小環境を標的とした新規治療法の開発

脇坂和貴 (2010年卒)

Wnt5aの発現と肝細胞癌の生物学的悪性度および切除例における予後の検討

杉山 昂（2010年卒）

Diacylglycerol kinase α 発現変化の分子メカニズムの解明

3. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

去年大学院を卒業した松澤文彦が、抗メソテリン抗体の膀胱に対する抗腫瘍効果を国内の学会で発表いたしました。

また岡田尚樹が神戸大学で行われました第7回DGKの会に参加し、鈴木崇史が札幌医科大学や国立国際医療センターに肝初代培養の実際を見学に行きました。ともに国内外の研究者と交流して新たな知見を得ることができました。

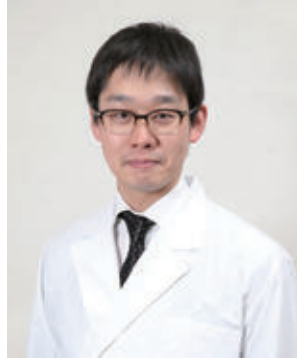
来年度も引き続き積極的に学会発表や論文投稿を行っていききたいと思います。また新たな実験手法や技術についても積極的に学習・習得し、今後の研究に活用していきたいと考えております。



腫瘍(消化管)グループ



豊島 雄二郎 (2008年卒)



木井 修平 (2010年卒)

1. 研究テーマ・概要

現在、消化管Gでは豊島雄二郎(2008年卒)、木井修平(2010年卒)の2名が大学院生として各講座でリサーチを行っています。

豊島雄二郎は、北海道大学遺伝子病制御研究所免疫機能学分野において、がん微小環境において産生されるIL-6による免疫抑制作用の機序解明と、宿主免疫系の適切な制御による効果的ながん治療への応用に関する研究を行っています。野生型およびIL-6欠損マウスを用いてマウス大腸がん細胞株の脾臓内投与による大腸がん肝転移モデルを作出し、肝臓内の腫瘍細胞および各種免疫担当細胞の解析を行い、担がん生体から産生されるIL-6による抗腫瘍免疫の抑制状態に起因する大腸がん肝転移メカニズムの解明を目指しております。

木井修平は、2016年の7月より北海道大学遺伝子病制御研究所免疫機能学分野において、炎症性腸疾患の発症過程における神経ペプチドおよびSTAT1の関与を検討し、疾患制御機構の解明と新規治療法への応用をテーマに研究を行っています。野生型マウスや各種ノックアウトマウスを使用してDSS(デキストラン硫酸ナトリウム)誘発大腸炎モデルを作出し、マウスの体重推移、大腸組織の病理組織学的検討やフローサイトメトリーによる免疫担当細胞の解析を行い、炎症性腸疾患の発症メカニズムの解明を行うとともに疾患治療への応用を目指しております。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

豊島雄二郎：マウス大腸がん肝転移モデルにおいて、担がん生体から産生されるIL-6が、樹状細胞のIL-12産生の抑制やアルジーナーゼの活性化を介してキラーT細胞の活性化を減弱させることによって大腸がん細胞の肝転移巣形成が亢進することを見出しました。また、現在、ヒト大腸がん肝転移例におけるIL-6の発現と免疫チェックポイント分子の一つであるPD-L1の発現との関連や両者の大腸がん患者の予後や病勢との相関を調べており、今年度中に、以上の内容を論文としてまとめ投稿する予定です。

木井：DSS誘発大腸炎マウスモデルにおいて、STAT1欠損マウスを用いた検討と野生型マウスに神経ペプチドシグナル阻害剤を投与する治療実験を行なったところ、大腸炎の程度や腸疾患の発症による体重減少の軽減を見出しました。今後、大腸炎の発症におけるSTAT1の活性化と神経ペプチドシグナルを介した分子メカニズムについての解析を進め、病態を制御する下流標的分子を同定することで、炎症性腸疾患の新たな治療法の確立を目指していきたいと思います。

小児グループ



藤好 直（2009年卒）

1. 研究テーマ・概要

〈肝芽腫におけるDNAメチル化異常の関与〉

DNAはその塩基配列を崩さずに、後天的な修飾を受けることで遺伝子発現を制御するシステムがあります。まったく同じ遺伝子を持った一卵性双生児が、その環境によってそれぞれ違いが出てくるのも、このような後天的な修飾が関与していると考えられ、非常に興味深い研究分野です。最近ではゲノムワイドにメチル化異常と遺伝子発現の制御に関する研究が進んできています。

当グループでは、チーフの本多先生が埼玉県立がんセンター研究所で行ってきた、上記研究テーマを引き続き北大で行っております。日本小児肝がんスタディグループや神奈川県立こども医療センターからの検体の提供や札幌医大分子生物学講座などの様々なバックアップをいただき、研究を進めております。

肝芽腫はCDDPを中心とした化学療法を行いますが、約10%程度の症例で治療抵抗性を示し、その予後は不良となります。私は肝芽腫のCDDP抵抗性におけるDNAメチル化異常の関与をテーマに研究しております。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

満足度：患者検体を用いた網羅的メチル化ビーズアレイや細胞株を用いた発現アレイなどのデータを用いていくつかの候補遺伝子を抽出し、現在各種アッセイなどで検証中です。また、メチル化傾向の解析結果よりCDDP抵抗性の群別化、予後の有意差なども確認できております。断続的なCDDP暴露で確立したCDDP耐性細胞株を用いた、脱メチル化剤の効果も検証中であり、新規治療の足掛かりとして期待が持てます。まだまだすべき実験、したい実験はいっぱいありますが、進捗としてはおおむね順調かと思えます。

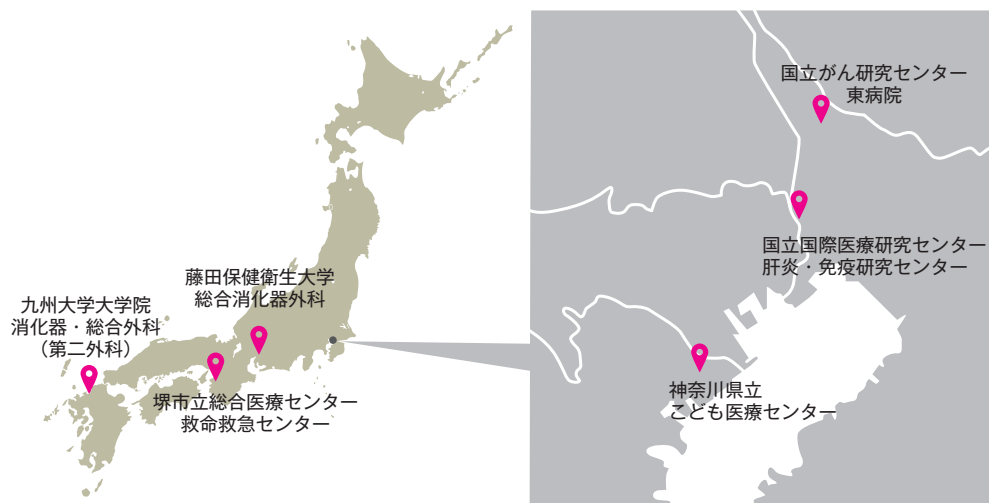
方向性：これから、抽出した各遺伝子の遺伝子操作を行った細胞株を用いて生存アッセイや接着、浸潤、アポトーシスアッセイなどで評価を行い、CDDP抵抗性への関与や機能などを検証していく方針です。また、in vivoでの評価、治療効果の実証なども考えています。

2017年教室紹介

〈留学生〉

2017年教室紹介 / 留学生

国内留学



藤田保健衛生大学
総合消化器外科 (愛知県)

柴崎 晋 (2015年～)

堺市立総合医療センター
救命救急センター (大阪府)

常俊 雄介 (2015年～)

九州大学大学院
消化器・総合外科 (第二外科) (福岡県)

大平 将史 (2017年～)

国立国際医療研究センター
肝炎・免疫研究センター (千葉県)

坂本 譲 (2017年～)

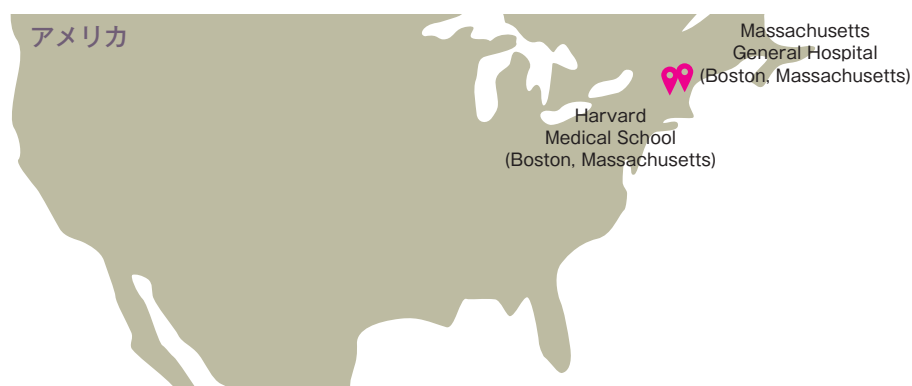
国立がん研究センター
東病院 (千葉県)

今泉 健 (2015年～)

神奈川県立こども医療センター

近藤 享史 (2017年～)

海外留学



Massachusetts
General Hospital,
Surgery Transplant Center,
Harvard Medical School
(Boston, Massachusetts)

大浦 哲 (2013年～)

Massachusetts
General Hospital
(Boston, Massachusetts)

木村 鐘康 (2015年～)



University Medical Center
Groningen
(Groningen, Netherlands)

藤好 真人 (2015年～)

University of Liverpool
Alder Hey Children's Hospital

宮城 久之 (2017年～)



(Queensland Institute of
Medical Research, QIMR)
Conjoint Gastroenterology
(Brisbane, Queensland)

川俣 太 (2015年～)

国内留学

柴崎 晋

卒業年：2002年

留学先：藤田保健衛生大学・総合消化器外科

近況報告

こちらでの生活も3年目を迎えました。総合消化器外科としてスタートを切ってから1年以上が経過し、なんとなくではありますが、運営面では安定してきた感じがいたします。私自身も、執刀数こそ多くはないものの、典型的な腹腔鏡下胃切除（LDG、LTG、LPG）はもちろんのこと、NAC後胃切除や高度肥満、ハイリスク症例などの難しい手術や、縦隔鏡手術や後腹膜鏡手術などの貴重な術式の執刀経験もさせて頂き、大きく飛躍したと思っております。そのほか、ロボット手術、食道癌手術なども多数にわたり経験することができ、後輩への手術指導も数多く経験することができ、非常に内容の濃い留学生活となっております。

こちらに来て強く感じることは、1例として同じ手術はない、ということに尽きると思います。体型、癒着の程度、血管分岐などの解剖学的構造、腫瘍の進行度による影響などは千差万別であり、多方面からのアプローチの重要性を痛感しております。よく宇山先生がいわれていることですが、100人いれば100通りの攻め方があるはずで、その人に最適の方法をいかに効率よくみつけて実践するか、ということがこの3年間で一番学んだことだと思います。もう一つ、これだけ同じ時間を共有し、手術ビデオを何度も見ながら議論を重ねていても、個々人で理解なり認識が微妙に異なっているものだということが実感いたしました。これらはもちろんある程度の手技の定型化や安定化が前提にあってのことではありますが、このような手術の奥深さに触れることができ、また常に手術に対して貪欲に考えることができる環境に身をおけたことは私にとって非常に大きな財産となると思われます。

学術面においても、宇山先生の威光を借りてのことですが



ACS2017にて、FACS取得した際のConvocation Ceremonyでの記念撮影。左から稲葉先生、石田先生、私、中内先生。

学会の主題演題で発表する機会も頂きました。また、2017年12月には藤田式LDGの教科書が上梓されましたが、この執筆にも参加させて頂き、貢献することができたことは光栄に存じます。生活面においても、名古屋や岐阜での生活も家族共々楽しむことができ、うれしく思います。このような機会を頂けまして、武富先生はじめご協力頂きました皆様には、感謝の念に堪えません。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

環境が大きく変わり大変な部分も多いのですが、外の世界から見た北大、というのも面白い視点になると思います。客観的に自分達のよい部分や悪い部分、ならびに自分達の立ち位置が見えてくるとと思いますので、若い先生方は自分自身のためにも、そして北大のためにも、是非とも積極的に修行の旅に出て欲しいと思います。今後の北大消化器外科Iの更なる発展を願って、近況報告の締めとさせていただきます。

2017年の業績

《学会》

- 2017.1.28 第9回日本ロボット外科学会学術集会(佐賀) (一般演題)
Siewert Type II型食道胃接合部腺癌に対するロボット支援下手術
柴崎晋、石田善敬、鶴安浩、砂堀さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、古田晋平、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗
- 2017.3.9-10 89th Annual meeting of the Japanese Gastric Cancer Association (Hiroshima)
Robotic transhiatal lower mediastinal dissection for adenocarcinoma of the esophagogastric junction.
(Video)
Susumu Shibasaki, Yoshinori Ishida, Yasuhiro Tsuru, Sayaka Amano, Yusuke Amano, Ai Goto, Makoto Tomatsu, Kenichi Nakamura, Masaya Nakauchi, Shimpei Furuta, Kenji Kikuchi, Tetsuya Nakamura, Shinichi Kadoya, Kazuki Inaba, Ichiro Uyama
- 2017.4.20-23 IGCA2017 (Beijing)
The short-term outcomes of robotic valvuloplastic esophagogastronomy using double flap technique following proximal gastrectomy

(Video)

Susumu Shibasaki, Yoshinori Ishida, Kenichi Nakamura, Masaya Nakauchi, Shimpei Furuta, Kenji Kikuchi, Tetsuya Nakamura, Shinichi Kadoya, Kazuki Inaba, Ichiro Uyama

4. 2017.4.27-29 第117回日本外科学会定期学術集会(横浜)

Siewert Type II型食道胃接合部腺癌に対するロボット支援下噴門側胃切除ならびに経裂孔的下部食道切除手術
(パネルディスカッション)

柴崎晋、石田善敬、鶴安浩、砂堀さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、古田晋平、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗

5. 2017.7.20-22 第72回日本消化器外科学会総会(金沢)
食道胃接合部腺癌に対するロボット支援下経裂孔の下縦隔郭清の有用性

(ワークショップ関連演題)

柴崎晋、石田善敬、鶴安浩、砂堀さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、古田晋平、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗

6. 2017.10.12-15 JDDW2017 (福岡)

安全かつ高再現性を目指したOutermost layerに基づいた幽門下リンパ節郭清手技
(ポスター)

柴崎晋、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、

中村哲也、菊地健司、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗

7. 2017.11.3-4 第47回胃外科・術後障害研究会(横浜)
食道胃接合部腺癌に対するロボット支援下噴門側胃切除、縦隔内食道残胃吻合術

(主題)

柴崎晋、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、杉岡篤、宇山一朗

8. 2017.11.23-25 第79回日本臨床外科学会総会(東京)
腹腔鏡下胃切除時の主要動脈からの出血に対する対応
(ビデオシンポジウム)

柴崎晋、鶴安浩、松尾一勲、天野さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、中村哲也、菊地健司、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗

《論文》

1. Shibasaki S, Suda K, Nakauchi M, Kikuchi K, Kadoya S, Ishida Y, Inaba K, Uyama I. Robotic valvuloplastic esophagogastrostomy using double flap technique following proximal gastrectomy: technical aspects and short-term outcomes. Surg Endosc. 2017 Mar 31. doi: 10.1007/s00464-017-5489-x. [Epub ahead of print] PMID: 28364148.
2. 柴崎晋、石田善敬、稲葉一樹、宇山一朗：消化器外科手術一起死回生の一手 上部消化管 胃「主要動脈からの出血！さあ、どうする？」

常俊 雄介

卒業年：2003年

留学先：堺市立総合医療センター救命救急センター救急外科 医長

■ 近況報告

平成15年卒の常俊雄介です。2015年4月より堺市立総合医療センターに国内留学させていただき、Acute Care Surgery (Trauma+Emergency surgery+Surgical critical care) を専攻すべく、こちらで勉強させていただいております。

私がこちらへ来た第一の目的が、北海道では系統だって修練できないTrauma Surgery を勉強したいということでした。当救命救急センター稼働から2年半が経過し、体幹部外傷手術はこれまで約230例を数えました。ニュースに出るような事件症例や、超重症例の救命例を経験できたとともに、Surgeonとしての自分のまだまだ至らなさを痛感する日々です。

北海道へ戻り、師匠の臼井先生から独り立ちしてAcute

Care Surgeryを発展させていくには、まだ実力も対外的な資格も不十分であり、この人手不足の折に大変申し訳ないのですが、2年間の修練延長をお願いし、武富教授に快くお許しいただきました。

私にできることは、ここで更に実力をつけていく(手術技能・治療戦略の向上・資格取得・論文発表)とともに、北海道でAcute Care Surgeryに興味のある若手Drたちの受け皿・架け橋となるべく頑張っていくことと考えております(すでに何人か連絡をいただきました！)。

今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

■ 2017年の業績

1. 2017.03.02 第53回腹部救急医学会総会(パネルディスカッション)：「Interval appendectomy- 手術困難症



例の検討」常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、
蛭原健、天野浩司、中田康城、横田順一郎

2. 2017.03.11 第44回日本集中治療医学会総会（ミニ
オーラル）：「ICU内で安全に“手術”を行うために」常
俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、蛭原健、天野

浩司、中田康城、横田順一郎

3. 2017.04.27 第117回日本外科学会総会（ワークショップ）：「穿通性腹部外傷に対する治療戦略~試験腹腔鏡の積極的応用」常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、加藤文崇、蛭原健、天野浩司、中田康城、横田順一郎
4. 2017.06.01 第31回日本外傷学会総会（特別企画関連セッション）：「骨盤ガーゼパッキング施行症例の検討ー特にパッキング除去時のトラブルについて」常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、加藤文崇、天野浩司、中田康城、横田順一郎
5. 2017.09.08 第9回日本Acute Care Surgery学会学術集会（シンポジウム関連・ポスター）：「当院におけるAcute Care Surgery- 天の時・地の利・人の和を得て」 「頸部刺創症例の検討」常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、井上稔也、天野浩司、中田康城、横田順一郎

大平 将史

卒業年：2011年

留学先：九州大学 消化器・総合外科（第二外科）

■ 近況報告



2011年卒の大平です。2017年4月から九州大学消化器・総合外科の肝臓・移植グループで研修しております。今までとは全く異なった環境での研修であり、最初は戸惑うことも多かったのですが、皆様のご指導により非常に充実した毎日を送っています。

当科は国内留学者に対して非常にオープンで、他スタッフと区別なく扱っていただいております。これまでは一般病院で消化管手術を中心に修練していたため、肝臓外科の経験はほぼゼロに等しい状態でしたが、それにもかかわらずメジャーな肝切除から脳死・生体肝移植術まで数多く経験させていただきました。

本年度から大学院にも入学しており、今後は臨床のみではなく研究にも力を入れなくてはなりません、この1年間で少しでも多くのことを学べるように日々研鑽しております。

最後に、人手不足の中、国内留学のご推薦を下さいました武富教授をはじめ、消化器外科Iの先生方に改めて感謝申し上げます。

■ 2017年の業績

論文

1. Motomura T, Yoshizumi T, Ohira M, Mano Y, Toshima T, Itoh S, Harada N, Harimoto N, Ikegami T, Soejima Y, Maehara Y: Successful Recombinant Thrombomodulin Treatment for Thrombotic Microangiopathy After Liver Transplantation: A Case Report. Transplant Proc. 49, 2409-2410, 2017.
2. 大平将史、植村一仁、川村秀樹、渋谷一陽、高橋宏明、伊藤美夫: 腹部大動脈閉塞を伴う盲腸・S状結腸癌に対し腹腔鏡下切除術を施行した1例. 日本外科系連合学会誌. 42, 226-232, 2017.
3. 大平将史、市川伸樹、上泉洋、加藤寛士、辻健志、横山良司、伊藤浩二、中島保明: 内視鏡的穿孔部閉鎖と胸腔縦隔ドレナージで救命し得た箸の誤飲による食道穿孔の一例. 日本消化器外科学会雑誌. 50, 177-189, 2017.
4. 大平将史、後藤了一、腰塚靖之、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、鈴木友己、嶋村剛: 常染色体劣性多発性嚢胞腎に伴う肝線維症に対し脳死肝移植を施行した1例. 移植.

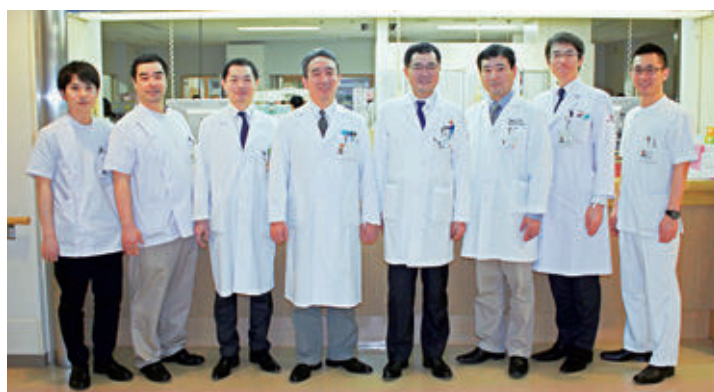
52, 60-66, 2017.

日本内視鏡外科学会総会, 京都, 2017.

学会

1. Ohira M, Shibuya K, Uemura K, Takahashi H, Honma N, Osaka Y and Ito Y. Distance from a port to a target organ as a predictive factor for difficult cases in single-incision laparoscopic cholecystectomy. SAGES 2017 Annual Meeting, Houston, 2017.
2. 大平将史、柳田尚之、加藤紘一、合地美香子、近藤享史、山田健司、船越徹、稲垣光裕: 胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除術の短期成績における第一助手の影響. 第30回

3. 大平将史、吉住朋晴、泉琢磨、湯川恭平、藤本侑希子、井口詔一、下川雅弘、坂田一仁、川崎淳司、本村貴志、間野洋平、戸島剛男、伊藤心二、原田昇、播本憲史、池上徹、副島雄二、前原喜彦: 生体肝移植術中脾臓摘出術によるグラフト機能改善効果に関する検討. 第53回日本移植学会総会, 旭川, 2017.
4. 大平将史、柳田尚之、加藤紘一、合地美香子、近藤享史、山田健司、船越徹、稲垣光裕、赤羽弘充、中野詩朗: 腹腔鏡下幽門側胃切除術における第一助手の影響. 第72回日本消化器外科学会総会, 金沢, 2017.

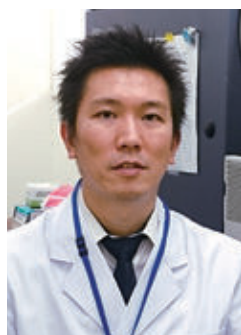


坂本 譲

卒業年：2010年

留学先：国立国際医療研究センター・肝炎免疫研究センター・肝疾患研究部

■ 近況報告



平成22年卒業の坂本譲です。私は、前任の正司裕隆先生（平成19年卒業）の後任として、平成29年4月より千葉縣市川市にある国立国際医療研究センター・肝炎免疫研究センター・肝疾患研究部で研究に従事させていただいております。当研究部は、肝疾患の診断、治療に繋がる基礎研究、臨床研究を展開し、ウィルス性肝炎、脂肪性肝炎、肝硬変、肝がんなど、肝臓病の成

り立ちや進行の仕組みを解明することで、新しい診断法や治療法の開発に繋げることを目指しております。ホームページでは、最新の研究成果（正司先生の論文内容も掲載されております）やイベントなどが随時更新されており、ご覧いただくと当施設の雰囲気などを知っていただけたと思います。

私の研究内容についてですが、ウィルス性肝炎の減少とは対症的に増加傾向にある非アルコール性脂肪性肝炎（NASH/

NAFLD）における、肝発がん・線維化過程での免疫機構の解明です。肝がんの発生や増大には、がん微小環境や免疫細胞の機能低下が関与しており、免疫細胞の機能を回復させる免疫チェックポイント阻害薬の有用性が肝がん領域でも示されてきております。私は、各種免疫細胞に発現する抑制型受容体であるSiglecという分子に着目し、肝疾患の病態におけるSiglecを介した免疫機能の抑制機構を明らかにすることで、今後新たな治療ターゲットとしての可能性を見いだせればと考えております。というように目標はとても高いのですが、まだお示しできる結果が出ておりませんので、今後先生方により成果をご報告できるよう日々研究に励んで参りたいと思います。

センター長の考藤達哉先生をはじめとして、当研究部の先生方は皆研究領域での経験が豊富であり、専門的な知識はもちろんのこと研究に対する考え方や手法など、非常に学ぶことが多く充実した研究生生活を過ごしております。ここで少しでも多くのことを学び、技術を習得し、医局に還元できればと考えております。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境で研究を

させていただく機会を与えて下さった武富紹信教授、北大消化器外科教室Ⅰの先生方、同門の先生方、また西川口でお世話になっております齋藤記念病院・斎藤卓先生に心より感謝申し上げます。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 2017年の業績

〈学会〉

(国内)

1. 坂本譲、本間重紀、市川伸樹、大野陽介、吉田雅、川村秀樹、武富紹信：門脈欠損症を有する上行結腸癌症例に対する腹腔鏡下右半結腸切除の1例。第106回北海道外科学会, 札幌, 2017.2.4
2. 坂本譲、神山俊哉、横尾英樹、武富紹信：当院における透析患者の肝細胞癌に対する肝切除術後の成績。第62回日本透析医学会学術集会・総会（シンポジウム20「透析患者の癌治療最前線」）, 横浜, 2017.6.16-18
3. 坂本譲、神山俊哉、阪田敏聖、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、中智昭、三橋智子、武富紹信：まれなG-CSF産生肝細胞癌の1例。第53回日本肝癌研究会, 東京, 2017.7.7
4. 坂本譲、神山俊哉、阪田敏聖、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、中智昭、三橋智子、武富紹信：まれなG-CSF産生肝細胞癌の1例。JDDW2017 FUKUOKA 第25回日本消化器関連学会週間, 福岡, 2017.10.12-15
5. 坂本譲、笠島浩行、大野陽介、澤野武行、植木伸也、佐

藤利行、久留島徹大、砂原正男、鈴木伸作、木村純：腹腔鏡下に診断・修復し得た両側Spigelian Herniaの1例。第79回日本臨床外科学会総会, 東京, 2017.11.23-25

6. 坂本譲、本間重紀、市川伸樹、大野陽介、吉田雅、川村秀樹、武富紹信：門脈本幹欠損を有する上行結腸癌に対して腹腔鏡補助下右半結腸切除を施行した1例。第30回日本内視鏡外科学会総会, 京都, 2017.12.7-9

(海外)

1. Sakamoto Y, Kamiyama T, Yokoo H, Doi H, Shimada S, Einama T, Wakayama K, Orimo T, Kamachi H, Kanto T and Taketomi A: The impact of comorbid renal insufficiency in patients with hepatocellular carcinoma on long-term outcomes after the curative resection: A single center study on 800cases, AASLD The LIVER MEETING 2017, Washington, D. C., 2017.10.20-24

〈論文〉

1. 坂本譲、今裕史、岩崎沙理、梅本浩平、小池雅彦：緊急手術により救命しえたsegmental arterial mediolysis (SAM) による左胃動脈瘤破裂の1例。日本外科系連合会誌42巻1号, 61-66, 2017
2. 坂本譲、蔵谷大輔、植村一仁、川村秀樹、高橋宏明：術前診断し腹腔鏡下に切除しえた横行結腸神経鞘腫の1例。日本外科系連合会誌42巻5号, 802-808, 2017
3. 高橋仁美、廣崎邦紀、坂本譲、伊藤美夫、内田亜紀子：右鼠径部に生じた異所性子宮内膜症の1例。皮膚科の臨床59巻1号, 117-120, 2017

今泉 健

卒業年：2010年

留学先：国立がん研究センター東病院 大腸外科

■ 近況報告

昨年度より、千葉県柏市にある国立がん研究センター東病院の大腸外科レジデントとして研修をさせて頂いております今泉です。当施設の特徴は、年間200件をこえる直腸癌手術があり、内肛門括約筋切除術（ISR）や側方リンパ節郭清などの高難度手術が日常的に行われている所です。また、最近ではTaTMEという経肛門的な内視鏡手術を取り入れており、直腸癌手術の進化を実感しております。腹腔鏡手術の教育にも非常に重きが置かれており、毎朝、前日の手術ビデオの編集をレジデントが行い、スタッフを含めてdiscussion

するmorning conferenceが行われています。今年から、朝のconferenceが英語になり準備におわれて日が変わることでも…。自分と同世代のレジデントばかりなので、助け合い、時には症例を取り合いながら、切磋琢磨して研修を行っております。

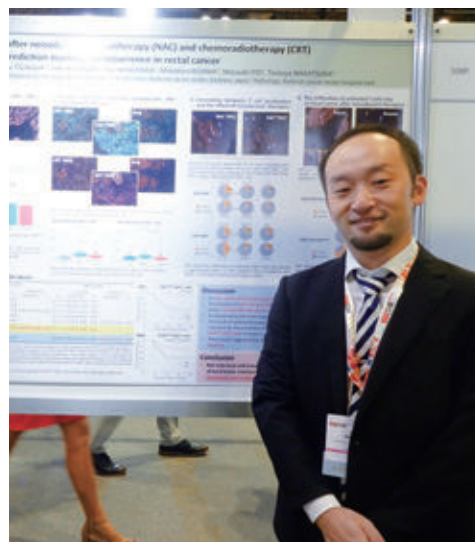
研修期間が残り半分を切りましたが、素晴らしい環境で少しでも多くのことを吸収し医局に還元できるものを学んでいきたいと思います。最後になりましたが、研修の機会を与えてくださった武富教授、消化器外科Ⅰの先生方に感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 2017年の業績

「学会発表」

- ・ 今泉健、塚田祐一郎、駒井好信、佐々木剛志、西澤祐吏、酒井康之、伊藤雅昭：直腸癌術後排尿機能障害の発生頻度とリスク因子の同定 第27回骨盤外科機能温存研究会，新宿，2017
- ・ 今泉健、塚田祐一郎、駒井好信、佐々木剛志、西澤祐吏、酒井康之、伊藤雅昭：直腸癌術後排尿機能障害の発生頻度とリスク因子の同定 第72回消化器外科学会，金沢，2017
- ・ Ken Imaizumi, Toshihiro Suzuki, Manami Shimomura, Yuichiro Tsukada, Takeshi Sasaki, Yuji Nishizawa, Motohiro Kojima, Masaaki Ito, Testuya Nakatsura: Immunological features of resected tumor after neoadjuvant chemotherapy (NAC) and chemoradiotherapy (CRT) become the superior prediction markers for recurrence in rectal cancer ESMO 2017 Congress, Madrid, Spain, 2017

- ・ 今泉健、鈴木利宙、下村真菜美、塚田祐一郎、佐々木剛志、西澤祐吏、小嶋基寛、伊藤雅昭、中面哲也：術前化学療法もしくは科学放射線療法後の直腸切除検体における腫瘍微小環境の評価は術後再発を予測する因子になりうる，第37回分子腫瘍マーカー研究会，横浜，2017



近藤 享史

卒業年：2012年

留学先：神奈川県立こども医療センター 外科

■ 近況報告

今年度より神奈川県、横浜市にあります神奈川県立こども医療センターで研修させて頂いております。当院の外科は、年間900例前後の全身麻酔手術件数があり、日帰りの鼠径ヘルニア手術から生体肝移植に至るまで、あらゆる小児外科手術が行われております。また小児がん拠点病院として豊富な小児がん症例もあり、同門の北河先生のもとには全国から転移性肺腫瘍の患児が紹介されてきております。まだまだ自分

自身至らぬ点も多く、慣れないこともあります。これまで教科書で見ていたような小児外科疾患を目の当たりにし、非常に興味深く、また患児や親御さんの努力を見る度に、身が引き締まる思いで日々過ごしております。腸閉鎖、鎖肛、ヒルシュスプルング病といった、小児外科特有の疾患の執刀経験も日々積ませて頂いております。最近では、内視鏡外科学会技術認定医の小児外科領域の審査対象となっております腹腔鏡下噴門形成術にも取り組ませて頂いております。このような非常に恵まれた環境の中で、小児外科医としてのスター



トを切れたことは、ひとえに新開先生はじめこども医療センターの先生方、武富先生はじめ消化器外科Ⅰの先生方のお取り計らいによるもので、心より感謝申し上げます。多くのことを学び、今後北海道の小児外科医療に尽くせるよう努力致します。今後とも皆様ご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い致します。

■ 2017年の業績

《学会発表》

1. 近藤享史、宮城久之、湊雅嗣、本多昌平、若山顕治、横尾英樹、井口晶裕、橘剛、神山俊哉、武富紹信：右房内

腫瘍塞栓にて心不全徴候を呈し緊急手術となった腎芽腫に対する外科的治療戦略の検討，第54回日本小児外科学会学術集会，仙台，2017

2. 近藤享史、望月響子、臼井秀仁、田中邦英、大澤絵都子、浅野史雄、北河徳彦、新開 真人：高位空腸穿孔術後の人工肛門管理に難渋した1例，第115回東京小児外科研究会，東京，2017
3. 近藤享史、北河徳彦、田中邦英、大澤絵都子、浅野史雄、臼井秀仁、望月響子、新開真人：多発小腸閉鎖，結腸欠損を伴った鎖肛の1例，第52回日本小児外科学会関東甲信越地方会，茨城，2017



■ 海外留学

大浦 哲

卒業年：2001年

留学先：Instructor in Surgery, Massachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciences, Harvard Medical School, Boston, USA

■ 近況報告

同門会の皆様、私は2001年卒業の大浦哲です。北海道大学病院・函館市立病院・帯広協会病院・倶知安厚生病院・足寄町立病院・天使病院で勤務させて頂き、学位取得後の2012年に渡米後Research Fellow、2015年からはInstructor in SurgeryとしてMassachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciencesに勤務しております。私が移植、特に術後免疫抑制剤が必要で無くなる免疫寛容を自分の一生の仕事にしようと思ったのは、レジデント時代の二つの経験からでした。一つは、レジデント1年目に、Beth Israel Deaconess Medical Centerに留学直前の山下健一郎先生から伺った移植免疫学の話です。移植免疫学に関してBench to Bedの重要性と、免疫抑制剤が必要無くなる夢の移植医療について先生の大学病院当直中に判り易く説明して頂きました。もう一つは、レジデント5年目に神山俊哉先生のご厚意で6か月間のICU勤務をさせて頂いた事でした。その際、免疫抑制剤の功罪を実際の患者で確認する事が出来ました。

私の勤務先は、Dr. Cosimi が前臨床試験としてカニクイザルを用いた移植実験を1980年代に確立、Dr. Kawai が1990年代に参加し腎移植にドナー骨髄移植を併用し、術後一時的な免疫学的キメラ状態をレシピエント体内で誘導し免疫抑制剤から離脱できる免疫寛容をカニクイザルで可能にしました。このアプローチは臨床の生体腎移植患者に適応され、最長15年間免疫抑制剤から離脱しています（Kawai T. New Engl J Med: 2008. 2013.）。これら免疫抑制剤を内服していない患者達から得た情報は移植免疫学のみならず、免疫抑制剤の内服していない事により高血圧・糖尿病・高脂血症・

感染症等の免疫抑制剤関連の副作用が見られず、それにより移植患者にかかわる医療費の抑制が通常の免疫抑制剤を内服している患者達と比較して明確に成りました。現在、米国内ではMGH, Stanford, Northwesternの3施設で生体腎移植に骨髄移植を併用し、プロトコルの違いによりキメラ状態の違いは有りますが、免疫寛容を誘導する試験が進行し、学会・論文・Grant等で切磋琢磨しております。しかしながら、免疫寛容を臨床で誘導出来ているのは生体腎移植患者に限られているので、現在はより普遍的（生体移植のみならず脳死移植においても）に臓器・細胞移植の種類に関わらず免疫寛容を誘導可能にする為に「時代の批判に耐え得る概念の確立」を目標に日々研鑽しております。MGHのMixed chimerism approachはカニクイザルを用いた前臨床試験を基に発展させて来ました。ClinicalとPre-clinicalで発展・疑問を行き来している点が他の二施設との大きな違いであります。このシステムが成り立っている点がMGHの最大の魅力だと思います。

生活面では、ボストンでの生活に慣れたおかげで、充実した日々を過ごしております。もしアメリカ東岸にいらっしゃる事が有れば連絡を頂けると幸いです。特に初夏から秋にかけてのNew England地方は素晴らしく、環境名所も多数存在します。季節によってお勤めのレストランか自宅でのBBQに招待させて頂きます。また、北大第一外科の関係者のみならず、移植医療やボストンに興味の有る方は連絡を頂けると出来る限りの事をサポートさせて頂きます。MGHの移植臨床部門では北大第一外科出身の木村鐘康先生が活躍していますので、移植医療の基礎研究・臨床の両方を見るには大変良い環境だと思います。

最後に、外科医不足の中、海外で働かせて頂ける自分の立場を自覚し、背中を押して頂いた藤堂省教授・山下健一郎教授をはじめ、お世話になっている同門の先生方に深く感謝しております。

■ 2017年の業績

1. Oura T, Hotta K, Lei J, Markmann J, Rosales I, Dehnadi A, Kawai K, Ndishabandi D, Smith RN, Cosimi AB, Kawai T. Immunosuppression With CD40 Costimulatory Blockade Plus Rapamycin for Simultaneous Islet-Kidney Transplantation in Nonhuman Primates. Am J Transplant. 2017; 17(3): 646-656.



2. Oura T, Cosimi AB, Kawai T. Chimerism-based tolerance in organ transplantation: preclinical and clinical studies. Clin Exp Immunol. 2017; Apr 2.

3. Adam BA, Smith RN, Rosales IA, Matsunami M,

Afzali B, Oura T, Cosimi AB, Kawai T, Colvin RB, Mengel M. Chronic Antibody-Mediated Rejection in Nonhuman Primate Renal Allografts: Validation of Human Histological and Molecular Phenotypes. Am J Transplant. 2017; Apr 26.

木村 鐘康 卒業年：2003年
留学先：MGH

■ 近況報告



2017年9月より米国Massachusetts General Hospitalで移植外科医として勤務しています。

この度医局年報に投稿する機会をいただきましたので、昨年に引き続き近況報告をさせていただきます。

2015年より同病院にて2年間のClinical Fellowとしてのトレーニングを終え、そのままスタッフとして残ることとなりました。

ですので、米国での臨床は3年目となりました。当院の年間手術件数としては、肝移植が約80件（うち生体5-10件）、腎移植が約150件（うち生体約75件）、臓器移植が5件程度です。Fellowの時はあくまで移植のトレーニングを受ける立場でしたが、現在はフェローやレジデントを指導する立場になりましたので、すべての臨床における決定権は自分にあり、その分大変な責任を伴います。

現在私を含めMGHには移植外科医が5人おり、5人でFirst callを分担しています。First callの時は、全てのドナーのオファーを受け、移植が可能かどうかを判断し、移植になれば自分で執刀します。また、病棟の回診、救急外来からのコールも全て対応しますので、その週は多忙を極めます。First call以外の時は生体腎移植や肝切除、シャント手術等をしながら、余った時間はリサーチに充てると感じます。外来も週に1～2回あり、移植後のフォローアップに加え、新規移植レシピエント候補の評価や、肝切除、シャント手術後患者のフォローアップもします。まだまだ始めたばかりで慣れないことも多く、判断に困ることもありますが、同僚の外科医を含め周りのスタッフが非常に協力的ですので助けてもらい

ながら何とかやっています。

また、MGHはリサーチにも重点を置いている病院で、移植関連では特にToleranceやOrgan preservation、最近ではXeno Transplant等に力を入れており、私も少しずつですが参加しています。正直リサーチにまであまり余裕が回らないというのが現状ですが、今後臨床に慣れてきたら徐々にリサーチにも時間を割いていこうと考えています。

将来的には自分でグラントを取ってラボを持ち、第一外科の後輩の留学受け入れ先となれば良いと考えております。

日々多忙でストレスもありますが、日本ではなかなかできないような経験を多くさせていただいており、大変充実した生活を送らせていただいています。

ボストンは観光にも非常にいい街ですので、もし学会や見学等で来られる機会がありましたら是非声をおかけください。リサーチでご活躍中の大浦先生とともにご案内致します。

また、若手の先生方で留学に興味のある方は短期でも長期でもいつでも受け付けておりますのでお気軽にご相談ください。

最後にこのような留学の機会を与えて下さりました武富教授、同門の先生方にこの場を借りて心からお礼申し上げます。

■ 2017年の業績

学会発表

1. Importance of B cell antigen specificity in Breg dependent tolerance. Kimura S, Kojima L, Aburawi M, Fontan F, Kim J, Deng K, Tector H, Lee K, Yeh H and Markmann J. American Transplant Congress 2017 at Chicago USA (Oral presentation)

藤好 真人 卒業年：2003年
留学先：University Medical Centre Groningen

■ 近況報告

オランダのUniversity Medical Centre Groningen

(UMCG) に留学中の藤好真人と申します。私は現在Robert Porte教授のご指導の下、肝胆膵・移植外科の臨床フェローとして研鑽を積んでおります。また、臨床業務の傍ら研究にも

従事しております。

私は研究専従による6年以上の臨床ブランクの直後に、UMCGでの臨床フェローシップを開始したため、当初は言語面でも臨床面でも非常に大変でしたが、周囲に助けを頂きながら何とか臨床トレーニングを積んでくることができました。日々感謝しながら勤務しております。

私の主たるstudy interestは「肝移植グラフトの機械灌流」であり、研究面でも貴重な機会を頂いております。UMCGでは「DCDグラフトに対するdual hypothermic oxygenated machine perfusion (DHOPE)に関するRCT」および「Normothermic machine perfusionによる移植前グラフト評価に関するパイロットスタディ」を行っており、これまでに灌流装置のセットアップ、バックテーブル、灌流管理、グラフト診断から移植手術に至るまでの機械灌流に関する全プロセスを数多く経験させて頂いてきました。また、Discard graftやブタ肝臓を用いた大動物実験にも参加して研究技術を学ばせて頂いております。

私はDHOPEに関する10症例のパイロットスタディが終了したばかりの時期から研究チームに所属することができたため、当初は大仕事であった機械灌流が、トラブルシューティングを重ねながらルーチンワークとして確立していく過程を経験することができました。肝臓グラフトの機械灌流は世界的に導入が進んでおり、マージナルグラフトのリスク軽減によるドナープール拡大のため、将来的には日本にも導入されるものと信じております。その際には微力ながら貢献できればと思います。

これらの臨床研究に加え、小動物を用いた基礎研究も行っております。オランダでは動物実験は厳しく規制されており、マウスやラットを用いた研究を行うためには多くの手続きを要することに加え、技術的なトレーニングを目的に多くの動物を使用することができないため、高度な小動物実験系を構築することが困難です。小動物実験系は先進的な研究には必須なものであり日本には高度な技術を持つ研究者が多くいらっしゃいますので、今後は日本と協力しながらの研究体制が確立できればと考えております。

最後にこの留学を許可して頂きました武富教授をはじめ北海道大学消化器外科の皆様に厚く感謝申し上げます。



宮城 久之

卒業年：2003年

留学先：Alder Hey Children's Hospital, University of Liverpool, (Liverpool, UK)

■ 近況報告

LiverpoolはEngland北西部に位置し、御存知の通りビートルズの出生地として有名な都市です。Alder Hey Children's Hospitalは1914年に設立され2015年に百周年を機に新しく建て替えられた歴史ある小児病院であり、患児達にとってはもちろん医療従事者にとっても非常に素晴らしい環境を整えています。年間の手術件数は小さなものも含めて七千件前後に及びます。新生児外科の教科書も執筆されているProf. Paul D. Lostyのもとで臨床を中心に学ばせて頂いております。臨時手術にも呼んで頂いたり、勤務外にはスタッフの先生の自宅に呼んで頂いたり、様々な経験をさせて頂いております。このような機会を与えて下さいました武富教授、教室の皆様含め同門の先生方、そして恩師である岩井教授に心から感謝しております。



■ 2017年の業績

〈論文〉

2017年

1. Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A: Factors associated with the risk of persistent

gastrostomy site infection following laparoscopic or open Nissen fundoplication. Afr J Pediatr Surg, in Press, 2017.

2. Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada H, Taketomi A: Anal canal duplication presenting with abscess formation. Pediatr Int 59, 500-501, 2017.
3. Miyagi H, Honda S, Hamada H, Ara MW, Taketomi A: One-stage laparoscopic surgery for pulmonary sequestration and hiatal hernia in a 2-year-old girl. European J Pediatr Surg Rep, in Press, 2017.

〈学会発表〉

2017年

1. Miyagi H, Honda S, Hamada H, Minato M, Kondo T, Okumura K, Kawakita I, Taketomi A: One-stage laparoscopic surgery for extralobar pulmonary sequestration and hiatal hernia in a 2-year-old child, The 50th Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS), Seattle, USA, 2017 (Video, Oral).
2. 宮城久之, 本多昌平, 湊雅嗣, 武富紹信: 新生児期に病型診断が困難であった直腸肛門奇形症例の検討, 第117回日本外科学会定期学術集会, 横浜.
3. 宮城久之, 本多昌平, 浜田弘巳, 湊雅嗣, 近藤享史, 奥村一慶, 河北一誠, 武富紹信: 肺葉外分画症および食道裂孔ヘルニアを有する患児に対し一期的に腹腔鏡下手術を施行した一例, 第54回日本小児外科学会学術学会, 仙台.
4. 宮城久之, 本多昌平, 湊雅嗣, 奥村一慶, 関俊隆, 井口晶裕, 武富紹信: 大腰筋部分切除を要した後腹膜悪性ラブリド腫瘍の1例. 第95回日本小児外科学会北海道地方会, 札幌.



川俣 太

卒業年: 2005年

留学先: QIMR Berghofer Medical Research Institute

■ 近況報告



私は2005年卒業の川俣太です。2015年12月からポスドクとしてオーストラリア・ブリスベンのQIMR Berghofer Medical Research Instituteにてポスドクとして勤務し、約2年が経過しました。クイーンズランド州の別名は、「サンシャイン・ステート」と呼ばれます。これは晴天の

日がほとんどで、眩しい日差しに青い空、そして輝くような

海があることに由来しています。ブリスベンからは、ゴールドコースト、サンシャインコースト、ヌーサなどの美しい海辺にも1時間のドライブで行くことができます。

オーストラリア人（オージー）は陽気で楽しい人が多く、週末になると、昼間からビールやワインをゆっくりと楽しむ人が多いです。美味しい料理といえば、あまりこれといった物は無いのですが、スイッチ一つで熱くなるBBQ台が至る所にあり、沢山の人がBBQを楽しんでいます。

研究についてですが、留学をさせて頂いた事で、ゲノムシーケンシングの一流の研究に触れることができ、また国籍を問わず友人を作ることができたことはとても貴重な財産となりま

した。

帰国後の際にはご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

最後に、留学をさせて頂く機会を与えてくださった武富教授、消化器外科学分野 I の先生方に厚く御礼申し上げます。

■ 2017年の業績

原著論文

1. Kawamata F, Patch AM, Nones K, Bond CE, McKeone DM, Pearson SA, Homma S, Liu C, Fennell L, Dumenil T, Hartel G, Kobayasi N, Yokoo H, Fukai M, Nishihara H, Kamiyama T, Burge M, Karapetis C, Taketomi A, Leggett BA, Waddell N, Whitehall VLJ
Copy Number Profiles of Paired Primary and Metastatic Colorectal Cancers
Oncotarget 2017 Dec in press
2. Kawamata F, Nishihara H, Homma S, Kato Y, Tsuda M, Konishi Y, Wang L, Kohsaka S, Liu C, Yoshida T, Tanino M, Tanaka S, Kawamura H, Kamiyama T, Taketomi A
Chorionic gonadotropin- β modulates epithelial-mesenchymal transition in colorectal carcinoma metastasis: *Am J Pathol*. 2017 Oct 13. pii: S0002-9440(17)30430-3. doi: 10.101
3. Homma S, Kawamata F, Yoshida T, Ohno Y, Ichikawa N, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. The Balance Between Surgical Resident Education and Patient Safety in Laparoscopic Colorectal Surgery: Surgical Resident's Performance has No Negative Impact. *Surg Laparosc Endosc Percutan Tech*. 2017 Aug;27(4):295-300
4. Einama T, Kawamata F, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Matsuzawa F, Mizukami T, Konishi Y, Kamiyama T, Yamamoto J, Taketomi A, Todo S. Mesothelin-Specific Immune Responses and Targeted Immunotherapy for Mesothelin-Expressing Tumors. *EBioMedicine*. 2017 Oct;24:16-17. doi: 10.1016/j.ebiom.
5. Bond CE, Liu C, Kawamata F, McKeone DM, Fernando W, Jamieson S, Pearson SA, Kane A, Woods SL, Lannagan TRM, Somashekar R, Lee Y, Dumenil T, Hartel G, Spring KJ, Borowsky J, Fennell L, Bettington M, Lee J, Worthley DL, Leggett BA, Whitehall VLJ. Oncogenic BRAF mutation induces DNA methylation changes in a murine model for human serrated colorectal neoplasia. *Epigenetics*. 2017 Dec 13:1-20. doi: 10.1080/15592294.2017
6. Fennell LJ, Jamieson SH, McKeone DM, Corish T, Rohdman M, Furner T, Bettington M, Liu C, Kawamata F, Bond CE, Jolieke Van De Pols, Leggett BA, Whitehall VLJ. MLH1-93 G/A Polymorphism is Associated with MLH1 Promoter Methylation and Protein Loss in Dysplastic Sessile Serrated Adenomas with BRAFV600E Mutation *BMC Cancer*. 2017 Dec in press
7. Fennell LJ, Clendenning M, McKeone DM, Jamieson SH, Balachandran S, Borowsky J, Liu J, Kawamata F, Bond CE, Rosty C, Burge ME, Buchanan DD, Leggett BA, Whitehall VLJ. RNF43 is mutated less frequently in Lynch Syndrome compared with sporadic microsatellite unstable colorectal cancers. *Fam Cancer*. 2017 Jun 1
8. Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Ishikawa T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Reduced Port Laparoscopic TME with Coloanal Anastomosis. *SURGICAL TECHNIQUES IN RECTAL CANCER - TransAnal, Laparoscopic and Robotic Approach* (Springer Book) Chapter 15
Surgical Techniques in Rectal Cancer(Springer Book)Chapter 15 pp257-268, 2018



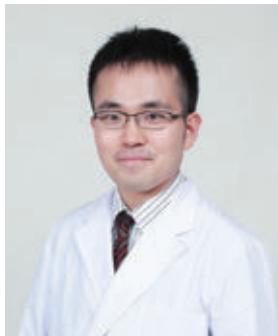
2017年教室紹介

〈2017年入局後期研修医〉

2017年教室紹介/2017年入局後期研修医

■ 後期研修医アンケート

アンケート 項目	1 今年度の感想/来年度の抱負/ 今後興味ある専門分野など	2 進路(外科)を考え始めた時期 3 一外入局を考え始めた時期	4 一外入局を決めた時期 5 一外に入局した決定的な理由



海老沼 翔太

1 天使病院での2年の初期研修と1年外科後期研修を経て、今年4月から大学病院勤務となりました。勤務初日から椎間板ヘルニア発症という憂き目にあい、数週間の療養期間を必要としましたが、無事復帰することができ、あっという間に8カ月が過ぎました。1年間市中病院で外科医として勤務していましたが、大学病院で働き始め、諸先輩方から多くの指導をいただき、今まで自分がいかに不十分な認識で診療にあたっていたかを思い知らされました。これから外の病院で働くにあたって、自分で執刀する機会がますます増えてくると思います。その時に責任をもって手術と診療に臨めるように、残り短い期間ですが一所懸命、仕事と勉強に励んでいこうと思います。

- 2 初期研修医2年目の時、もともと外科系志望で、最終的には外科か産婦人科で迷っていました。
- 3 天使病院で外科後期研修医を行うと決めた時。
- 4 外科が本格的に面白くなってきたとき。
- 5 武富教授のもとへあいさつに行き握手したこと。
- 6 第一子誕生（長女）
- 7 確認する習慣（大雑把な性格なため、まだまだ鍛える必要あり）。
- 8 腰の強さ。



小林 正幸

1 4月から8ヶ月以上経過しましたが、非常に密度の高い時間だったと思います。消化管・ICU・小児・移植・肝胆膵とローテーションをし、初期研修では経験しなかった様な専門的な症例を経験することが出来、各グループにおける基本的な考え方等も学べ、これからの外科医人生の素地となる大事な期間となりました。毎週2回行われる術前症例検討会の準備は正直なところ大変ではありましたが、上級医の先生方がお忙しい中丁寧に指導して下さい、成書を通しての勉強だけでは学べないことを沢山学ぶことが出来たと感じています。来年度は執刀医となる機会が増えるので、手術手技の研鑽に励みたいと思います。現在のところは腹腔鏡下手術に興味がありますが、色々と経験した上で自分にあった分野を見つけていきたいと思っています。

- 2 初期研修医1年目2月(外科ローテーション中)
- 3 初期研修医2年目4月
- 4 初期研修医2年目9月
- 5 初期研修病院の外科（一外関連病院）でお世話になった先生が自分の中の理想の医師像に合致し憧れたから。また、元来手先を動かすことが好きであったから。
- 6 Cleveland ClinicにClinical Observershipとして短期留学することが出来、少なからず自分の世界観が広がった。
- 7 Presentationの能力や、外科周術期管理の知識。
- 8 当然のことですが、まだまだ執刀経験が不足しているので来年度以降自分が執刀する1例1例を大事に学んでいきたい。

- 6 今年一年で特によかった出来事
- 7 今年一年で力がついたと思うこと

- 8 今年一年では不十分で課題と感じたこと



齋藤 智哉

1 今年度は外科医として働きはじめ、手術を安全に遂行するためには術前ストラテジーが極めて重要なことを肌で感じるとともに、自分はまだまだ解剖学的知識を含め基本的なことを何一つ理解できていないと痛感する一年でした。来年度は今年度よりも手術に参加する機会も増えるかと思いますので、たくさん手術を経験しつつも一例一例丁寧に準備して臨んでいこうと思います。また術後管理に関しましてはまだまだ分からないことがたくさんありますので、患者さんひとりひとりに真摯に向き合い学ばせて頂きたいと思っています。今後興味のある分野としてはAcute Care Surgeryに興味があるので、まずは定型手術をしっかり学び、なおかつ急性腹症・外傷手術などの経験もできればと思います。今年度は道具の持ち方もわからない私に時に優しく時に厳しく指導していただき大変ありがとうございました。来年度以降もご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

- 2 初期研修医2年目5月

- 3 初期研修2年目6月

- 4 初期研修医2年目11月

- 5
 - ・初期研修医の時に行った離島で自分の無力さを知り武器（外科的知識・技術）を身につけたいと感じたため。
 - ・職業柄多くの患者様の死に直面した際に、両親が健在のうちに親孝行をしたいと思い北海道に戻る決心がついたため。

- 6 何度か実家に帰れたこと

- 7 麻酔・ICUを経験することによって術中・術後の全身管理について理解が深まったこと

- 8 まだまだ解剖を理解できていないこと



鈴木 麻由

1 4月に入局し、今年度は大学病院で勤務させて頂きました。多くの先生方からご指導を頂け、また同期達に刺激をもらい、支えられた1年でした。勉強していく中で、外科医としての基本的知識や臨床的考察力の足りなさを痛感しました。今後精進して参ります。

- 2 大学5年目の夏頃

- 3 研修医1年目頃

- 4 研修医2年目の秋

- 5 研修していた一外関連病院での外科医師の姿勢に憧れ、また手厚く指導して頂けたため。

- 6 多くの同期に恵まれたこと。

- 7 プレゼンテーション力

- 8 解剖学的知識



白川 智沙斗

1 4月から北海道大学第一外科でお世話になっております。麻酔科やICUのローテートが約半年を占め、外科医としてやりたい仕事ばかりではなかった1年ですが、全身管理や薬剤の使い方など外科医として必要となる知識や経験を得られた1年でした。慣れないことも多く、指導医の先生方にはご迷惑をお掛けすることが多々ありましたが、私自身にとっては一つ一つ悩むことも重要な事だったように思います。来年4月からは新天地での生活が始まりますが、この1年で培ったものを十二分に活かしていきたいと思います。

2 学生時代

3 初期研修1年目

4 初期研修2年目

5 消化器外科手術が楽しかった

6 手術室忘年会で入賞できたこと

7 プレゼン

8 知識・技術



羽田 光輝

1 今年度も残すところ3カ月程となりました。ICU・小児・消化管・肝胆膵・移植を1～2ヶ月ずつ研修し、それぞれ術前管理、手術手技、術後管理と一通り病棟業務を経験できました。まだまだ実力が足りず課題も多く残りましたが、今後も勉強を続け、一つ一つ潰していけたらと思います。

来年度からは関連病院で実際に自分が執刀する機会も増え、さらに充実した日々になると思います。大学で学んだことを活かし、しっかり取り組んでいきたいと思います。

2 学生時代。

3 研修医1年目。

4 研修医2年目6月。

5 関連病院が多い、伝統がある、初期研修で先輩にお世話になったから。

6 同期に恵まれたこと。

7 規約に基づいた術前評価。

8 解剖の理解。

2017年教室紹介

〈秘書・クラーク・実験助手〉

2017年教室紹介 / 秘書・クラーク・実験助手

■ 医局秘書

星川 愛弓

平成27年6月より医局秘書として勤務させていただいております。担当業務は、出張・兼業関連業務、先生方の労務管理業務、北海道外科学会・日本小児外科学会北海道地方会・HOPEs（北海道外科関連学会機構）等の学会事務局業務を主にしております。

勤め始めて2年半が過ぎました。出張業務や学会業務を通して、医局とは違う先生方のお姿や、様々な先生方と関わる時間をいただく中で、たくさんの経験をさせていただいております。まだまだ至らぬ点も多く、先生方のお力を借りておりますが、少しでもお忙しい先生方のお役に立てるよう、精一杯努めてまいります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

片桐 千尋

務めて2年目になりました。私のポジションは担当業務がないので、幅広く仕事をさせていただいております。このような経験ができるのは教授秘書ならではと、日々そのありがたみを感じております。今年は学会の同行や同門会へも出席し、大変貴重な経験をさせていただきました。忙しい中、気遣い慮ってくれる皆様の言葉に励まされ1年を過ごすことができました。どうもありがとうございました。

近藤 歩美

平成28年2月より医局秘書として働かせて頂いております。担当業務は、主に科研費関連です。早いことに働き始めて約2年が経ちました。勉強と試行錯誤の日々ではございますが、皆様に温かく接して頂き充実した時間を過ごしております。至らない点が多いことかと存じますが、精進してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

生野 和子

平成29年5月より勤務させていただいております。担当は主に医局長関連、同門会、医学生・大学院生に関わる仕事をさせていただいております。

第一外科では平成21年、外来で勤務を始めたときからお世話になっており、今回ご縁がありまして医局で勤務することとなりました。对患者さんではなく、対パソコンに向き合う日々で、不慣れな仕事が続いておりますが、少しでも先生方のお手伝いができますよう努力しております。早く一人前の秘書さんになれるように、今後も努力致しますので何卒宜しくお願い申し上げます。

菅田 友梨絵

今年度の7月より、消化器移植グループの秘書として勤務させていただいております。菅田友梨絵と申します。移植グループに係る業務を担当しております。

臓器移植について「脳死」と「植物状態」の違いを学ぶところからの始まりでした。まだまだわからないことや至らない点が多いですが、いつも優しい先生方と頼りになる先輩秘書の方々にご指導をいただきながら1つずつ業務を覚えております。少しでも先生方のお役に立てるよう日々精進して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

齊藤 真紀子

平成29年9月より時間パートとして勤務しております。大学や大学院で勤務するのは初めてで、医学部の大学院ということで最初はとても緊張しましたが、秘書の皆さんをはじめ周りの方々に恵まれ毎日楽しく勤務しております。

秘書の皆さんのお仕事の補助が仕事のメインになります。少しでもお役に立てるよう努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

■ 病棟クラーク

鈴木 愛

平成25年4月から病棟CRで勤務させていただいております。

担当業務は診療録関連で、NCDへの症例登録などを担当しております。

4月で5年目となり、雇用期間満了が近づいてまいりました。

初めは戸惑うこともございましたが、先生方の温かいご指導のもと、勤め続けることができました。

仕事を通じて様々なことを学ばせていただき、本当に感謝の気持ちで一杯です。

最後になりましたが、皆様の益々のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

今まで本当にありがとうございました。

■ 実験助手

小林 希

所属から10年以上経ち、仕事の内容とそれに伴うものも大きくなりますます責任感を感じております。

より一層の努力を続け教室へ貢献できるよう精進したいと思っております。

三好 早香

技術補助員として、TissueBank検体の処理・管理、また大学院生の先生方の実験のお手伝いをいたしております。TissueBankでは今年もたくさんの症例を登録することが出来ました。過去集めてきた検体を実際に使用する機会も年々増えており、先生方が長年をかけ蓄積してこられた検体がこれからたくさんの発見・成果を生んでいくのだらうと喜ばしく思います。今後も先生方のお役に立てるよう業務に取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

堀米 正敏

医局の実験室から、医歯学新棟の実験室に場所を変えて実験する事になりました。

どのような実験をするのかまだ解りませんが、とても楽しみです。

2017年業績紹介

(学会・論文・研究費一覧・学位取得者)

2017年業績紹介

業績

2017年学会一覧

《学会発表（国内）》

2017.1.21 第23回札幌肝不全懇話会（札幌）

HBV劇症肝不全で急速に肺アスペルギルス症を発症し、肝移植適応を失った1例

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

自己免疫性肝炎に対しABO不適合移植を実施するも死亡した1例

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2017.1.20 第86回大腸癌研究会（盛岡）

腹腔鏡下Miles'手術におけるSSI予防への工夫

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

2017.1.23 第35回肝移植研究会（大阪）

先天性胆道拡張症に発生した多発胆道癌に対し、生体肝移植と脾頭十二指腸切除を同時に実施した1例

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、太田稔、川久保和道、桑谷将城、三橋智子、山下健一郎、武富紹信、蒲池 浩文、神山 俊哉、嶋村 剛

2017.1.27 第7回手術リスクマネジメントフォーラム（高知）

消化器外科領域におけるVTEマネジメント（特別講演）

武富紹信

2017.2.17-18 第34回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会（名古屋）

根治的切除9年後に孤立性腋窩リンパ節転移を来した結腸人工肛門部癌の一例

南波宏征、本間重紀、吉田雅、今泉健、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信、高橋典彦

2017.2.25 第29回代用臓器・再生医学研究会（札幌）

イメージング質量分析（IMS）による阻血再灌流における新規予後予測マーカーの探索

橋本咲月、深井原、梅本浩平、木村太一、大谷晋太郎、中藪拓哉、早坂孝宏、三野和宏、恵淑萍、千葉仁志、嶋村剛、武富紹信

2017.3.1 第6回小樽内視鏡外科フォーラム（小樽）

M&M カンファレンス

本間重紀

2017.3.4 第29回日本小腸移植研究会（名古屋）

ヒルシスブルグ病類縁疾患患児に対する外科治療戦略の検討

脇坂和貴、宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、嶋村剛、武富紹信

2017.3.4 第96回日本小児外科学会北海道地方会（札幌）

大腰筋部分切除を要した後腹膜悪性ラプドイド腫瘍の1例

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、奥村一慶、関俊隆、井口晶裕、武富紹信

2017.3.4-5 第120回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌）

進行肝内胆管癌に対して切除とGemcitabineにより長期予後を得た1例

長津明久、神山俊哉、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

腫瘍径10cm以上の巨大肝細胞癌における肝切除後の再発形式と予後の検討

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

2017.3.8-3.10 第89回日本胃癌学会（広島）

腹腔鏡下胃全摘と開腹胃全摘における食道空腸吻合の成績の比較

川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

2017.3.11 第16回東日本肝移植周術期研究会（東京）

HIV/HCV重複感染肝硬変に対し脳死肝移植を施行した1例

後藤了一、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、瀬田恒一、遠藤知之、藤本勝也、近藤健、鈴木友己、山下健一郎、嶋村 剛

2017.3.11 第44回日本脾・脾島移植研究会（京都）

脾臓移植：予後

嶋村剛、鳴海俊治

2017.3.17 第50回制癌剤適応研究会（徳島）

TACE不能/不応肝細胞癌切除後残肝再発に対するシスプラチン動注+UFT療法の治療成績

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

2017.3.24 第2回ぐんま周術期研究会（前橋）

消化器外科領域におけるVTEマネジメント（特別講演）

武富紹信

2017.4.27-4.29 第117回日本外科学会定期学術集会（横浜）

北海道における外科教育の取り組み

武富紹信

生体肝移植におけるドナー年齢の検討

川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、後藤了一、太田稔、鈴木友己、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

肝内胆管癌の局在および多様性から見た術式選択 肝内胆管癌の局在による臨床病理学的検討

折茂達也、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、若山顕治、永生高広、島田慎吾、武富紹信

ステロイド、NSAIDs長期併用患者に発生した肝癌、胃癌に対し肝外側区切除、幽門側胃切除同時手術施行後、残胃穿孔、Y脚吻合部出血を認めた1例

中本裕紀、川村秀樹、市川伸樹、杉山昂、大野陽介、吉田雅、本間重紀、武富紹信

胃切除後に診断し得た胃癌、腎癌、悪性リンパ腫の3重複癌の1例

南波宏征、川村秀樹、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、大野陽介、杉山昂、中本裕紀、武富紹信

下大静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対してアイエーコール動注+UFT内服併用療法を行い長期CRが得られた1例

田中友香、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

移植前ドナー特異的抗体の生体肝移植後早期グラフト機能不全への影響

巖築慶一、後藤了一、深作慶友、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、

太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

当院における非代償性肝硬変症例の脳死肝移植待機中死亡の特徴
杉山昂、後藤了一、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、神山俊哉、
山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

PTPE後非塞栓葉における経時的門脈血流変化と肝再生の検討
島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、
蒲池浩文、武富紹信

網羅的DNAメチル化解析を用いた肝芽腫遠隔転移予測マーカー
の探求
湊雅嗣、本多昌平、宮城久之、北河徳彦、新開真人、田中水緒、
田中祐吉、武富紹信

希少がんにおける個別化医療を目指した分子マーカーの確立 肝
芽腫エビゲノム異常解析
本多昌平、湊雅嗣、宮城久之、藤好直、檜山英三、北河徳彦、新
海真人、田中水緒、田中祐吉、武富紹信

腹腔鏡下大腸切除術における腹部手術既往の影響
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

炎症性腸疾患におけるSTAT1を介したシグナルカスケードの関
与
木井修平、北村秀光、豊島雄二郎、岡田尚樹、項慧慧、寺田聖、
大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、
武富紹信

IL-6は担がん環境下においてタイプI型抗腫瘍免疫応答を抑制し、
大腸がん肝転移を促進する
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、項慧慧、寺田聖、市川伸樹、
吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

大腸癌肝転移に対する再肝切除のタイミング
横尾 英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、
蒲池浩文、武富紹信

腹腔鏡下胃全摘術後の食道空腸吻合の成績 linear staplerと
circular staplerの比較
川村秀樹、大野陽介、吉田雅、市川伸樹、本間重紀、武富紹信、
高橋昌宏

胃癌における上皮間葉転換(EMT)に注目した血中腫瘍細胞(CTC)
の検出法
石黒友唯、崎浜秀康、大野陽介、吉田雅、市川伸樹、本間重紀、
川村秀樹、武富紹信

Stage II/III大腸癌根治切除後における術前末梢血中単球数の再
発予測バイオマーカーとしての有用性
大野陽介、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

当院における腸管不全症例と移植適応
藤好直、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、柴田賢吾、脇坂和貴、田
中友香、武富紹信

TACE不能/不応な肝細胞癌切除後残肝再発に対するシスプラチ
ン動注+UFT療法の検討
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、永生高広、
蒲池浩文、武富紹信

肝門部領域胆道系腫瘍手術における血行再建手技
蒲池浩文、折茂達也、永生高広、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、
横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

胆嚢癌との鑑別を要した黄色肉芽腫性胆嚢炎の4切除例
柴田賢吾、蒲池浩文、折茂達也、永生高広、島田慎吾、若山顕治、
敦賀陽介、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

Unresectable/borderline resectable膵癌におけるNACRT後
の神経叢浸潤に対する治療効果と適切なSMA神経叢郭清範囲に
関する検討
永生高広、蒲池浩文、折茂達也、敦賀陽介、阪田敏聖、坂本讓、
島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信

網羅的糖鎖解析による肝細胞癌の浸潤能と糖鎖異常の検討
高橋秀徳、神山俊哉、柿坂達彦、相山健、島田慎吾、若山顕治、
永生高広、折茂達也、蒲池浩文、横尾英樹、西村紳一郎、武富紹
信

ヒト化マウスモデルを用いたヒトT細胞のアロ抗原に対する反応
性の検討
深作慶友、後藤了一、巖築慶一、財津雅昭、渡辺正明、川村典生、
腰塚靖之、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

水素ガスによるラット肝長期冷保存再灌流障害軽減効果の検討
エンドセリン-1による血管収縮効果への影響
梅本浩平、深井原、島田慎吾、石川隆壽、若山顕治、大谷晋太郎、
山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

進行胃癌に対する腹腔鏡下胃切除術の周術期成績、長期成績の検
討
渋谷一陽、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、
武富紹信

潰瘍性大腸炎に対するReduced Port Surgery
本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

新生児期に病型診断が困難であった直腸肛門奇形症例の検討
宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

NBNC肝細胞癌切除例における背景肝脂肪含有量と術後短期成
績の検討
岡田尚樹、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、
永生高広、蒲池浩文、岡田宏美、畑中佳奈子、武富紹信

肝癌ソラフェニブ治療における血管新生関連因子Tie2-
expressing monocytes(TEMs)の意義
正司裕隆、由雄祥代、間野洋平、土肥弘義、深井原、考藤達哉、
武富紹信

混合型肝癌切除症例の検討
脇坂和貴、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、永生高広、若山顕治、
折茂達也、蒲池浩文、武富紹信

抗メソテリン抗体(MORAb-009)によるヒト膵癌細胞株に対する
抗腫瘍効果の検討
松澤文彦、蒲池浩文、水上達三、永生高広、畑中豊、古内恵司、
神山俊哉、武富紹信

生体肝移植ドナー肝グラフト採取術におけるPringle法 行うvs
行わない「行わない」(ディベート)

嶋村剛、神山俊哉

肝細胞癌切除症例におけるWFA-M2BP測定の意義（ランチョンセミナー）

武富紹信、藤好直

2017.4.28 第19回外科分子細胞治療研究会（横浜）

癌細胞株を用いた網羅的糖鎖解析による糖鎖異常と癌悪性度の解析～CRISPR/Cas9 systemが可能にする新展開

武富紹信、深井原

2017.5.11-13 第54回日本小児外科学会学術集会（仙台）

肝芽腫の分岐進化に関わるmicroRNA発現異常

本多昌平、湊雅嗣、宮城久之、藤好直、北河徳彦、田中祐吉、田中水緒、新開真人、武富紹信

肺葉外分画症および食道裂孔ヘルニアを有する患児に対し一期的に腹腔鏡下手術を施行した一例

宮城久之、本多昌平、浜田弘巳、湊雅嗣、近藤享史、奥村一慶、河北一誠、武富紹信

網羅的DNAメチル化解析を用いた肝芽腫脱メチル化異常の解析

湊雅嗣、本多昌平、藤好直、宮城久之、新開真人、北河徳彦、田中水緒、田中祐吉、武富紹信

右房内腫瘍塞栓にて心不全徴候を呈し緊急手術となった腎芽腫に対する外科的治療戦略の検討

近藤享史、宮城久之、湊雅嗣、本多昌平、若山顕治、横尾英樹、井口晶裕、橘剛、神山俊哉、武富紹信

胸腰椎椎間孔内への進展を認めた後腹膜悪性ラブドイド腫瘍の1例

奥村一慶、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、関俊隆、井口晶裕、武富紹信

幼児期に便秘を契機に発見され一期的切除を施行したAltman III型仙尾部奇形腫の1例

河北一誠、宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、近藤享史、奥村一慶、井口晶裕、武富紹信

2017.5.20-21 第27回日本臨床工学会（青森）

未来の臨床工学技士を考えた新たな業務展開：肝移植医療における臨床工学技士の役割

太田稔、岡本花織、千葉裕基、柏浦愛美、山本真由美、腰塚靖之、渡辺正明、後藤了一、山下健一郎、嶋村剛

2017.6.7 第43回急性肝不全研究会（広島）

HEVによる昏睡型急性肝不全症例についての検討

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2017.6/7-10 A-PHPBA2017、第29回日本肝胆膵外科学会・学術集会（横浜）

Transparenchymal glissonean approach: TGA - A surgical technique to access the right sided hepatic artery and portal vein for advanced perihilar bile duct cancer

Kamachi H, Orimo T, Tsuruga Y, Shimada S, Wakayama K, Yokoo H, Goto R, Yamashita K, Kamiyama T, Taketomi A

Hepatic arterial infusion of cisplatin combined with oral

administration of Tegafur/Uracil for recurrent TACE refractory HCC after liver resection.

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A.

Salvage hepatectomy for recurrent hepatocellular carcinoma after radiofrequency ablation and/or transcatheter arterial chemoembolization

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A

尾状葉原発肝細胞癌切除例の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、長津明久、蒲池浩文、武富紹信

2017.6.16 第5回北海道小児外科フォーラム（札幌）

肝芽腫化学療法施行時におけるカルバペネム系抗菌薬の使用経験
坂本沙織、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、荒桃子、若山顕治、神山俊哉、嶋村剛、杉山未奈子、長祐子、井口晶裕、武富紹信

2017.6.29 札幌厚生病院医学講演会（札幌）

脂肪肝と肝臓外科（特別講演）

武富紹信

2017.6.30 第92回日本医療機器学会（横浜）

昏睡型急性肝不全に対して可搬型持続的オンライン血液透析濾過装置を用いて意識覚醒を得た1例

太田稔、岡本花織、千葉裕基、後藤了一、腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、山下健一郎、嶋村剛、滝川康裕

2017.7.1 第111回日本臨床外科学会北海道支部総会（釧路市）

経皮経肝的門脈塞栓術後の非塞栓葉における経時的門脈血流変化と肝体積増大因子の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、長津明久、蒲池浩文、武富紹信

尾状葉原発肝細胞癌の予後および臨床病理学的検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、永生高広、長津明久、蒲池浩文、武富紹信

2017.7.6-7 第53回日本肝癌研究会（東京都）

尾状葉原発肝細胞癌の予後および臨床病理学的検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、永生高広、長津明久、蒲池浩文、武富紹信

肝細胞癌の肝予備能評価

折茂達也、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、若山顕治、永生高広、島田慎吾、武富紹信

TACE不能/不応な肝細胞癌切除後残肝再発に対するシスプラチン動注+経口UFT併用療法の検討

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

2017.7.7 第87回大腸癌研究会（四日市）

初発大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術の治療成績

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

Reduced port surgery for lower rectal cancer

Homma S, Ohno Y, Ichikawa N, Yoshida T, Kawamura H, Taketomi A

Loop stoma in colorectal surgery

Yoshida T, Homma S, Ohno Y, Ichikawa N, Kawamura H, and Taketomi A

初発大腸癌切除症例における重複癌の検討

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2017.7.20-22 第72回日本消化器外科学会総会（金沢）

Arterial reconstruction for the surgical resection of perihilar biliary malignancy

Kamachi H, Orimo T, Tsuruga Y, Shimada S, Wakayama K, Yokoo H, Goto R, Yamashita K, Kamiyama T, Taketomi A

安全・安心な臓器移植のためにできること：臓器提供推進と免疫寛容の誘導（シンポジウム）

嶋村剛

大腸癌手術における双孔式ストマの治療成績

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

腹腔動脈起始部狭窄・閉塞を伴う胆膵悪性腫瘍に対する膵頭十二指腸切除の経験

渋谷一陽、蒲池浩文、折茂達也、永生高広、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

残胃癌に対する腹腔鏡下残胃全摘術の短期成績による検討

柴田賢吾、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、高橋昌宏、武富紹信

肝内胆管癌に対する臨床病理学的検討と治療戦略

折茂達也、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、若山顕治、永生高広、島田慎吾、武富紹信

初発大腸癌切除症例における重複癌の検討

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

腹腔鏡下胃切除における超音波凝固切開装置の使用法のコツ 特にリンパ節郭清について

川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

尾状葉原発肝細胞癌の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

ミラノ基準以内の肝細胞癌に対する術前リンパ球単球比(LMR)の予後予測因子としての検討

杉山昂、横尾英樹、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、蒲池浩文、神山俊哉、武富紹信

肝細胞癌切除後再発におけるソラフェニブ治療の有効性

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

腹腔鏡下低位前方切除術におけるReduced Port Surgery

本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

高度進行肝細胞癌に対する治療戦略 高度門脈腫瘍栓(vp3、4)および下大静脈腫瘍栓(vv3)を伴う肝細胞癌に対する治療戦略

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

2017.7.8 第5回埼玉県南西部地区外科・消化器疾患懇話会（川越）

肝切除の最近の工夫（特別講演）

武富紹信

2017.8.5 第23回北海道内視鏡外科研究会（札幌）

腹腔鏡下幽門側胃切除における体腔内吻合によるビルロートⅠ法再建の短期成績

市川伸樹、川村秀樹、大野陽介、吉田雅、本間重紀、武富紹信

2017.8.12 第11回消化器がん学術講演会（徳島）

肝癌治療の最前線

武富紹信

2017.8.25-26 第44回日本膵切研究会（横浜）

腹腔動脈起始部狭窄・閉塞を伴う胆膵悪性腫瘍に対する膵頭十二指腸切除の経験

折茂達也、蒲池浩文、長津明久、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

2017.9.6-7 第115回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌）

潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘術後のafferent limb syndromeに対して腸管固定術を施行した1例

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2017.9.7 第53回日本移植学会総会（旭川）

先天性胆道拡張症に発生した多発胆道癌に対し、生体肝移植と膵頭十二指腸切除を同時に実施した1例

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、太田稔、川久保和道、桑谷将城、三橋智子、山下健一郎、武富紹信、蒲池浩文、神山俊哉、嶋村剛

肝移植における術前抗ドナー抗体陽性の臨床的意義

後藤了一、山下健一郎、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、太田稔、神山俊哉、鈴木友己、武富紹信、嶋村剛

チーム医療としての臓器移植のあり方」臨床工学技士から見た臓器移植への関与

太田稔、岡本花織、千葉裕基、松本剛直、加藤伸彦、寒河江磨、矢萩亮児、法邑まなみ、鶴田智久、石川勝清、堀田記世彦、岩見大基、大岡智学、嶋村剛

臓器移植法から20年：いま社会システムとしての臓器提供の推進を考える

嶋村剛

2017.9.12 Surgical oncology meeting-HCC treatment-（札幌）

EVIDENCEに基づくHCC集学的治療（特別講演）

武富紹信

2017.9.14-15 第9回日本Acute Care Surgery学会学術集会（札幌）

緊急手術を要したブレドニン長期服用患者における結腸憩室炎穿孔の3症例

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2017.9.15 第24回日本門脈圧亢進症学会総会（東京）

肝移植へのブリッジとしての門脈圧亢進症治療

嶋村剛

2017.9.16-17 HOPES 2017 (札幌)

潰瘍性大腸炎に対する腹腔鏡手術

本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、川村 秀樹、武富紹信

術前末梢血中単球数の大腸癌根治切除後における再発予測バイオマーカーとしての有用性

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

腹腔鏡下幽門側胃切除における体腔内吻合によるビルロートⅠ法再建の短期成績

市川伸樹、川村秀樹、大野陽介、吉田雅、本間重紀、武富紹信

当科における肝切除の腸管前処置の変遷と成績

長津明久、神山俊哉、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

右心房内腫瘍栓を伴う高度進行肝細胞癌に対する肝切除術

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、長津明久、蒲池浩文、松居喜郎、武富紹信

仙尾部奇形腫と尿生殖洞遺残による水腫症を合併した女兒の一例
羽田光輝、本多昌平、宮城久之、荒桃子、湊雅嗣、武田賢大、坂本沙織、鈴木麻由、中村美智子、守屋仁彦、武富紹信

腹腔鏡補助下摘出術を施行した機能性副腎腺腫の一例

坂本沙織、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、鈴木麻由、中村明枝、森川俊太郎、山口健史、武富紹信

右房内腫瘍塞栓にて心不全徴候を呈し緊急手術となった腎芽腫の1女児例<HOPES学生セッション>

高橋亮也（5年生）、本多昌平、宮城久之、若山顕治、横尾英樹、橘剛、神山俊哉、武富 紹信

2017.9.20 肝疾患病診ネットワーク講演会（福岡）

肝臓外科領域におけるC型肝炎治療（特別講演）

武富紹信

2017.9.22 第6回とかちラパロ教室（帯広）

技術認定医取得に向けた取り組み

本間重紀

2017.9.23 Liver-related Diseases Forum ～肝疾患のトータルマネジメント～（札幌）

肝疾患治療の最後の砦：北海道における肝移植の現状
嶋村剛

2017.9.28-30 第76回日本癌学会学術総会（横浜）

IL-6 suppresses dendritic cell-mediated antitumor immunity and promotes liver metastasis of colorectal cancer cells

豊島雄二郎、項慧慧、寺田聖、岡田尚樹、木井修平、大野陽介、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信、北村秀光

Identification of aberrant hypermethylation of Cisplatin-resistant associated genes in hepatoblastoma.

藤好直、本多昌平、湊雅嗣、鈴木拓、檜山英三、武富紹信

2017.9.30 第23回肝移植適応研究会（札幌）

HIV/HCV重複感染に対し脳死肝移植を実施（組織接着用シートを併使）した治療経験

後藤了一、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、瀬田恒一、遠藤知之、

藤本勝也、近藤健、鈴木友己、山下健一郎、嶋村剛

2017.10.1 第1回市民公開講座（札幌）

“働くこと”と“移植医療” 北海道移植医療推進財団発足記念
嶋村剛

2017.10.2 第29回愛宕消化器外科研究会（東京）

内視鏡外科技術認定医育成のノウハウについて～北海道大学消化器外科Ⅰの取り組み～（特別講演）

武富紹信

2017.10.7 第38回日本大腸肛門病学会北海道地方会（札幌）

StageⅡ大腸癌における再発予測因子としての術前単球数の有用性

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2017.10.8 第8回奈良大腸癌治療セミナー（奈良）

大腸癌肝転移に対する外科治療戦略（特別講演）

武富紹信

2017.10.12-14 JDDW2017（第21回日本肝臓学会大会および第15回日本消化器外科学会大会）（福岡）

非B非C肝癌の実態と対策（特別発言）

武富紹信

腹腔鏡下大腸切除術における腹部手術既往の影響

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

胃癌術前診断における経腹超音波検査の有用性

市川伸樹、川村秀樹、吉田雅、大野陽介、本間重紀、武富紹信

肝内胆管癌の局在による臨床病理学的検討

折茂達也、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、若山顕治、永生高広、島田慎吾、武富紹信

高度門脈腫瘍栓および下大静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する外科的治療

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

2017.10.20-22 日本癌治療学会学術集会（横浜）

pStageⅢ結腸癌に対するFOLFOXの第Ⅱ相試験[NORTH/HGCSG1003]原発部位による解析

篠原敏樹、結城敏志、川本泰之、中積宏之、高橋典彦、七戸俊明、久須美貴哉、中村文隆、小林良充、岩永一郎、伊藤陽一、坂本直哉、武富紹信、平野聡、小松嘉人

2017.10.22 第44回日本胆道閉鎖症研究会（博多）

肝門部空腸吻合術後早期に門脈狭窄と限局性肝内胆管拡張を来し肝移植へ至った1例

荒桃子、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、武富紹信

2017.10.25 第2回最新の癌治療・研究を学ぶ一秋の勉強会3部作一（唐津）

進行肝癌に対する外科治療の発展と課題ー肝臓移植と肝切除ー（特別講演）

武富紹信

2017.11.1 第26回札幌肝不全懇話会（札幌）

肝移植とPSE

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2017.11.3-4 第47回胃外科・術後障害研究会（横浜）

腹腔鏡下幽門側胃切除における体腔内吻合によるビルロートⅠ法再建の短期成績

市川伸樹、川村秀樹、大野陽介、吉田雅、本間重紀、武富紹信

縫合不全危険因子としての血清アルブミン値の有用（パネルディスカッション）

大野陽介、川村秀樹、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

2017.11.4 第1回北海道膵臓・胆道研究会（札幌）

当科における局所進行膵癌に対する術前化学放射線療法
折茂達也、蒲池浩文、長津明久、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、
神山俊哉、武富紹信

2017.11.9 どうする？この肝不全in釧路2017（釧路）

肝疾患治療の最後の砦：北海道における肝移植の現状
嶋村剛

2017.11.9-11 第59回日本小児血液・がん学会学術集会（松山）

男性化徴候を契機に診断された機能性副腎腺腫の一例
坂本沙織、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、鈴木麻由、中村明枝、
森川俊太郎、武富紹信

2017.11.10-11 第72回大腸肛門病学会学術集会（福岡）

大腸癌手術における双孔式ストマの治療成績
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

PSM解析による 切除不能転移性大腸癌における原発巣切除の意義の検討

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、川村秀樹、川本泰之、
中積宏之、結城敏志、小松嘉人、石川倫啓、江本慎、小笠原和宏、
曾我部進、中西一彰、数井啓蔵、古家乾、上泉洋、加藤寛士、坂
本直哉、武富紹信

術前単球数の大腸癌ハイリスクStageⅡバイオマーカーとしての可能性

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

IL-6は担がん環境下において樹状細胞の機能抑制を介し、大腸がん肝転移を増悪させる

豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、項慧慧、寺田聖、市川伸樹、
吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

炎症性腸疾患におけるSTAT1の関与

木井修平、北村秀光、豊島雄二郎、岡田尚樹、項慧慧、寺田聖、
大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、
武富紹信

2017.11.10-11 第44回日本臓器保存生物医学会学術集会（大阪）

Ex vivo灌流によるAMPK活性化を介した脂肪肝グラフトに対するコンディショニング法の開発

島田慎吾、柴田賢吾、中数拓哉、梅本浩平、小林希、藤好直、三
好早香、早坂孝宏、石川隆壽、深井原、嶋村剛、武富紹信

臓器灌流時のコンディショニング法の探索

深井原、島田慎吾、梅本浩平、中数拓哉、柴田賢吾、早坂孝宏、
鈴木崇史、大谷晋太郎、橋本咲月、三野和宏、嶋村剛、武富紹信

小腸上皮細胞の低温保存における溶存酸素と酸化ストレスの影響
中数拓哉、深井原、島田慎吾、小林希、梅本浩平、柴田賢吾、早

坂孝宏、鈴木崇史、大谷晋太郎、橋本咲月、三野和宏、嶋村剛、
武富紹信

2017.11.17-18第28回日本消化器癌発生学会総会・第9回国際消化器癌発生会議（熊本）

IL-6 suppresses dendritic cell-mediated antitumor immunity and promotes liver metastasis of colorectal cancer cells

Toyoshima Y, Kitamura H, Ohno Y, Xiang H, Terada S, Okada N, Kii S, Ichikawa N, Yoshida T, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

Investigation of aberrant hypermethylation of DNA in association with cisplatin-resistance in hepatoblastoma.
Fujiiyoshi S, Honda S, Minato M, Miyagi H, Suzuki T, Hiyama E, Taketomi A

2017.11.21 第47回リバーサイド消化器懇話会（札幌）

肝疾患治療の選択肢としての肝移植：その現状と今後
嶋村剛

2017.11.23-25 第79回日本臨床外科学会総会（東京）

孤立性右心室転移を来した肝細胞癌の一例
齋藤智哉、神山俊哉、長津明久、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、
横尾英樹、蒲池浩文、大岡智学、松居喜郎、武富紹信

腹腔鏡下Miles'手術におけるSSI予防への工夫

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

切除不能転移性大腸癌において原発巣切除によるリンパ球単球比増加は予後を延長する

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、川村秀樹、石川倫啓、
江本慎、小笠原和宏、中西一彰、数井啓蔵、上泉洋、武富紹信

直腸癌術後における骨盤内再発切除症例の検討

大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

単発肝細胞癌における系統的肝切除術を選択すべき術前リスク因子の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、長津明久、
蒲池浩文、武富紹信

肝不全ゼロを目指した肝切除

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、長津明久、
蒲池浩文、武富紹信

当科における術前処置の変遷とその比較

長津明久、神山俊哉、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、
蒲池浩文、武富紹信

大腸癌肝転移切除後再発に対する外科治療の位置づけ

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、長津明久、
蒲池浩文、武富紹信

肝エキノコックス症に対する減量肝切除の有用性の検討

神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、長津明久、
蒲池浩文、嶋村剛、武富紹信

2017.11.30 どうする？この肝不全in室蘭2017（室蘭）

肝疾患治療の最後の砦：北海道における肝移植の現状
嶋村剛

2017.12.2 第112回日本臨床外科学会北海道支部例会 (札幌)
大腸癌根治切除後における再発予測バイオマーカーとしての術前末梢血単球数の有用性
大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2017.12.3 第300回日本小児科学会北海道地方会例会 (札幌)
先天性門脈体循環シャントに対する治療戦略
本多昌平、宮城久之、荒 桃子、武富紹信、武田充人、山澤弘州、泉岳、阿部二郎、佐々木 理、佐々木大輔、小杉山清隆

2017.12.6 第11回肝臓内視鏡外科研究会 (京都)
腹腔鏡下肝切除と胃切除の同時施行 4 例の検討
長津明久、神山俊哉、川村秀樹、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

2017.12.7-12.9 第30回日本内視鏡外科学会 (京都)
技術認定医と後期研修医における結紮動作の力学的差異
川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信、石井千春

腹腔鏡下大腸切除術における喫煙既往の影響
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

腹腔鏡下幽門側胃切除における体腔内吻合によるビルロート I 法再建の短期成績
市川伸樹、川村秀樹、大野陽介、吉田雅、本間重紀、武富紹信

局所進行大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術の成績
大野陽介、本間重紀、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

当科における腹腔鏡下肝切除と胃切除の同時施行例の検討
長津明久、神山俊哉、川村秀樹、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

《学会発表 (国際)》

2017.3.22-25 SAGES 2017 Annual Meeting, Houston, TX, USA
Safety and efficacy of preoperative elemental diet for patients with circumferential colorectal cancer
Yoshida T, Homma S, Ohno Y, Ichikawa N, Shibasaki S, Takahashi N, Kawamura H, and Taketomi A

Is it safe that laparoscopic colectomy performed by beginner surgeons with an assist by a technical qualified surgeon?
Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Ohno Y, Kawamura H, Kamiizumi Y, Taketomi A

2017.4.29-5.3 American Transplant Congress, Chicago, USA
Cibinetide (ARA 290), the innate repair receptor ligand, improves engraftment in pancreatic islet transplantation by protecting islets and suppressing inflammatory reactions.
Watanabe M, Ming Han Yao, Helen Zemack, Bo-Göran Ericzon, Anthony Cerami, Michael Brines, Torbjörn Lundgren, and Makiko Kumagai-Braesch

2017.5.11 The 7th International Sendai Symposium on

Biliary Atresia (7th ISSBA) , Sendai, Japan
The predictors of early liver transplantation in patients with biliary atresia after Kasai portoenterostomy.
Shibata K, Minato M, Honda S, Miyagi H, Kondo T, Okumura K, Kawakita I, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A.

2017.5.29 The 50th Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) , Seattle, USA
Persistent gastrostomy site infection in patients with laparoscopic and open Nissen fundoplication.
Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A.

2017.6.7 IASGO Advanced Postgraduate Course, Yokohama, Japan
Salvage hepatectomy for recurrent hepatocellular carcinoma after radiofrequency ablation and/or transcatheter arterial chemoembolization
Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A

Hepatectomy and prognoses for hepatocellular carcinoma originated from caudate lobe
Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Einama T, Nagatsu A, Kamachi H, Taketomi A

2017.6.10-14 American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting. June 10-14, 2017, Seattle, WA, USA
Impact of primary tumor resection in colorectal cancer with unresectable metastasis.
Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Ohno Y, Kawamura H, Taketomi A

Pre-operative peripheral monocyte count is a predictor of recurrence after radical resection in patients with Stagell/III colorectal cancer.
Ohno Y, Homma S, Ichikawa N, Yoshida T, Kawamura H, Taketomi A

2017.08.25-26 9th Japanese-Mongolian International Joint Symposium on Surgical Treatment of Digestive Tract Cancers. Invited Lecture (Ulaanbaatar Mongolia)
IL-6 suppresses dendritic cell-mediated antitumor immunity and promotes liver metastasis of colorectal cancer cells
Toyoshima Y, Kitamura H, Ohno Y, Xiang H, Terada S, Okada N, Kii S, Ichikawa N, Yoshida T, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

2017.11.23 The 21st Asian Congress of Surgery. Luncheon Seminar 2, Tokyo, Japan
Treatment strategy of chemotherapy and surgical treatment for HCC.
Taketomi A.

2017年論文一覧

《論文発表》 (欧文)

Yoshida T, Homma S, Shibasaki S, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Kawamura H, Taketomi A. Postoperative analgesia using fentanyl plus celecoxib versus epidural anesthesia after laparoscopic colon resection. *Surg Today*. 2017 Feb;47(2):174-181.

Yoshida T, Homma S, Shibasaki S, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Kawamura H, Taketomi A. Postoperative analgesia using fentanyl plus celecoxib versus epidural anesthesia after laparoscopic colon resection. *Surg Today*. 2017 Feb;47(2):174-181.

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A. Huge hepatocellular carcinoma greater than 10 cm in diameter worsens prognosis by causing distant recurrence after curative resection. *J Surg Oncol*. 2017 Mar;115(3):324-329.

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Einama T, Kakisaka T, Kamachi H, Taketomi A. Clinicopathological Characteristics of Hepatocellular Carcinoma with Microscopic Portal Venous Invasion and the Role of Anatomical Liver Resection in These Cases. *World J Surg*. 2017 Aug;41(8):2087-2094.

Einama T, Abe H, Shichi S, Matsui H, Kanazawa R, Shibuya K, Suzuki T, Matsuzawa F, Hashimoto T, Kohei N, Homma S, Kawamura H, Taketomi A. Long-term survival and prognosis associated with conversion surgery in patients with metastatic gastric cancer. *Mol Clin Oncol*. 2017 Feb;6(2):163-166.

Ohata T, Yokoo H, Kamiyama T, Fukai M, Aiyama T, Hatanaka Y, Hatanaka K, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Kobayashi N, Matsuno Y, Taketomi A. Fatty acid-binding protein 5 function in hepatocellular carcinoma through induction of epithelial-mesenchymal transition. *Cancer Med*. 2017 May;6(5):1049-1061.

Kawamura H, Ohno Y, Ichikawa N, Yoshida T, Homma S, Takahashi M, Taketomi A. Anastomotic complications after laparoscopic total gastrectomy with esophagojejunostomy constructed by circular stapler (OrVil™) versus linear stapler (overlap method). *Surg Endosc*. 2017 May 9. 31(12): 5175-5182.

Shoji H, Yoshio S, Mano Y, Doi H, Sugiyama M, Osawa Y, Kimura K, Arai T, Itokawa N, Atsukawa M, Aoki Y, Fukai M, Taketomi A, Mizokami M, Kanto T. Pro-angiogenic TIE-2-expressing monocytes/TEMs as a biomarker of the effect of sorafenib in patients with advanced hepatocellular carcinoma. *Int J Cancer*. 2017 Sep 1;141(5):1011-1017.

Ohno Y, Toyoshima Y, Yurino H, Monma N, Xiang H, Sumida K, Kaneumi S, Terada S, Hashimoto S, Ikeo K, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi

A, Kitamura H. Lack of interleukin-6 in the tumor microenvironment augments type-1 immunity and increases the efficacy of cancer immunotherapy. *Cancer Sci*. 2017 Oct;108(10):1959-1966.

Homma S, Kawamata F, Yoshida T, Ohno Y, Ichikawa N, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. The Balance Between Surgical Resident Education and Patient Safety in Laparoscopic Colorectal Surgery: Surgical Resident's Performance has No Negative Impact. *Surg Laparosc Endosc Percutan Tech*. 2017 Aug;27(4):295-300.

Ohba G, Yamamoto H, Nakayama M, Honda S, Taketomi A. Single-stage operation for perforated choledochal cyst. *J Pediatr Surg*. 2017 Jul 21. pii: S0022-3468(17)30429-3.

Kamiyama T, Orimo T, Wakayama K, Shimada S, Nagatsu A, Yokoo H, Kamachi H, Yamashita K, Shimamura T, Taketomi A. Survival outcomes of hepatectomy for stage B Hepatocellular carcinoma in the BCLC classification. *World J Surg Oncol*. 2017 Aug 22;15(1):156.

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A. Salvage Hepatectomy for recurrent hepatocellular carcinoma after radiofrequency ablation and/or transcatheter arterial chemoembolization: a propensity score-matched analysis. *Dig Surg*. 2017 Sep 14. doi: 10.1159/000480521.

Matsuzawa F, Homma S, Yoshida T, Konishi Y, Shibasaki S, Ishikawa T, Kawamura H, Takahashi N, Iijima H, Taketomi A. Serosal Laceration During Firing of Powered Linear Stapler Is a Predictor of Staple Malformation. *Surg Innov*. 2017 Dec;24(6):590-597.

Einama T, Kawamata F, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Matsuzawa F, Mizukami T, Konishi Y, Kamiyama T, Yamamoto J, Taketomi A, Todo S. Mesothelin-Specific Immune Responses and Targeted Immunotherapy for Mesothelin-Expressing Tumors. *EBioMedicine*. 2017 Oct;24:16-17.

Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Ohno Y, Kawamura H, Wakizaka K, Nakanishi K, Kazui K, Iijima H, Shomura H, Funakoshi T, Nakano S, Taketomi A. Mentor Tutoring: An Efficient Method for Teaching Laparoscopic Colorectal Surgical Skills in a General Hospital. *Surg Laparosc Endosc Percutan Tech*. 2017 Dec;27(6):479-484.

Kamachi H, Kamiyama T, Tsuruga Y, Orimo T, Wakayama K, Shimada S, Kakisaka T, Yokoo H, Yamashita K, Taketomi A. Transparenchymal glissonean approach: a novel surgical technique for advanced perihilar bile duct cancer. *Langenbecks Arch Surg*. 2017 Oct 23. doi: 10.1007/s00423-017-1633-2.

Kawamata F, Patch AM, Nones K, Bond C, McKeone D, Pearson SA, Homma S, Liu C, Fennell L, Dumenil

T, Hartel G, Kobayasi N, Yokoo H, Fukai M, Nishihara H, Kamiyama T, Burge ME, Karapetis CS, Taketomi A, Leggett B, Waddell N, Whitehall V. Copy number profiles of paired primary and metastatic colorectal cancers. *Oncotarget*. 2017 Dec 15;9(3):3394-3405.

Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada H, Taketomi A. Anal canal duplication presenting with abscess formation. *Pediatr Int*. 2017 Apr;59(4):500-501.

Chida K, Nakanishi K, Shomura H, Homma S, Hattori A, Kazui K, Taketomi A. Spontaneous regression of transverse colon cancer: a case report. *Surg Case Rep*. 2017 Dec;3(1):65.

Ishiguro Y, Homma S, Yoshida T, Ohno Y, Ichikawa N, Kawamura H, Hata H, Kase S, Ishida S, Okada-Kanno H, Hatanaka KC, Taketomi A. Usefulness of PET/CT for early detection of internal malignancies in patients with Muir-Torre syndrome: report of two cases. *Surg Case Rep*. 2017 Dec;3(1):71.

Shibuya K, Kawamura H, Tahara M, Takahashi M, Taketomi A. Laparoscopic Cholecystectomy in a Child Using Slender Forceps. *APSP J Case Rep*. 2017 May 1;8(3):18.

Nagatsu A, Yoshizumi T, Ikegami T, Harimoto N, Harada N, Soejima Y, Taketomi A, Maehara Y. In Situ Posterior Graft Segmentectomy for Large-for-Size Syndrome in Deceased Donor Liver Transplantation in Adults: A Case Report. *Transplant Proc*. 2017 Jun;49(5):1199-1201.

Shibata K, Kawamura H, Ichikawa N, Shibuya K, Yoshida T, Ohno Y, Homma S, Taketomi A. Laparoscopic total gastrectomy for advanced gastric cancer in a patient with situs inversus totalis. *Asian J Endosc Surg*. 2017 Jul 5. doi: 10.1111/ases.12404.

Sakamoto S, Goto R, Kawamura N, Koshizuka Y, Watanabe M, Ota M, Suzuki T, Abo D, Yamashita K, Kamiyama T, Taketomi A, Shimamura T. Petersen's hernia after living donor liver transplantation. *Surg Case Rep*. 2017 Aug 23;3(1):89.

Ishikawa T, Nishikawa M, Nakamoto H, Yokoyama R, Taketomi A. Laparoscopic anterior resection for rectal cancer in a patient with a ventriculoperitoneal shunt. *Asian J Endosc Surg*. 2017 Dec 19. doi: 10.1111/ases.12444.

Kawamura N, Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Hatanaka K, Taketomi A. Hepatectomy for liver metastasis from gastrointestinal stromal tumor in the era of imatinib mesylate: a case series study. *Int Canc Conf J*. 6, 121-125, 2017

Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A. Factors Associated with the Risk of Persistent Gastrostomy Site Infection Following Laparoscopic or

Open Nissen Fundoplication. *Afr J Paediatr Surg*. 2017 Apr-Jun;14(2):21-23.

(和文)

若山顕治、神山俊哉、武富紹信. 【進行肝細胞癌に対する治療戦略（集学的治療を含めて）】 外科的治療 巨大肝細胞癌に対する外科治療（解説/特集）外科（0016-593X）79巻2号 Page141-144（2017.02）

深井原、島田慎吾、梅本浩平、中薮拓哉、小林希、三野和宏、嶋村剛、武富紹信.臓器灌流法の先にあるべき技術とは？（解説）Organ Biology（1340-5152）24巻2号 Page49-54（2017.07）

武富紹信.【激変する肝疾患診療の現状】肝腫瘍に対する最近の外科的治療. 臨床と研究（0021-4965）94巻5号 Page592-597(2017.05)

武富紹信、若山顕治. 標準術式アトラス 肝臓－後区域切除. 臨床外科 72巻11号 Page196-201（2017.10）

高橋周作、松本哲、乾野幸子、野口慶太、石津寛之、高橋昌宏、川村秀樹、武富紹信. 【食道胃接合部癌の治療戦略】食道胃接合部腺癌切除例における至適治療法の検討（原著論文/特集）癌の臨床（0021-4949）62巻6号 Page279-287(2017.01)

佐野修平、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、岡田宏美、武富紹信. 腹腔鏡と会陰アプローチを行い完全切除可能であった前仙骨部epidermoid cystの1例. 日本外科系連合学会誌（0385-7883）42巻1号 Page134-138（2017.02）.

大平将史、後藤了一、腰塚靖之、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、鈴木友己、嶋村剛. 常染色体劣性多発性嚢胞腎に伴う肝線維症に対し脳死肝移植を施行した1例.移植（0578-7947）52巻1号 Page60-66（2017.04）.

矢部沙織、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、三橋智子、岡田宏美、武富紹信. 家族性大腸腺腫症術後30年で発生した結腸人工肛門部癌の1例. 日本消化器外科学会雑誌（0386-9768）50巻4号 Page317-325（2017.04）.

杉山昂、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信. 腸胃動脈が原因となった広汎子宮全摘術後のイレウスの3例. 日本臨床外科学会雑誌（1345-2843）78巻5号 Page1144-1149(2017.05).

村田竜平、神山俊哉、菅野宏美、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富 紹信.自然退縮を来した肝静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌の1例. 日本消化器外科学会雑誌（0386-9768）50巻7号 Page535-543（2017.07）.

柴田賢吾、川村秀樹、吉田雅、大野陽介、本間重紀、武富紹信.腹腔鏡手術を行ったHIV感染症併存小腸癌の1例. 日本臨床外科学会雑誌（1345-2843）78巻7号 Page1547-1552（2017.07）.

柴田賢吾、横田良一、巖築慶一、廣方玄太郎、田口宏一、岩木宏之、武富紹信
多発肺転移が術前化学療法で消失し根治術後6年生存している直腸癌の1例. 日本臨床外科学会雑誌（1345-2843）78巻11号 Page2497-2502（2017.11）

中本裕紀、川村秀樹、吉田雅、市川伸樹、大野陽介、本間重紀、

若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信
腹腔鏡下幽門側胃切除,肝外側区切除術後に残胃潰瘍穿孔とY
脚吻合部出血を発症した1例. 日本外科系連合学会誌 (0385-
7883) 42巻6号 Page937-945 (2017.12)

研究費一覧

種別	事業名	研究代表者	研究分担者	交付額 (分担金配分額)	研究課題名
科研費	基盤研究 (B)	武富 紹信		4,300,000	炎症性腸疾患における神経ペプチドシグナルの制御機構解明と疾患治療への応用
	基盤研究 (S)	(前原 喜彦)	武富 紹信	500,000	がん幹細胞化に関与するSphere形成メカニズムを標的とした革新的治療開発
	基盤研究 (C)	神山 俊哉		1,200,000	肝癌細胞株における糖鎖異常と浸潤能との関連性の解析
	基盤研究 (S)	(西村紳一郎)	神山 俊哉	1,500,000	網羅的糖鎖解析による新規癌マーカーの探索と診断技術の開発
	基盤研究 (B)	嶋村 剛		3,000,000	脂肪肝グラフトのミトコンドリア機能と抗酸化能を増強する画期的な肝体外灌流法の開発
	基盤研究 (C)	高橋 典彦		1,100,000	IL-6による免疫抑制を介した大腸がん肝転移機構の解明と新規治療法開発
	基盤研究 (C)	本多 昌平		100,000	肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
	基盤研究 (A)	(檜山 英三)	本多 昌平	250,000	小児がん研究グループによる小児肝がんの海外診療状況調査と国際共同臨床研究基盤整備
	基盤研究 (C)	後藤 了一		1,000,000	ヒト血管移植片に対する抗ドナー抗体の病的意義と免疫抑制性細胞による治療効果の検討
	基盤研究 (C)	折茂 達也		1,400,000	APC結合タンパクEB1による膵癌の放射線抵抗性の画期的診断とその分子機構の解明
	基盤研究 (C)	深井 原		1,500,000	14-3-3とNrf2の制御による革新的な心停止腎グラフトの灌流修復法の開発
	基盤研究 (C)	渡辺 正明		1,600,000	膵島移植における長期グラフト生着のための治療法の開発
	挑戦的萌芽研究	砂原 正男		1,300,000	肝芽腫局所進展に関わるドライバージェノム変異の解明
	若手研究 (B)	柴崎 晋		900,000	EMTに注目した胃癌における循環・骨髄腫瘍細胞の臨床的意義の検討
	若手研究 (B)	財津 雅昭		1,500,000	慢性拒絶反応における血管平滑筋細胞に対する制御性T細胞の効果の検討
	若手研究 (B)	島田 慎吾		1,200,000	脂肪切除後の分子病態解明と抗酸化能増強による易障害性・易転移性克服法の開発
	若手研究 (B)	大野 陽介		1,300,000	大腸がん微小環境下における抗原提示細胞の機能制御を基軸とした新規治療法の開発
AMED・厚労科研	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 ii	(溝上 雅史)	武富 紹信	(10,000,000)	個別化医療に対応したゲノム編集技術による肝臓内HBVゲノムの完全不活化を目指した革新的治療法の包括的開発
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	(考藤 達哉)	武富 紹信	(2,600,000)	非炎症性肝がんに関与する微小環境の解明に基づく病態関連マーカーと治療法の開発
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	(坂本 直哉)	武富 紹信	(2,000,000)	慢性肝疾患の組織病態進展機構の解析および血清組織糖鎖の網羅的探索による予後予測マーカーの構築
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	(松浦 善治)	武富 紹信	(1,750,000)	C型肝炎における慢性肝炎から発がんに至るまでの病態解明とその制御に関する研究
	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	(前原 喜彦)	武富 紹信	(300,001)	多施設共同研究による移植後肝炎ウイルス再発に対する標準的治療の確立
	厚生労働行政推進調査事業費補助金 エイズ対策政策研究事業	(江口 晋)	嶋村 剛	(500,000)	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究
その他	上原記念生命科学財団	武富 紹信		5,000,000	網羅的epigenetic解析による小児肝芽腫治療抵抗性の解明
	公益信託 榆刀会外科医学研究助成基金	吉田 雅		900,000	胃癌において上皮間葉転換した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発
	公益財団法人伊藤医薬学術交流財団	深作 慶友		200,000	生体肝移植後患者におけるヒト化マウスモデルを用いた移植後免疫モニタリング法の確立
	公益信託 外科学研究助成基金	島田 慎吾		500,000	脂肪肝切除後における障害軽減法および腫瘍細胞生着に対する制御法の開発

2017年業績紹介

〈学位取得者〉

■ 学位取得者（博士）

大畑 多嘉宣

■ 学位取得年月

2017年9月



■ 学位論文名

肝細胞癌におけるFatty acid binding protein 5(FABP5)発現による上皮間葉転換に関する研究 (Studies on epithelial-mesenchymal transition induced by expression of Fatty acid binding protein 5(FABP5) for hepatocellular carcinoma)

■ 基礎論文

Ohata T, Yokoo H, Kamiyama T, Fukai M, Aiyama T, Hatanaka Y, Hatanaka K, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Kobayashi N, Matsuno Y, Taketomi A. Fatty acid binding protein 5 function in hepatocellular carcinoma through induction of epithelial-mesenchymal transition. Cancer Med. 2017; 6(5): 1049-1061

■ 要 旨

【背景】

肝がんは予後不良な悪性疾患であり予後向上のためには切除後における多中心性再発・肝内転移の抑制、転移形成後腫瘍増殖の抑制が重要である。我々は過去にFABP5が非癌部と比較して肝細胞癌に発現していることを世界で初めて報告した。

【方法】

- ① 過去10年間のHCC切除症例組織に対し抗FABP5抗体を用いた免疫組織化学染色を行った。
- ② 肝癌細胞株であるHepG2でFABP5過剰発現株、Li-7でFABP5発現抑制株を作製し、悪性度の検討を行った。
- ③ 皮下注モデル：ヌードマウスを用い、肝癌細胞株を肩甲下に皮下注した。肝内転移モデル：ヌードマウスに肝癌細胞株を選択的に門脈右枝に注射し肝表面の肝転移巣数を計測した。肺転移モデル：ヌードマウスの尾静脈に肝癌細胞株を注射し、肺転移巣の有無を確認した。
- ④ PCR ArrayとWestern BlotでFABP5の悪性度にかかわる遺伝子発現プロファイリングを解析した。

【結果】

- ① 全症例中57.2%にFABP5発現を認めた。予後・再発の検討ではFABP5陽性群は陰性群と比較して予後、再発いずれにおいても予後不良であった。
- ② FABP5発現抑制により悪性度が優位に低下し、FABP5発現により悪性度が優位に亢進することが確認された。

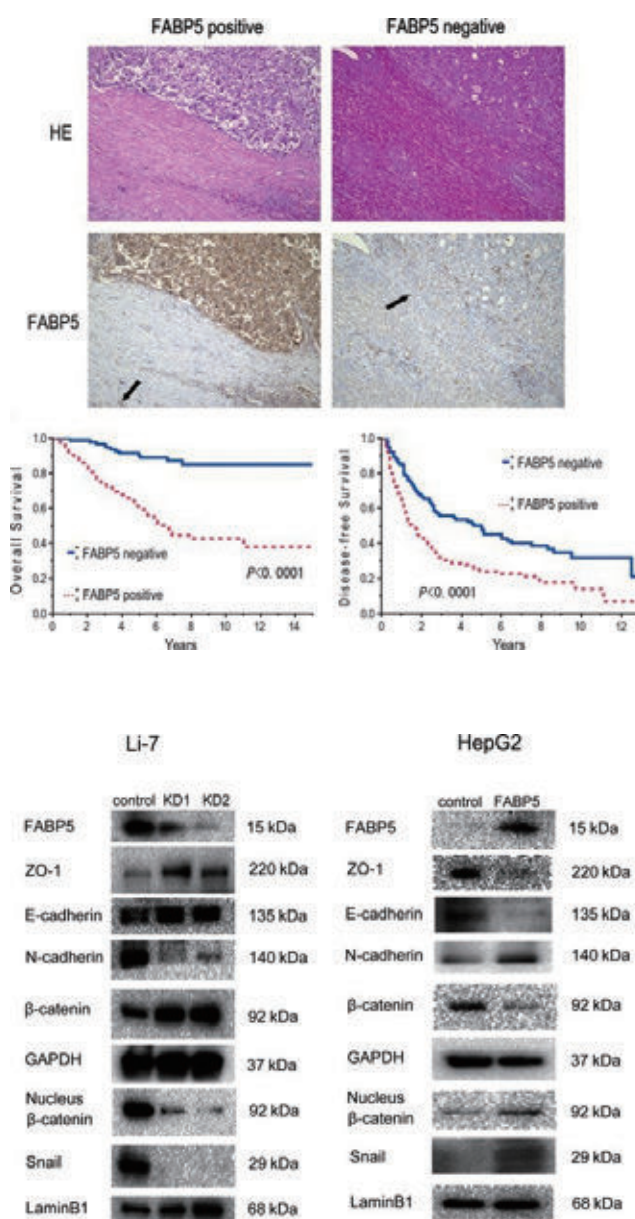
- ③ マウス皮下注モデルではFABP5高発現株による腫瘍が低発現株よりも優位に腫瘍積が大きく、肝転移、肺転移モデル双方においてFABP5高発現群で転移形成を確認した。

- ④ PCR Array、Western Blot法にてFABP5発現の抑制にてEMT関連分子発現が低下することを確認した。

【結論】

FABP5が新たな肝細胞癌の悪性度バイオマーカーおよび分子治療ターゲットとして臨床応用されることが強く期待できると考えられた。

Figure



■ 学位取得者（修士）

大谷 晋太郎

■ 学位取得年月

2017年3月



■ 学位論文名

「心筋細胞の低温酸素化/復温に対する新規抗酸化物の保護効果の検討」

(A novel antioxidant confers protection against cold preservation injury in cardiomyocytes)

■ 要 旨

【背景と目的】

ドナー不足は移植医療の課題であり、解決策の一つとして EOD グラフトの活用が模索されてきた。単純冷保存の限界を克服する方策として、低温酸素化灌流の有用性が報告されたが、低温下でのミトコンドリア機能や酸化ストレスの推移は不明な点が多い。本研究では、冷保存許容時間が最も短い臓器の一つである心臓の低温酸素化/復温における天然物由来新規抗酸化物（物質X）の障害軽減効果と作用メカニズムを検討した。

【材料と方法】

心筋細胞（H9c2）を用いて、低温酸素化灌流を模した *in vitro* 48時間低温酸素化/復温モデルを作成し、細胞死、ミトコンドリア機能、生存シグナル、酸化ストレスを評価した。

【結果】

無治療群では死細胞が増加し、冷保存終了時・復温後のミトコンドリア機能が低下した。物質Xの復温時投与は無効であったが、冷保存時投与ではこれらの変化が著明に抑制された。冷保存時投与では、復温後の生存シグナルカスケード（PI3K/ Akt/ mTOR/ p70S6K）の活性化、レドックス状態の改善、脂質過酸化の抑制、Antioxidant responsive element（ARE）結合転写活性因子（Nrf2ではなくc-Jun）の核内移行と引き続き抗酸化タンパク（HO-1, NQO1）の発現が増強した。

【結論】

物質Xは低温酸素化/復温による細胞死、ミトコンドリア障害、酸化ストレスを軽減した。生存シグナル活性維持やAREを介する抗酸化タンパクの発現増強が復温後の障害進展の抑制に関与した。物質Xは低温酸素化灌流による心臓修復に有用と考えられた。

■ 代表的なfigure, table（2, 3個）

図1. 物質Xによる細胞死抑制効果

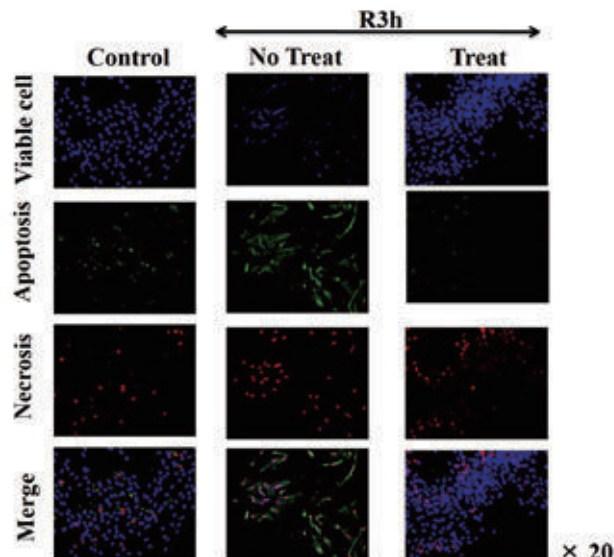
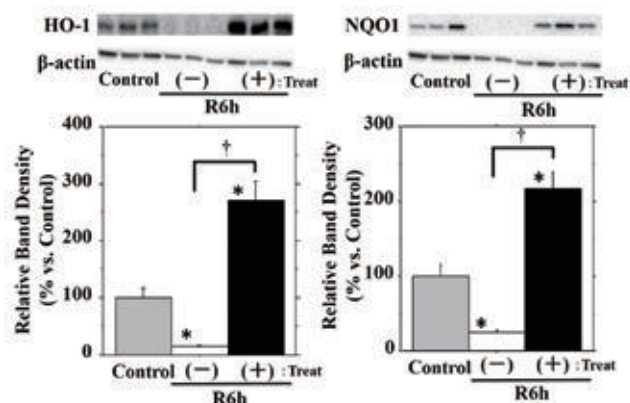


図2. 物質Xによる抗酸化タンパクの発現増強効果



■ 学位取得者（修士）

橋本 咲月

■ 学位取得年月

2017年3月



■ 学位論文名

ラット脂肪肝における温虚血再灌流障害のメカニズム解明
—イメージング質量分析法による新規予後予測マーカーの探索—

■ 要 旨

【背景と目的】 癌治療のための肝切除や心停止ドナーの肝移植グラフトにおいて、温虚血再灌流障害が問題となり、脂肪肝ではその障害が増悪することが知られているが、未だそのメカニズムは完全には解明されていない。本研究では、凍結切片から網羅的にかつ局在情報と共に分子を解析できるイメージング質量分析（imaging mass spectrometry; IMS）を用いて、脂肪肝の温虚血再灌流で早期に変動し、障害の予後を予測し得るマーカーを探索することを目的とした。

【方法】 ラットを正常肝群、脂肪肝群に分け、45分、75分の70%温虚血、再灌流を施した。虚血前、虚血終了時、再灌流後1時間、6時間の肝臓、血液を採取し解析した。従来法の血中ALT、AST活性、病理学的組織評価、アポトーシス、ATP定量により障害程度を評価し、IMSで得られた結果を専用ソフトにより解析し、変動分子を検出した。

【結果と考察】 正常肝と脂肪肝の群間、あるいは経時的に変動する、239種類のピークを検出した。温虚血中に血中ALT活性、組織傷害スコアは、有意差を認めなかったが、IMSで検出したLysophosphatidylinositol（18:0）（LPI: m/z 599.4）は脂肪肝の門脈周囲で著明に増加し、門脈内皮に発現したcPLA2活性との関係を示唆した。

【結語】 LPI（18:0）は脂肪肝の温虚血再灌流において障害の顕在化に先んじて温虚血中に増加したため、予後予測マーカーとしての有望性と、IMSの有用性が示唆された。

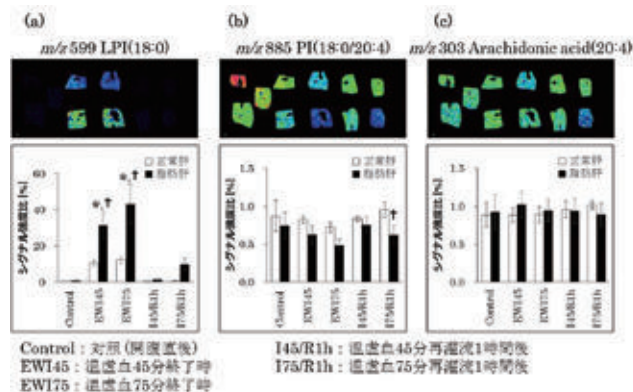


図1 着目分子の変動パターン

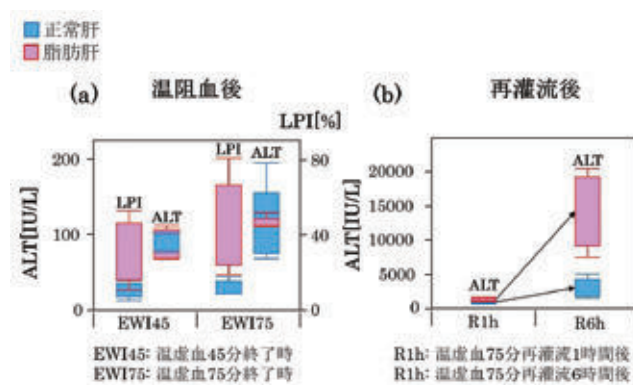


図2 LPIとALTの経時変化の比較

2017年の年表・年間行事

2017年の年表・年間行事

月	医局行事	学会	研究会・特別講演・セミナーなど
1月	1.4 仕事始め 1.21 教室総会	1.14 第11回大塚リバーシンポジウム静岡 1.20 第86回大腸癌研究会 1.23 第35回肝移植研究会	1.7 日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー 1.20 New Year Seminar2017 1.21 第23回札幌肝不全懇話会 1.24 第16回モーニングセミナー
2月	2.8 平成28年度3月修士課程修了予定者「学位審査公開発表会」		
3月	3.4 第11回医局対抗バスケットボール大会 3.12 アニマルラボ 3.22 消化器外科Ⅰ 送別会(人事異動)	3.4 第29回日本小腸移植研究会 3.4-5 第120回日本消化器病学会北海道支部例会 3.4 第96回日本小児外科学会北海道地方会 3.8-10 第89回日本胃癌学会 3.9-11 第44回日本集中治療医学会 3.11 第16回東日本肝移植周術期研究会 3.11 第44回日本膵・膵島移植研究会 3.17 第50回制癌剤適応研究会 3.22-25 SAGES 2017 Annual Meeting, Houston, TX, USA	3.1 第6回小樽内視鏡外科フォーラム 3.10 第4回医工連携セミナー
4月	(人事異動) 4.3 年度始めの会 後期研修医7名が入局 4.19 7-2病棟歓迎会 4.28 日本外科学会定期学術集会 第一外科同門親睦会	4.27-29 第117回日本外科学会定期学術集会 4.29-5.3 American Transplant Congress, Chicago, USA	4.15 第4回北海道肝臓内視鏡外科セミナー
5月		5.11-13 第54回日本小児外科学術集会 5.11 The 7th International Sendai Symposium on Biliary Atresia (7th ISSBA) (Sendai, Japan) 5.20-21 第27回日本臨床工学会 5.29 The 50th Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) (Seattle, USA)	5.19 術後疼痛管理セミナー 5.20 第4回北海道ヘルニア倶楽部 5.27 第115回北海道癌談話会春季シンポジウム
6月	6.3 北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会 平成29年度新入局員歓迎会 6.6 医局対抗野球 6.14 縫合結紮講習会 6.16 縫合結紮競技会 6.24 Wet labo	6.1 第35回日本肝移植研究会 6.7 IASGO Advanced Postgraduate Course in Yokohama (Yokohama) 6.7 第43回急性肝不全研究会 6.7-10 A-PHPBA2017, 第29回日本肝胆膵外科学会・学術集会 6.10-14 American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting, June 10-14, 2017, Seattle, WA, USA 6.30 第92回日本医療機器学会	6.16 第5回北海道小児外科フォーラム
7月	7.3 6年生選択実習慰労会 7.14 消化器外科Ⅰ医局説明会 7.21 消化器外科学会総会 第一外科同門会懇親会 7.29-30 7-2病棟・医局旅行	7.1 第111回日本臨床外科学会北海道支部総会 7.6-7 第53回日本肝癌研究会 7.7 第87回大腸癌研究会 7.20-22 第72回日本消化器外科学会総会	7.15 第3回腎不全を学ぶ外科医の会 7.28 第5回北海道消化器癌カンファレンス
8月	8.7 医局BBQ大会 8.19 アニマルラボ	8.5 第23回北海道内視鏡外科研究会 8.25-26 第44回日本膵切研究会	8.25 第3回敗血症性DICセミナー
9月	9.15 平成29年度9月修士学位審査「公開発表」	9.6-7 第115回日本消化器病学会北海道支部例会 9.7-8 第53回日本移植学会 9.9 第1回日本集中治療医学会北海道支部会 9.15 第24回日本門脈圧亢進症学会総会 9.16 第97回日本小児外科学会北海道地方会 9.16-17 HOPES2017 9.14-15 第9回日本Acute Care Surgery学会学術集会	9.2 第2回Surgical Oncology Meeting 9.22 第6回とかちラバロ教室 9.23 第5回北海道サージカルアカデミー 9.23 Liver-related Diseases Forum ~肝疾患のトータルマネジメント~ 9.30 第23回肝移植適応研究会
10月		10.7 第38回日本大腸肛門病学会北海道地方会 10.8-9 第43回日本体外循環技術医学大会 10.12-15 第25回日本消化器関連学会週間 10.12-14 第15回日本消化器外科学会大会 10.20-22 第44回日本小児栄養消化器肝臓学会 10.22 第44回日本胆道閉鎖症研究会	10.9 第11回北海道アドバンスセミナー 10.27 第5回North Japan Cancer Forum
11月	11.12 医局対抗サッカー大会予選リーグ 11.18 関連病院院長・医長連絡会議 11.29 川村秀樹先生 消化器外科Ⅰ特任教授就任祝賀会	11.3-4 第47回胃外科・術後障害研究会 11.4 第1回北海道膵臓・胆道研究会 11.10-11 第72回大腸肛門病学会学術集会 11.10-11 第44回日本臓器保存生物医学学会学術集会 11.23-25 第79回日本臨床外科学会総会	11.1 第26回札幌肝不全懇話会 11.9 どうする？この肝不全in釧路2017 11.10 第6回北海道サージカルインフェクション 11.21 第17回モーニングセミナー 11.21 第47回リバーサイド消化器懇話会 11.30 どうする？この肝不全in室蘭2017
12月	12.2 北海道大学第一外科同門会「楡刀会」忘年会 12.2 医局対抗サッカー大会決勝 12.13 7-2・病棟忘年会 12.28 仕事納めの会	12.2 第112回日本臨床外科学会北海道支部例会 12.3 第300回日本小児科学会北海道地方会例会 12.6 第11回肝臓内視鏡外科研究会 12.7-9 第30回日本内視鏡外科学会	

1/4 仕事始めの会を行いました。

平成29年1月4日、医局カンファレンスルームで仕事始めの会を行いました。
 年末年始は大きな天候の変化もなく、ほぼ全員が休暇や出張明けで出席されました。
 昨年同様にDale Breckenridge Carnegie（デール・カーネギー）の言葉である
 『Today is life – the only life you are sure of.（人生とは今日一日のことである。
 あなたが確実に生きられる唯一の人生は今日なのである。）』を心に刻んで、今年一年
 を過ごしていけるようにと、仕事始めにあたり武富教授より挨拶がありました。

一日一日を大切に過ごしていくと言う極当たり前のことはやはり簡単ではないが、
 自分の目標を達成するために
 日々を精一杯精進し、悔いのな
 い一日、そして一年にしてい
 きたいと感じました。

本年も消化器外科として前述
 の言葉を実践できるよう診療・
 研究・教育に携わっていきます。



1/20 New Year Seminar 2017が開催されました。

平成29年1月20日に武田薬品工業株式会社主催のもと、New Year Seminar 2017
 がホテルニューオータニ札幌で開催されました。特別講演1として当科准教授 神
 山俊哉先生座長のもと、JA北海道厚生連旭川厚生病院 診療部長（兼）臨床研修センター
 長（兼）主任部長 橋本喜夫先生が「皮膚科医からみた抗EGFR抗体による皮膚障害」
 についてご講演頂きました。一般的な薬疹から分子標的薬における薬疹まで、具体的な
 症例の写真を混じえて、発症機序や対処療法など実臨床につながる内容をご紹介頂きま
 した。また、漢方にも精通されており、化学療法の副作用への漢方の応用についても大
 変勉強になる内容でした。

特別講演2として、当科教授 武富紹信先生座長のもと、山口大学大学院 医学研究
 科 消化器・腫瘍外科学教授 永野浩昭先生に「大腸癌肝転移症例に対する治療戦略について」というタイトルで、特に肝胆
 脾外科医からの視点に立ってご講演いただきました。ご自身の様々な手術経験を織り交ぜながら話される内容を、興味深く
 聞くことができました。特に、このような症例でも肝切除できるのかと思わせるような症例提示もあり、外科切除の適応に
 関して考えさせられる内容でした。

最後に、このような講演会の機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。



1/21 教室総会を開催いたしました。

2017年1月21日、医学部臨床大講堂で消化器外科の教室総会が開催され、大学・関連施設から数十名の先生方が参加されました。

今年は室蘭日鋼記念病院の高田譲二先生が議長に選出され、会の進行をしていただきました。

例年通りではありますが、外来・病棟・内務報告とあり、その後、臨床5グループ（小児・消化管・肝・胆膵・移植）、研究グループより臨床、学術実績や今後の目標などが示されました。また武富紹信教授より来年度の医局長の推薦があり、本年度に引き続き本間重紀先生が務めることが承認されました。

関連施設の先生方だけでなく、大学に勤めている先生方も、現状の大学で行っている臨床・基礎研究の実績などを再度確認する良い機会になったと感じます。

教室総会後は、医局カンファレンスルームで顔見せ会もあり、大学・関連施設の先生方が近況を報告しあい、また来年度に向けての気持ちを新たにされていました。

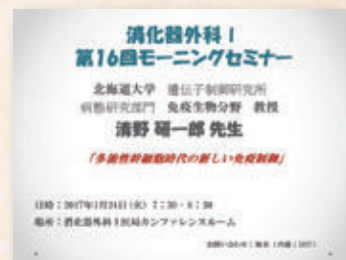


1/24 第16回モーニングセミナーが開催されました。

平成29年1月24日に第16回モーニングセミナーを開催しました。今回は北海道大学 遺伝子制御研究所病態研究部門免疫生物分野の教授 清野研一郎先生をお招きし、「多能性幹細胞時代の新しい免疫制御」というテーマで、移植免疫と腫瘍免疫の2つの内容について最新の知見をご講演いただきました。

移植免疫：消化器外科Ⅰでは臓器移植を行っていますが、現状では免疫抑制剤は不可欠です。今回お話しいただいた新しい免疫制御法は多能性幹細胞から制御性免疫細胞を誘導する方法でした。臨床応用されれば免疫抑制剤のデメリットが大きく軽減される期待が膨らむお話をいただきました。

腫瘍免疫：消化器癌も消化器外科Ⅰで日常的に関わっている分野です。近年、癌の悪性度や抗癌剤耐性に関わる癌微小環境の分子機構が次々と解明されています。今回お話しいただいたIL-34は新たにみつかった分子であり、多発性骨髄腫などの複数の腫瘍で発現が亢進していることがわかりました。今後は、消化器癌でもIL-34がどのように病態に関与しているか解明すべく連携を深めていきたいと感じました。



平成28年度3月修士課程修了予定者「学位審査公開發表会」が行われ、当分野からは大谷晋太郎さん（学位論文題名：心筋細胞の低温酸素化/復温に対する新規抗酸化物の保護効果の検討）と橋本咲月さん（学位論文題名：ラット脂肪肝における温虚血再灌流障害のメカニズム解明ーイメージング質量分析法による新規予後予測マーカーの探索ー）が発表されました。

大谷さん、橋本さん、おめでとうございます。

これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



3/4 第11回医局対抗バスケットボール大会

2017年3月4日(土)に札幌市東区体育館にて、第11回医局対抗バスケットボール大会が開催されました。参加チームは当科を含め合計8チームでした。

予選リーグは2戦2勝の1位通過で決勝トーナメントに進み、準決勝は第二外科との対戦となりました。白熱した試合となり、後半終盤にリードしましたが、その後逆転を許し14-16で惜敗してしまう結果となりました。最終順位は3位でありました。2年連続の優勝とはなりませんでしたが、参加選手全員を出場させることができました。そして第一外科一丸となって試合ができ、第一外科の結束を強める試合ができました。また看護師や放射線技師の出場もありコミュニケーションを深める有意義な時間にもなりました。

試合後はジンギスカン屋で打ち上げを行い、各々来年への雪辱を誓いつつ、大変楽しい飲み会となりました。

この度は医局対抗バスケットボールへの多大なご支援・ご声援をいただき本当にありがとうございました。遠方からの先生のご参加もあり、ご理解・ご協力いただきました各関連病院の先生方に対しこの場を借りて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



3/10 第4回医工連携セミナーが開催されました。

2017年3月10日にコヴィディエンジャパン株式会社主催のもと、ホテルオークラ札幌にて、第4回医工連携セミナーが開催されました。一般演題として、当科助教 本間重紀先生座長のもと、JA北海道厚生連旭川厚生病院外科の大平将史先生が「単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術の手術操作性におけるポート臓器間距離の影響」と題してご発表頂きました。単孔式胆嚢摘出術における臍とCalot三角との距離を測定し、その距離が手術の難易度に深く関与するとの内容でした。日常臨床の疑問点を目に見える形に変えてご発表頂き、大変勉強になりました。

特別講演では、当科教授 武富紹信先生座長のもと、九州大学大学院 先進医療医学講座教授 橋爪誠先生から「インテリジェント手術ロボット開発の現状」についてご発表頂きました。遠隔操作によるロボット手術やnavigation surgeryなどといった、医学と工学とが融合した技術の進歩について非常に詳細にレクチャーして頂き、普段知る事の出来ない分野の技術について拝聴することが出来ました。

当日は多くの先生方にご参加頂き、大変盛況な会となりました。ご講演賜りました先生方、ご参加頂きました皆様方に深く感謝申し上げます。



3/12 アニマルラボが開催されました。

2017年3月12日にanimal labが神奈川県川崎市アドバンストレーニングセンター川崎で開催されました。講師の先生方にご指導いただき、若手医局員と研修医が「腹腔鏡下縫合結紮」、「腹腔鏡下幽門側胃切除」、「腹腔鏡下高位前方切除」を行いました。3年目医局員は今回が2回目ということもあり、慣れない手つきながらも前回よりも成長したと実感したと同時に新たな課題も見つけ大変勉強になりました。

講師としてお越し頂いた北海道がんセンター 前田好章先生、当院 川村秀樹先生、市川伸樹先生、そしてanimal lab開催に際しご協力頂いた関係者の皆様に、この場をお借りして、感謝申し上げます。

動物への感謝及び畏敬の念を抱きつつ、今回の経験を日々の診療に生かしていきたいと思います。



3/22 病棟、消化器外科I、乳腺外科送別会が開催されました。

3月22日、7-2病棟、消化器外科I、乳腺外科送別会を開催いたしました。一次会、二次会共に涙あり、笑いありの非常に思い出深いものとなりました。

今年も医師16名、大学院生2名、看護師4名の合計22名が現在の職場から旅立つことになりました。みなさまそれぞれ別々の道を歩むこととなりますが、これまでの経験を生かし、きっと新たな環境でも楽しみながら日々を過ごされることと思います。旅立たれるみなさまの今後の一層の御活躍を祈念いたします。



3/31 小野塚師長がご退職されました。

2017年3月31日をもちまして、北海道大学病院7-2病棟の小野塚美香看護師長がご退職されました。長年にわたりご指導賜りまして、誠に有難うございました。今後のご健康と、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。



4/1

高橋昌宏先生（55期）がJCHO札幌北辰病院の院長に就任されました。



本年4月1日より、JCHO札幌北辰病院長に就任いたしました。佐野文夫先生、秦温信先生、佐々木文章先生という北大第一外科の偉大なる諸先生の後を引き継ぐことになりました。私にとってはいずれの先生も雲の上のような方たちばかりですのであまり考えないようにしています。千歳市立病院（現市民病院）から始まり、釧路労災病院、北大病院、富良野協会病院、上川町立病院、北大病院、札幌北楡病院、旭川厚生病院、札幌厚生病院を経て札幌北辰病院にたどり着いた感があります。移動していろいろと整理していましたが、7年前に旭川から札幌に転勤の際の未開封の段ボール箱の中から何と故秦温信先生から頂いた「北辰の如く」、「北辰をめざして」の2冊が新品のまま現れてきました。秦先生には誠に申し訳ないと思いながら読ませていただきました。関場不二彦先生の偉大なる功績も然ることながら、多忙な中でよく調査されて2冊も上梓された秦先生の情熱に痛く感激しました。65歳で定年を迎え、畑の充実と野球の指導を考えていたのですが、この計画はもう少し先になりそうです。武富先生の「ノーサイド」の笛が鳴るまで秦先生の著書にある「自彊不息」の精神でやっていこうかと思っています。

4/3

平成29年度 年度始めの会を行いました。

平成29年4月3日朝、医局カンファレンスルームにて医師・秘書・研究助手が勢揃いし年度始めの会を行いました。

新年度より加わった新入局員7名を筆頭に、新しく大学にて勤務を始める先生方は皆、期待と不安を抱えた引き締まった顔付きをしていました。ぜひ全力で個々の力を出し切り活躍してほしいと願っています。

武富教授からは初心を忘れず、また一社会人として立ち振るまうことの大切さについてお話がありました。

消化器外科Ⅰメンバー全員で一丸となり、ますます活気のある教室を作り上げていけるよう研鑽を積んでまいります。



4/15 第4回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー

平成29年4月15日にジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社主催のもと、第4回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーがセンチュリーロイヤルホテルで開催されました。一般演題として、当科助教 横尾英樹先生座長のもと、JA北海道厚生連札幌厚生病院外科 柿坂達彦先生、市立函館病院外科 植木伸也先生から腹腔鏡下肝切除について、動画を交えながら実際の手術手技についてご講演頂きました。特別講演として、当科教授 武富紹信先生座長のもと、東邦大学医学部 外科 教授 金子弘真先生に「腹腔鏡下肝切除術の検証と今後」というタイトルで、腹腔鏡下肝切除のパイオニアからの視点でご講演いただきました。ご自身の豊富な手術経験をもち、国際的な視野からのお話を聞くことができ、今後の腹腔鏡下肝切除の方向性を示していただきました。最後に、このような講演会の機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。

**第4回
北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー**

2017.4.15 [Sat] 17:00-19:10
センチュリーロイヤルホテル 3F「エレガンス」
北海道札幌市中央区南5条西5丁目

協賛機関 (17:00-17:10) ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
一般演題 (17:10-18:10)

司会 横尾 英樹 先生 / 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科分野
講師 柿坂 達彦 先生 / JA北海道厚生連 外科
植木 伸也 先生 / 市立函館病院 外科

特別講演 (18:10-19:10)
『腹腔鏡下肝切除術の検証と今後』
座長 武富 紹信 先生 / 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科分野 教授
演者 金子 弘真 先生 / 東邦大学医学部 外科 教授

※下記について情報提供の機会を設けてまいります。
お問い合わせ先
Ethicon Japan, LLC 札幌支店
〒060-0801 札幌市中央区南一条西五丁目1番1号
The Ethicon Building 5th Floor, Suite 501
TEL: 011-261-2000 FAX: 011-261-2001

ETHICON
Johnson & Johnson



4/19 7-2病棟歓迎会を開催いたしました。

平成29年4月19日、大学病棟勤務で戻られた先生方、新規に当科で研究に携わる先生方、新しく入局された先生方、及び7-2病棟に勤務されることになった看護師さん方を対象に歓迎会が開催されました。

新年度のスタートにあたり、フレッシュなパワーにあふれた新しいメンバーを加え、私たちも心機一転頑張っていこうと決意を新たに致しました。仕事の際には厳しい面もありますが、歓迎会では年齢・職種問わず皆さん交流を図ることができ、大変有意義な時間であったと思います。

この1年間、引き続き7-2病棟一丸となって発展していければと感じました。



4/28 平成29年度消化器外科 I 同門親睦会が開催されました。

平成29年4月28日（金） 第117回日本外科学会定期学術集会の会期中に、横浜中華街 聘珍楼にて、平成29年度消化器外科 I 同門親睦会が開催されました。

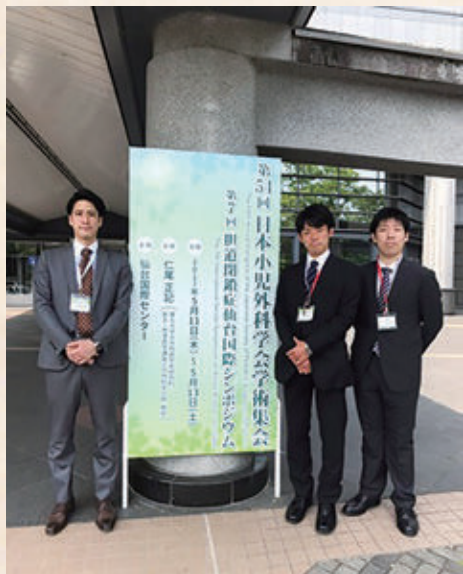
道内各地の関連病院や国内留学中の先生方が参集し、各々の近況報告に涙あり(?)笑いありの大変盛況な会となりました。来年の本学会においても同門から多くの演題が採択され、親睦会にて再会できることを楽しみにしております。



5/11

第54回日本小児外科学会学術集会が開催されました。

平成29年5月11日（木）第54回日本小児外科学会学術集会の会期中に、仙台にて懇親会を行いました。学生3名を含む総勢13名が参集し、日頃あまり一堂に会することのない小児外科に関わるメンバーによる非常にコアな楽しい会になりました。来年の本学会は新潟開催ですので、できるだけ多くの演題が採択され現地ににて再会できることを楽しみにしております。

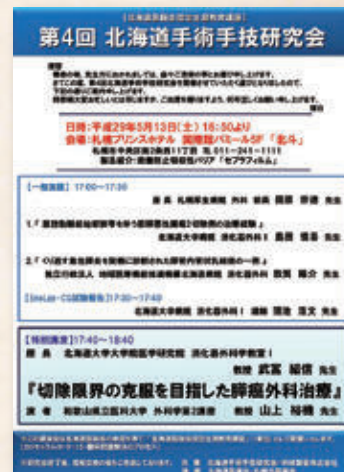


5/13 第4回北海道手術手技研究会が開催されました。

平成29年5月13日、第4回 北海道手術手技研究会が札幌プリンスホテル国際館バミールで開催されました。はじめに札幌厚生病院 田原 宗徳先生の座長のもと、一般演題として地域医療機能推進機構北海道病院 敦賀陽介先生から『くり返す急性膵炎を契機に診断された膵管内管状乳頭癌の一例』の症例報告をいただき、私が『腹腔動脈起始部狭窄を伴う胆膵悪性腫瘍2切除例の治療経験』で発表させていただきました。引き続き、当科 蒲池浩文先生からEnoLap-CG試験の進捗状況の報告がありました。

続いて特別公演として武富 紹信教授の座長のもと、和歌山県立医科大学 外科学第2講座教授 山上裕機先生をお招きし、『切除限界の克服を目指した膵癌外科治療』と題し御講演を頂きました。本邦における膵癌外科治療を牽引されておられる山上先生から、術前治療を組み合わせた集学的治療や術後合併症の低減について、RCTによるエビデンスベースで非常にわかりやすくお話していただきました。山上先生が実践されておられる毎日の臨床の積み重ね、外科の技術（Art）からエビデンスに基づく医学理論（Science）を構築し、また臨床に還元するという姿勢は非常に難しいことではありますが、我々も追及していかなければならないことであると強く感じました。

土曜日の夜にも関わらず40名を超える多くの参加者がおられ大変盛況な会となりました。その後の懇親会も非常に盛り上がりました。御講演頂いた先生方、御参加頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。



5/19 術後疼痛管理セミナーが開催されました。

平成29年5月19日にテルモ株式会社・北海道医師会共催、札幌市医師会後援のもと、術後疼痛管理セミナーが札幌グランドホテルで開催されました。一般演題として、当科助教 本間重紀先生座長のもと、当科特任助教 吉田雅医師から腹腔鏡下大腸切除術後の鎮痛法について講演させて頂きました。次に特別講演として、JA北海道厚生連網走厚生病院 副院長 西川眞先生座長のもと、神奈川県済生会横浜市東部病院 周術期支援センター長兼栄養部部長 谷口英喜先生から、「周術期支援センターの取り組み ～痛くない管理を目指して～」というタイトルで、周術期管理を専門とする周術期支援センターによる非常に先進的な取り組みについてご講演頂きました。最後に、市立函館病院 院長 木村純先生座長のもと、埼玉医科大学国際医療センター 下部消化管外科 教授 山口茂樹 先生から、「腹腔鏡手術時代の大腸癌根治切除と術後疼痛管理 ～アセトアミノフェンの活用について～」と題しまして、アセトアミノフェンの定期投与による効果的な除痛法についてご講演頂きました。開腹手術から腹腔鏡下手術へと移行していく中で、より効果的、効率的な鎮痛法を実臨床で実践していくにあたり、非常に勉強になりました。この様は貴重なご講演の機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。



5/20 第4回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。

平成29年5月20日に株式会社メディコン主催のもと、第4回北海道ヘルニア倶楽部が札幌グランドホテルで開催されました。特別講演として、当科教授 武富紹信先生座長のもと、公益財団法人 日産厚生会 玉川病院 外科 名誉院長 中嶋昭先生から、「TAPP法における合理的strategy」というタイトルで、TAPP法における安全、スピーディーに手術を進行させる為のエッセンスについて、豊富なお経験を交えながらご講演頂きました。次に、国立大学法人 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 消化管外科学分野 助教 星野明弘先生から、「TAPP法の基本手技 ー私の工夫ー」と題しまして、TAPP法をパート毎に区切りつつ、手術動画をお示し頂きながら具体的な手術のポイントについて、ご講演頂きました。最後に、ビデオディスカッションとして、砂川市立病院 消化器外科部長 横田良一先生、JA北海道厚生連 旭川厚生病院 外科部長 船越徹先生座長のもと、中嶋昭先生・星野明弘先生にコメンテーターとしてご意見を賜りつつ、苫小牧市立病院 外科 太田拓児先生、釧路労災病院 外科 江本慎先生からTAPP法の手術動画をご発表頂きました。座長、コメンテーターの先生方から非常に貴重な指導を受けることができ、発表した先生のみならず、ご参加頂いた全ての先生方にも有意義なディスカッションとなったのではないかと感じられました。この様は貴重なご講演の機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。



5/28 平成29年度医局対抗野球のご報告

2017年5月28日、雨の中でグラウンドの状態も良好ではありませんでしたが、伏古公園にて医局対抗野球大会が行われました。対戦相手は優勝候補の整形外科と強敵であり、2回以降は三者凡退で抑えるなど随所に良いプレーも出ましたが、相手ピッチャーから点を奪うことが出来ず、0-11と敗退となってしまいました。しかし、KKR札幌医療センターの今先生はじめ、関連病院の若手の先生のご協力もあり、人数も揃えることができ、怪我せずに終えることが出来ました。この場を借りて感謝申し上げます。バッテリーを組んでくれた札幌厚生病院の志智先生、旭川厚生病院の大淵先生お疲れ様でした。



6/3

平成29年度同門会総会・および新入会員歓迎会が開催されました。

平成29年6月3日（土）北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会、ならび新入会員歓迎会をニューオータニイン札幌にて開催いたしました。

総会では、様々な議題に対しての活発な意見の交換も見られました。

その後の歓迎会は112名が出席され、新たに9名の新入会員を迎えました。本年度は9名と多くの新入会員を迎え入れることができ、これもひとえに諸先生方のご協力、ご支援の賜物であると大変感謝しております。新入生の挨拶では皆、緊張した様子ではありましたが今後の意気込みについて熱く語っていました。また、各テーブルにおいては、先輩である諸先生方に激励の言葉をかけていただいていたいました。

他にも多くの先生方から壇上でご挨拶をいただき、近況をご報告いただきました。各テーブルで皆大いに話が弾んでおり、歓迎会は盛会のうちに終了いたしました。

ご出席いただきました諸先生方に感謝申し上げるとともに、今後とも、忘年会・新入会員歓迎会と楡刀会行事へのご参加をよろしくお願い申し上げます。



6/14

縫合結紮講習会が開催されました。

2017年6月14日（水）『消化器外科Ⅰ 縫合結紮講習会』が開催されました。医学部1～6年生約20名が参加して下さいました。外科基本手技である縫合、結紮について教室員の先生方から熱のこもった指導を受けられていました。最初はただどしだった手技も、講習会の終わりには上手になっており、学生の皆さんの習得の速さに驚かされました。講習会の後は、場所を盤渓に移し、ジンギスカンでの懇親会となりました。総勢50名弱の参加者で、非常に盛り上がり、盛会のうちに終了しました。参加して下さいました学生の皆さん、開催に御尽力して頂いた皆さんに感謝申し上げます。



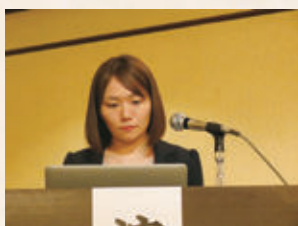
6/16 第5回 北海道小児外科フォーラムが開催されました。

一般演題では当科より研究テーマの一つでもあります肝芽腫に関する症例提示と今後の展望について発表させていただきました。また、日頃よりお世話になっている当院小児科 長祐子先生より「子どもと痛み～小児医療のさまざまな場面における疼痛緩和薬剤の役割～」と題してミニレクチャーも賜り、日常診療で頭を悩ませることも多い小児疼痛緩和に関して早速活かしたくなるような、長先生の豊富な臨床経験や最新の治療方法を拝聴することができました。

特別講演では東北大学大学院医学研究科 小児外科学分野 教授 仁尾正記先生をお招きして「胆道閉鎖症の治療の現況と今後の課題」と題してご講演をいただきました。東北大学での胆道閉鎖症に対する非常に高い治療成績とそこに至るまでの苦悩・工夫をお話いただき、大変勉強になりました。また、「一人一人の患者さんと歩む」という葛西先生から引き継がれる東北大学小児外科の姿勢には本当に感動を頂きました。

当院からは移植外科スタッフや小児科スタッフが、近隣病院からは小児科・小児外科スタッフなども参加され、大変活発な議論もなされ、盛況のもとに終えることができました。

遠く仙台より、ご多忙の中ご来札頂いた仁尾先生はじめ、ご参加いただいた皆様方に心より感謝申し上げます。



6/16 平成29年度第1回縫合結紮競技会が開催されました。

2017年6月16日、医局カンファレンスルームにて、本年度最初の第1回縫合結紮競技会が開催されました。今回は初期研修医1名・後期研修医6名が参加致しました。

常日頃の先生方のご指導により参加者全員がタイムオーバーすることなくクリアすることができました。優勝は滋賀県生まれ天使病院育ちの海老沼先生！1本目2本目ともに1分20秒台の好タイムでした。また競技終了後には川村秀樹先生によるデモンストレーションと今後の課題を指摘していただきました。次回大会からはスピードだけでなく技術点も評価対象になるとのことでより一層トレーニングに励もうと思います。また競技会の開催に際して協力いただいた武富教授はじめ教室員の先生方、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



6/24 Wet laboが開催されました。

2017年6月24日札幌センタービルにて、2017年度消化器外科 I wet laboが開催されました。全道各地から、36名の研修医・医学生が参加されました。消化器外科 I の関連病院より、24名の外科医が指導役として来場され、総勢60名の方々に参加して頂きました。Ⅰ：鏡視下縫合結紮手技、Ⅱ：豚腸管吻合手技、の二部構成のタスクをご用意致しました。鏡視下特有の2D画面での操作に苦戦しておられる方が続出でしたが、ラボの終了時には多くの先生方が縫合結紮の技術を習得されていました。また、豚の腸管吻合では、吻合後の腸管内に水を通して、縫合不全の無いことを指導者と共に喜んでおられた姿も印象的でした。その後の懇親会にも約40名が出席されて、こちらも盛会のまま終了しました。

今回御参加いただいた研修医や学生の方々、会場でご指導いただいた大学・関連病院の先生方、講習会に御配慮をいただいた関連病院の諸先生方に深く感謝申し上げます。

縫合トレーニングプログラム(応用)
 ~Training Course for Wound Closure Technique~
 日時：2017年6月24日(土)13時~16時
 会場：札幌センタービル5階会議室
 札幌市中央区北5条西6丁目2番2号
 (京王プラザホテル向かい)
ハンズ・オン・プログラム
★プログラム1. 内視鏡結紮・縫合
 I Training BOXを用いた結紮・縫合
 ドライボックスを用いて
 内視鏡下縫合結紮の練習を行います。
★プログラム2. 真皮縫合・消化管吻合
 I 豚皮を使用した真皮縫合
 II 豚腸管を使用した手縫い吻合
 豚の皮膚・腸管を用いて縫合・結紮・
 吻合などの基本手技を練習します。
 主催：消化器外科教室Ⅰ
 お問い合わせ先：吉田 雅 (ta73825@qd7.sr-nwt.na.jp)



6/28 宮岡陽一 医員が第59次南極越冬隊々員に選ばれました。

宮岡陽一医員が、この度第59次南極地域観測隊員（越冬隊）に選ばれました。今後東京での研修のあと南極に向かい、本年12月下旬に南極の昭和基地に到着し越冬観測を行います。2019年3月下旬に帰国予定です。

宮岡君の南極での活躍と安全を祈っております。皆さま、応援をよろしくお願いします。インターネットつながるようなので、折々の南極情報を楽しみに待ちたいと思います。



6/28

島田慎吾医員がLiver Transplant and/or Hepatobiliary Surgery Fellow Awardを受賞！

島田 慎吾 医員（平成16年入局）が2016年11月11日～15日にボストンで開催されたAmerican Association for the Study of Liver Disease (AASLD) 2016にてLiver Transplant and/or Hepatobiliary Surgery Fellow Awardを受賞しました。

今回の受賞者の中で唯一の日本人です。今後の益々の活躍を期待しています（賞状の到着が遅れて、ご報告が遅くなりました）。



7/3

6年生選択実習慰労会が開催されました。

平成29年7月3日、消化器外科Ⅰ実習を選択してくれた医学部6年生8名を囲み「選択実習慰労会」を開催致しました。

皆それぞれ昨年5年生時に実習に来られたときの緊張した面持ちとは異なり、他病院での実習も積まれ、たくましく感じました。

慰労会では、実習先でのお話、また将来への想いなど、楽しく熱い話を聞く事ができ大いに盛り上がりました。今度お会いするときには、仲間として、また熱く話し合いたいと思っております。お疲れ様でした。



7/14 2017年度医局説明会が開催されました。

2017年7月14日18時より、消化器外科Ⅰ医局において、2017年度医局説明会が行われました。

今年度は、道内各地より前期・後期研修医、大学生総勢25名の方々にご参加頂きました。説明会では、神山准教授から御挨拶の後、本間重紀医局長から消化器外科Ⅰの沿革、研修プログラム、診療・研究体制、診療実績、国内外で活躍中の先生方からのビデオレターも紹介されました。

その後は、狸小路へ場所を移し、懇親会が開催されました。出張先から武富教授もかけつけられ、研修医、学生の皆さん、大学スタッフ、関連病院スタッフの先生方など総勢72名という大所帯で大変盛り上がりしました。また、二次会も多くの先生方や学生さんが参加され、深夜まで親交を深めることが出来ました。

当日ご参加頂いた研修医・学生の皆様をはじめ、関連病院の諸先生方、大学の先生方、ご準備にご協力頂いた秘書の方々にも心から感謝申し上げます。



7/15 高橋典彦先生が平成28年度著述賞を受賞いたしました。

高橋典彦先生が、第92回日本医療機器学会大会にて平成28年度著述賞を受賞致しました。

今回の受賞が2017年7月15日発行の医理産業新聞で紹介されました。ぜひ一読下さい。



7/21 消化器外科 I 同門会懇親会が開催されました。

平成29年7月21日、消化器外科学会総会開催地の金沢にて同門会懇親会を開催いたしました。大学病棟を始め、関連病院からも多数のご参加をいただき総勢21名の先生にお集まりいただきました。金沢の美食を楽しみながらお互いの近況を報告しあい、終始笑いの絶えない楽しい会となりました。最後に会の開催にあたりお店の手配などいただきました岩見沢市立病院の谷先生にこの場をおかりして御礼申し上げます。



7/28 第5回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

平成29年7月28日、第5回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

基調講演ではJCHO札幌北辰病院 高橋昌宏先生座長のもと札幌厚生病院 高橋周作先生より「当科における胃癌術後化学療法の現状」と題して、胃癌術後補助化学療法の現状をレビューしていただくとともに、副作用を軽減し補助化学療法の完遂率を上げるための工夫など貴重なデータとともにご講演いただきました。特別講演では当科 武富紹信教授座長のもと、岐阜大学大学院腫瘍制御学講座腫瘍外科学分野の吉田和宏教授に「上部消化器癌の治療の潮流」と題して、胃癌の手術治療および化学療法の変遷についてご講演いただきました。胃癌の治療成績の向上を目指した妥協のない姿勢、多くの臨床試験に携わり着実に問題点を解決していく姿勢に深い感銘を受けました。

講演後の情報交換会でも多くの先生にご参加いただき盛況のもと会を終えることができました。お忙しい中、遠方よりご来札いただいた吉田和宏教授はじめ、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

第5回北海道消化器癌カンファレンス
2017. 7. 28 (Fri.) 18:50 - 20:30
 【場所】札幌グランドホテル3階「GINSEN」

製品説明 18:50-19:00
 「リンサーF」配合剤(T3・T3) 大瀬藥品工業株式会社 札幌支店 青藤 周平

基調講演 19:00-19:30
 【座長】 JCHO札幌北辰病院 院長 高橋 昌宏 先生
 「当科における胃癌術後化学療法の現状」
 札幌厚生病院 外科主任部長 高橋 周作 先生

特別講演 19:30-20:30
 【座長】 北海道大学大学院医学研究院 消化器外科学教室 | 教授 武富 紹信 先生
 「上部消化器癌の治療の潮流」
 岐阜大学大学院 腫瘍制御学講座 腫瘍外科学分野 教授 吉田 和弘 先生

主催 大瀬藥品工業株式会社 後援 北海道医師会 札幌市医師会
※会場7階、研修室20号を予定しております。



7/29
-30

第4回7-2病棟・医局旅行を開催いたしました。

7月29、30日に第4回7-2病棟・医局旅行がガトーキングダムサッポロにて開催されました。

今年も医局員、看護師、秘書、実験補助員など総勢37名の賑やかな会となりました。現地到着後は巨大プールで童心に帰って遊んだり、温泉で日頃の疲れを癒したりとリゾートを満喫しました。

宴会では、開催地が札幌市内ということもあり、日勤後のスタッフが途中参加して場を盛り上げてくれました。また恒例行事となった新人による余興もあり、そのクオリティの高さに舌を巻きました。元々職種間の垣根が低いフレンドリーな職場ではありますが、旅行を通じより一層親交が深まり有意義な会でした。

(文責：坂本沙織)

今年の北海道は記録的な猛暑が続いておりますが、スタッフ一同、暑サニ負ケズ日々の診療に取り組んでいこうと気持ちを新たにできました。スパで日ごろの疲れを癒すスタッフもいれば、プールではチーム対抗リレーなども行われ親睦を深めていました。夜は美味しい食事に場の雰囲気、泊りという心理的余裕も相まってお酒もとても進み楽しい宴となりました。新入局員・新人看護師らにより余興も行いましたが、多くのスタッフに笑っていただけたことが嬉しく、また、同期間の連帯も高まり、非常に良い思い出となりました。翌日のバスではすっきりした顔の人、眠そうな顔の人、なぜか朝食を楽しむ余裕のなかった人・・・様々な思い出を胸に帰路につきました。留守を守って下さったスタッフ、応援診療を控えさせていただいた関連病院、多くの方々に支えられて行えた旅行でした。貴重なお時間をありがとうございました。

(文責：鈴木 崇史)



8/3 本多昌平助教がエクセレントティーチャー特別賞を受賞！

本多昌平助教（小児外科担当）が医学生が選ぶ平成28年度エクセレントティーチャー表彰の特別賞を受賞しました。2年連続最優秀賞を受賞した教員だけに特別賞が贈呈されます。
本多先生の学生講義、とても評判高いようです。これからも益々学生教育に精進してください。



8/4 第6回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

特別講義として武富紹信教授による司会のもと、虎の門病院 黒柳洋弥先生に「腹腔鏡下S状結腸切除から直腸切除まで」との題しご講演いただきました。腹腔鏡大腸切除を安全確実にを行うためのポイントを解りやすく解説いただきこれから内視鏡手術技術認定医の取得を目指す自分を含めた参加者にとって非常に貴重な時間となりました。黒柳先生の「折れない心」という言葉を胸に手術手技の修練に励みたいと思います。特別講義の後、砂川市立病院 本間友樹先生、北海道社会事業協会帯広病院 大畑多嘉宣先生、札幌北楡病院 佐藤正法先生に腹腔鏡下大腸切除の手術VTRを提供いただき、手術手技の改善点や注意点について議論いたしました。黒柳先生からも貴重な意見を多数いただき非常に意義のある会になったと思います。
情報交換会においても多数の方にご参加いただき盛況のもと会を終了することができました。
お忙しい中、ご来れいただいた虎の門病院 黒柳洋弥先生をはじめ、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



8/6 新専門医制度北海道大学外科研修プログラム説明会が開催されました。

2017年8月6日、外科講座4科合同の研修プログラム説明会が開催されました。まず呼吸器外科 加賀先生より新専門医制度についての説明があり、続いて各科より各々の研修システムについて紹介しました。外科を志す研修医および医学生総勢16名が参加してくれました。一人でも多くの先生が外科への扉を開いてくれると嬉しいです。



8/7 医局BBQ大会を開催いたしました。

8月7日に医学部図書館横にて医局BBQ大会が開催されました。前週は台風5号の影響か雨天が多く、開催を危ぶむ声も聞かれましたが、当日はそんな不安を吹き飛ばすような快晴の中で開催できました。

今年もビール、牛肉、ウナギ、スイカ、メロンなどの極上の食材に舌鼓を打ち、日が暮れたのちも心ゆくまで語りました。

また今年は居酒屋勤務経験のあるスタッフによる本格派串焼きや、アウトドア好きスタッフによる段ボール燻製が登場するなど、仕事では見られないスタッフ達の意外な一面を知ることができ新鮮でした。来年も晴天の中で交流を深めたいと心から感じました。



8/19 アニマルラボが開催されました。

2017年8月19日にアニマルラボ（神奈川県川崎市）が開催されました。『腹腔鏡下縫合結紮』『腹腔鏡下幽門側胃切除』『腹腔鏡下高位前方切除』のタスクに挑戦し、初めての生体での結紮や解剖に戸惑いながらも各班すべてのタスクを達成し、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

個人的には左手の使い方や術野の展開など様々な課題を肌で感じるとともに、いつか自分もこの手術を執刀したいという意欲を高める良い機会をいただきました。

講師としてご参加いただいた川村秀樹先生・谷安弘先生・小丹枝裕二先生、開催に際しご協力いただいた関係者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

また初期研修中ながらご参加いただいた市村健太郎先生、石塚千紘先生、近い将来一緒に働ける日を楽しみにしています。

医学の発展のために犠牲となった検体へ感謝及び畏敬の念を抱きつつ、今回の経験を生かしていきたいと思います。



8/25 第3回敗血症性DICセミナーが開催されました。

2017年8月25日、プレミアホテル-TSUBAKI-札幌に於きまして、第3回敗血症性DICセミナーが開催されました。一般演題として、JA北海道厚生連札幌厚生病院副院長 石津寛之先生座長のもと、独立行政法人国立病院機構北海道医療センター外科 三野和宏先生より、「当院における消化器術後敗血症管理の現状」と題しまして、市中病院ならではのバラエティーに富んだ消化器疾患による腹膜炎症例に対する周術期管理に関する発表がありました。次に、レクチャーとして、熊本大学医学部附属病院消化器外科診療講師 橋本大輔先生より、「消化器外科術後DICの治療戦略」と題しまして、ご専門の膵臓癌に関する熊本大学での治療成績を踏まえた非常に分かりやすいご講演でした。最後に、特別講演として、当科 武富紹信教授座長のもと、慶應義塾大学医学部外科学教授 北川雄光先生より、「外科侵襲学と腫瘍学のクロストーク～炎症・凝固異常とがん転移をめぐる～」と題しまして、ご講演頂きました。これまでの慶應大学での臨床・基礎研究内容を中心にサイトカインや凝固因子などの各種メディエーターの機能や相互作用などについてご発表頂き、非常に勉強になりました。情報交換会においても多数の方にご参加いただき盛況のもと会を終了することができました。お忙しい中、ご来札いただいた北川雄光先生、橋本大輔先生をはじめ、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



9/1 宮城久之助教が国外留学に出発されました。

小児Gの宮城久之助教（平成15年卒）が、9月1日より英国にあるAlder Hey Children's Hospital, University of Liverpoolに留学されました。

Alder Hey Children's Hospitalは1914年に設立された由緒ある病院で、教授のPaul D Losty先生は新生児外科の分野では世界的権威です（Editor of Rickham's Neonatal Surgery）。その先生のもと約4か月間、臨床の研鑽をつまれてくる予定です。

宮城先生、頑張ってください！！



9/2

第2回Surgical Oncology Meetingが開催されました。

平成29年9月2日、ニューオータニイン札幌にて第2回Surgical Oncology Meetingが開催されました。北海道大学 消化器内科学教室 坂本直哉教授にご司会を賜り、当科の武富紹信教授に「EVIDENCEに基づくHCC集学的治療」と題して講演いただきました。

今まで有効な抗癌剤・分子標的薬の選択肢に乏しかった肝細胞癌治療ですが、新しい知見に伴う治療の現在と未来、またその中における手術治療・分子標的薬治療の位置づけについて非常にわかりやすく解説をしていただき、私を含めた参加者にとって非常に貴重な時間となりました。肝細胞癌治療に携わる一員として戦略的に治療の全体像を描く大切さを改めて実感することができました。

また、特別講演に先立ち、当科 神山俊哉准教授司会のもと、旭川赤十字病院 市村龍之介先生、市立函館病院 山本義也先生、当科の横尾英樹先生にそれぞれ分子標的薬の使用経験についてご発表いただきました。

70名超の先生方のご参加と貴重な意見を多数いただき非常に意義のある会になったと思います。情報交換会においても多数の方にご参加いただき大盛況のもと会を終了することができました。

お忙しい中、座長の労をお執りいただきました消化器内科学教室 坂本直哉教授を始め、ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



9/15

平成29年度9月修了 学位審査「公開発表会」が行われました。

平成29年度9月学位取得者が決定し、公開発表が行われました。

司会進行は当教室助教 横尾英樹先生がご担当され、大畑多嘉宣先生（平成20年入局・学位タイトル「肝細胞癌における Fatty acid binding protein 5 (FABP5) 発現による上皮間葉転換に関する研究 (Studies on epithelial-mesenchymal transition induced by expression of Fatty acid binding protein 5 (FABP5) for hepatocellular carcinoma)」が発表されました。

大畑先生、おめでとうございます。

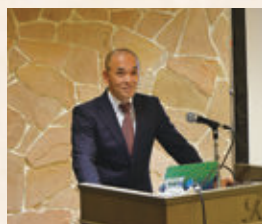
益々の研鑽を期待したいと思います。



9/23 第5回北海道サージカルアカデミーが開催されました。

平成29年9月23日、センチュリーロイヤルにおいて第5回サージカルアカデミーが開催されました。一般演題として、当科本間重紀先生座長のもと、市立函館病院消化器外科長の笠島浩行先生より「進行大腸癌に対する腹腔鏡手術の現況」と題して講演いただきました。腫瘍学的な予後と技術的な課題を考慮した上での閉塞症例や穿孔症例を含めた進行癌へ対する腹腔鏡下手術の適応拡大を貴重な手術動画やデータとともにご講演いただきました。特別講演では、当科武富紹信教授座長のもと四谷メディカルキューブの笠間和典先生に「肥満・糖尿病の外科治療」と題してご講演いただきました。縫合結紮の手術手技の凄さのみならず、症例毎にしっかりとしたデータを集められるアカデミックな姿勢に感銘を受けました。世界的にも同分野のトップランナーであられる笠間先生のご講演により、聴講者の多くが近い将来、糖尿病や肥満に対する外科治療が一般的になって行くと感じたのではないかと思います。

情報交換会においても多数の先生にご参加いただき盛況にて会を終了することが出来ました。ご多忙の中、ご来校いただきました笠間先生を始め、ご参加いただきました多数の先生に感謝申し上げます。



10/9 第11回北海道アドバンスセミナーが開催されました。

10月9日(祝)、川崎で第11回となる北海道アドバンスセミナーを開催しました。

講師は武富紹信教授、消化管グループの川村秀樹先生、札幌厚生病院の野口慶太先生、肝胆膵グループの長津が担当し、初期研修医と後期研修医、計6名を対象にしたブタを用いた腹腔鏡下体内結紮、腹腔鏡補助下幽門側胃切除術、腹腔鏡下低位前方切除術の講習を行いました。

特に初期研修の先生方の中は未経験者もあり、最初は戸惑いもあった様ですが、実際に手術を行う中で著しい成長を見せていました。

当科では腹腔鏡手術の教育に非常に力を入れており、腹腔鏡技術認定医の合格者を多数輩出しています。今回も密度の濃い研修で、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

病棟業務ならびに当直業務を担当してくださったスタッフの皆様に感謝申し上げます。



10/27 第5回North Japan Cancer Forumが開催されました。

2017年10月27日、京王プラザホテル札幌におきまして、第5回North Japan Cancer Forumが開催されました。当教室教授の武富紹信先生司会のもと、日本大学医学部消化器外科教授の高山忠利先生に「肝がん手術Up-to-date」と題し御講演頂きました。Lancetをはじめとしたトップジャーナルへ掲載されたrandomized controlled trialの話の他、世界で初めての肝尾状葉単全切除術であり、高山術式とも呼ばれる高位背方切除の解説、また、日々の手術に対する心構えに至るまで、Academic Surgeonとして世界で活躍されている高山先生のお話を聞くことが出来、私を含めた参加者にとっては非常に貴重な時間となりました。

また、特別講演に先立ちまして、市立函館病院消化器センター消化器外科医療部長の中西一彰先生司会のもと一般演題として札幌厚生病院外科 金沢亮先生に「当院での大腸癌肝転移に対するXelox+bevの使用経験」を、市立札幌病院外科部長 大島隆宏先生に「当院におけるStageⅣ大腸癌治療の現状」をそれぞれご発表頂きました。

情報交換会においても多数の先生方に御参加頂き、大盛況のもと会を終えることが出来ました。

大変お忙しい中、御来札頂きました高山忠利先生をはじめ、ご参加頂きました多数の先生に心より感謝申し上げます。



11/3 ブルーリボンキャラバン～ 2017 in 札幌～が開催されました。

ブルーリボンキャラバン～もっと知ってほしい大腸がんのこと2017 in 札幌～ 北海道大学病院 市民公開講座が、2017年11月5日日曜日、北海道大学学術交流会館で開催されました。



11/10 第6回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開催されました。

2017年11月10日、ニューオータニイン札幌におきまして、第6回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開催されました。

まず一般演題として、小樽市立病院外科 主任医療部長 越前谷勇人先生の司会のもと、当科の折茂達也が「肝切除後の胆汁漏による感染管理に難渋した一例」を発表しました。引き続き基調講演として、岩見沢市立総合病院外科 副院長・診療部長 上泉洋先生の司会のもと、慶應義塾大学医学部外科 准教授 尾原秀明先生より「術後感染症・創部感染症の予防戦略」と題し御講演頂きました。移植外科・血管外科での豊富な経験をもとに慶應義塾大学のSSIを減少させた実績を聞き大変感銘を受けました。特にMRSA保菌者に対する術前管理について具体的な方法とその効果を示され、今後の診療に直結する経験となりました。その後、特別講演として、当科教授 武富紹信先生司会のもと、兵庫医科大学 感染制御学 主任教授 竹末芳生先生より「敗血症に対するマネジメントとSSI予防のトピックス」と題し御講演頂きました。術前胆道ドレナージ症例での抗菌薬使用の重要性、大腸手術の術前処置としての機械的腸管洗浄に経口抗菌薬の追加の重要性、術前MRSA保菌者に対するbundle approach、DM以外の症例でも血糖管理が重要などの最新の知見を御講演いただき、私を含めた参加者にとっては非常に貴重な時間となりました。

大変お忙しい中、御来札頂きました竹末芳生先生、尾原秀明先生をはじめ、ご参加頂きました多数の先生に心より感謝申し上げます。



11/12 医局対抗サッカー大会が開催されます。

今年も医局対抗サッカー大会の時期となりました。本年度の日程は下記の通りです。

予選

日時：11月12日(日) 10時30分～13時15分

場所：農試公園(札幌市西区八軒5条西6丁目95-21)

決勝

日時：12月2日(土) 9時45分～16時35分

場所：農試公園

今年は新しいユニフォームで臨みたいと思います。
多くの方のご参加、応援をお待ちしております。



11/12 医局対抗サッカー大会予選結果

11月12日に行われました医局対抗サッカー大会予選結果をお知らせいたします。

vs 泌尿器科 4-2 ○ 得点者：中藪2、小林、財津

vs 整形外科 4-3 ○ 得点者：中藪3、財津

以上の結果で1位で予選リーグを突破しました。ご参加頂いた方々、応援に来て頂いた方々に御礼申し上げます。

12月2日(土)に決勝が行われます。多くの方のご参加、応援をお待ちしております。



11/15 島田慎吾医員が日本臓器保存生物医学会研究奨励賞を受賞しました。

課題「Ex vivo灌流によるAMPK活性化を介した脂肪肝グラフトに対するコンディショニング法の開発」に対して、平成28年度「日本臓器保存生物医学会 研究奨励賞」をいただきました。現在、研究継続中ではありますが、先日の第44回 日本臓器保存生物医学会にて受賞記念講演をさせていただきました。

関係者のみなさまに篤く御礼申し上げます。荣誉ある賞に恥じないように臨床・研究に邁進して参りたいと思います。



11/18 関連病院院長・医長連絡会議を開催いたしました。

平成29年11月18日13時より関連病院院長・医長会議を開催いたしました。北海道各地から消化器外科|関連の病院長、医長の先生方総勢33名にご参集いただきました。まず、教室の近況とアクティビティについてそれぞれの臨床グループ、研究部門より報告致しました。続いて、関連病院の現状につき各施設よりご報告いただきました。教室で取り組んでいる多施設共同研究の経過報告、ご協力のお願いの後、武富教授より総括いただきました。これからも教室と関連病院が一致団結して北海道の外科の発展に寄与していく所存です。どうぞよろしくお願い致します。



11/21 モーニングセミナーが開催されました。

平成29年11月21日に第17回モーニングセミナーを開催しました。今回は北海道大学 遺伝子制御研究所病態研究部門感染病態分野の准教授 澤新一郎先生をお招きし「3型自然リンパ球の発見から最新の知見まで」というテーマで、リンパ節形成のメカニズムや、ヒト腸管に存在する3型自然リンパ球の役割について最新の知見をご講演頂きました。

リンパ節形成には、LT α 細胞とLT β 細胞の相互作用が重要であり、そこにはRANKLとRANK受容体やLT α 1 β 2とLT β Rを介した経路が必須であると学びました。「誰も人体の同じ位置にリンパ節が形成される」…外科医にとって日常的な事実ではありますが、改めてそのメカニズムを知り、まさに温故知新でありました。

またヒト腸管免疫においても、腸管細菌叢が未発達な新生児において自然免疫系が重要な役割を果たしており、ILC3が産生したIL22が腸管バリアを形成していることなどを学びました。

ご講演終了後は活発な質疑応答が行われ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



1/27 宮岡陽一医師「南極便り」

南極便り「南極昭和基地到着」

北海道大学消化器外科IIに所属しております宮岡陽一です。

第59次南極観測隊越冬医療隊員として、10月28日に成田を出国し、南アフリカケープタウン経由にて11月03日南極入りいたしました。

南極は南半球なので、現在夏の時期になります。

日本の昭和基地もある沿岸地域は、天気が良ければ最高気温が-1～-5℃ぐらいになり、札幌の冬よりあたたかくなる事もしばしばです。

写真は昭和基地の写真で、写真の為に厚着をしましたが、もっと薄着でも問題ありません。

私はこの昭和基地に数日滞在し、この後約3か月間に及ぶ内陸調査へ同行、隊員の健康管理を行います。しばらくネット環境とは隔絶した世界に赴く形になりますが、基地に戻り次第、南極の様子をお伝えできればと思います。

それでは皆さま、少し早いですが良いお年を。



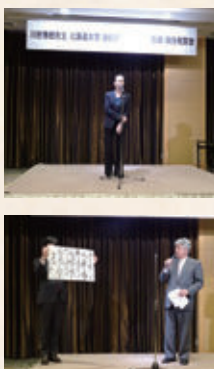
11/27 当科武富教授がBest Reviewer Awardを受賞

当科武富紹信教授が日本外科学会英文誌Surger Todayの2017 Best Reviewer Awardを受賞しました。



11/29 川村秀樹先生 消化器外科 I 特任教授就任祝賀会が開催されました。

2017年11月29日、JRタワーホテル日航札幌におきまして、川村秀樹先生 特任教授 就任祝賀会が開催されました。関連施設からも多数ご参加いただき、総勢50名の出席のもと大変盛況な会となりました。川村先生には着任後も益々のご指導ご鞭撻を頂きます様宜しくお願い申し上げます。



12/2 医局対抗サッカー大会決勝結果

12月2日(土)に行われました医局対抗サッカー大会決勝の結果をご報告いたします。

決勝リーグ第一試合 vs リハビリ科 13-3 ○

得点者：財津5、中薮4、谷2、今、相山

決勝リーグ第二試合 vs 第二内科 6-2 ○

得点者：脇坂3、中薮、丸山、財津

決勝 vs 整形外科 4-8 ×

得点者：今、中薮、谷、丸山



以上の結果で準優勝となりました。決勝は0-3から3-3まで追いついたものの、その後引き離され敗れてしまいました。ここ数年2位の結果が続いており悔しいですが、来年こそは優勝を目指して、特に若い人を入れることに力を入れていきたいと思います。

お忙しい中ご参加して頂いた方々、応援して下さいました方々に感謝いたします。

12/2 平成29年度同門会忘年会が開催されました。

12月2日(土)、ホテルニューオータニイン札幌において同門会幹事会、講演会、忘年会が開催されました。講演会では本年度ニュージーランド・オタゴ大学の留学より戻られた本多昌平先生より「ニュージーランド、オタゴ大学における肝芽腫共同研究を経験して」という演題名で、ニュージーランドでの生活含め、留学先で行ってきた研究について発表していただきました。

続く忘年会では、ご多忙の中、多くの先生方が参加され、大変盛大な会となりました。

武富教授をはじめたくさんの先生方から、我々後期研修医含め若手外科医が希望をもって外科の道を邁進できるよう支援してくださるといった力強いお言葉をいただき、より一層精進していかなければと身が引き締まる思いを感じました。今年も多くの同門の先生方に支援していただいたことを感謝しつつ、来年も充実した一年になるよう努力してまいりたいと思います。



12/13 7-2病棟忘年会を開催いたしました。

12月13日に、消化器外科Ⅰ、乳腺外科、7-2病棟のスタッフで忘年会をホテルモントレーで開催致しました。武富教授、大井師長より一言を頂き、川村教授から乾杯のご発声を頂きました。1次会では素敵な会場に相応しい宴となり大いに盛り上がりました。

2次会では研修医、新人看護師、今年7-2病棟に配属された看護師による余興を披露して頂きました。未来を感じさせる余興の数々で今後も病棟は安泰であることが伝わり、年末の忙しい中時間を削って練習した様子が見て取れました。お疲れ様でした。

今年も無事終えることができ、我々第一外科は来年に向けさらに邁進していきますのでよろしくお願いいたします。



12/28 仕事納めの会を行いました。

2017年12月28日に消化器外科学教室Ⅰの医局で恒例の仕事納めの会を行いました。教授を始め医局員の先生、院生、医局秘書さん、研究技官の方など多くの方に御参加いただきました。はじめに、武富教授よりご挨拶をいただき、故・松下幸之助氏が寝る前の1時間はその日の反省をするというお話をされました。成功するための7つの習慣の一つ“一日一日を大切にする”の一環で、いつも行っていたそうです。私はすぐに眠ってしまうので、まさに身の引き締まる思いでした。貴重なお話を頂きありがとうございました。その後は、和気藹々とそれぞれのテーブルにて寿司やピザ、焼き鳥などを囲みながらご歓談され、盛況な会となりました。本年は、昨年好評をいただきましたタコ焼きに加え、クレープの実演を行いました。こちらの方も好評をいただき、来年以降も創意工夫してまいります。2018年も皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



2017年の年表・年間行事

〈学会・研究会主催〉

1/7

平成28年度 第24回日本外科学会生涯教育セミナー (北海道地区) が開催されました。

平成29年1月7日、北海道大学医学部学友会館フラテにて、第24回日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開催されました。今回は「胃癌」のテーマで、6名の講師の先生方に御講演頂きました。

セッションⅠでは胃癌とピロリ菌との関連性や診療ガイドラインに関して、セッションⅡでは化学療法や内視鏡治療に関して、セッションⅢでは手術治療や周術期管理に関してのご講演でありました。講演は外科領域に留まらず内科領域にも及ぶ幅広いものでありました。特に胃癌の成因や内視鏡治療などに関するお話は大変興味深いものでありました。また

今後のロボット手術に関する展望を直に聞くことができ、大変貴重な機会となりました。本セミナーの参加者は約160名にもものぼり、大変盛況な会となりました。

円滑な運営を行って頂いた事務局の方々、司会と講師として御協力頂きました諸先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

来年度のセミナーも何卒よろしくお願い致します。

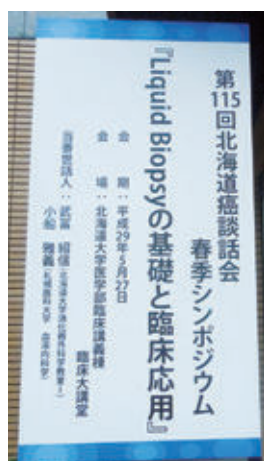


5/27 第115回北海道癌談話会春季シンポジウムが開催されました。

平成29年5月27日、北海道大学医学部臨床大講堂にて第115回北海道癌談話会春季シンポジウムが開催されました。当科の武富教授と札幌医大血液内科の小船正義教授が代表世話人として、「Liquid Biopsyの基礎と臨床応用」のテーマで活発な意見交換が行われました。

一般公演の一つとして当科教室員の石黒友唯先生（北榆病院）が胃癌患者の循環腫瘍細胞に関する基礎研究の成果を発表されました。また、特別講演として、Liquid Biopsy研究の第一人者としてご高名な近畿大学の西尾和人先生と国立がん研究センター研究所の落谷孝弘先生にご講演いただきました。西尾先生からは「Cell free DNAを用いた遺伝子解析」と題し、既に臨床応用されて多くの患者さんに恩恵をもたらしている現状と今後の展開についてお話しいただきました。落谷先生からは「エクソソームによるがんの新規診断と治療」と題し、エクソソームの多彩な生理活性・病態への関与の解明と壮大な展望についてお話しいただきました。近年大きな注目を集めている分野でもあり、またお二方の大変魅力的な語り口も相まって大変興味深く拝聴致しました。

あいにくの雨天でしたが、たくさんの方にご参加いただき、大変盛況に終えることができました。ご講演いただいた先生方、ご参加いただいた方々には心より御礼申し上げます。



7/29 第21回北海道器材・感染対策研究会学術集会

7月29日(土)、北海道自治労会館にて、第21回北海道器材・感染対策研究会学術集会在開催されました。手術室・感染制御部や材料部に関係する外科系医師・看護師さんや検査部の方々など幅広い分野の方々約60名にご参加いただきました。

一般講演は北海道大学病院感染制御部の小山田師長さん座長のもと、道内の各施設の感染管理認定看護師さんなどから3題の一般演題のご発表があり、それらに対して活発な質疑応答が交わされました。

また、特別講演として、大阪大学医学部附属病院手術部部長・病院教授の南正人先生をお招きして、『周術期感染症を少しでも減らすために ～いま手術部や材料部でできること～』と題して、周術期の感染管理などについて詳しく、そしてわかりやすく解説していただきました。我々医療者としては、まさに“感染に備える意識改革”の必要性を痛感しました。

ご発表いただきました先生方・看護師さん方、本会にご参加いただきました多くの方々に深く感謝申し上げます。

当番世話人：高橋典彦（北海道大学病院 手術部 准教授）

第2回 北海道器材・感染対策研究会 学術講演会			
日 時	2017年7月29日(土) 13:30 ~ 16:30 北海道自治労働会館 4Fホール 北区北が丘7丁目5番地 電話:011-747-1457		
参加費	1,000円(当日申し受けます)		北海道医師会認定 生涯学習センター、5階分
開 場	12:30~		第2会議室(注1)5号机
プログラム			
開会挨拶	当会世話人	北海道大学病院 手術部 高橋 典幸	
一般講演 13:35~15:05	司会・北海道大学病院 感染制御部 小山田 寿子		
演題① 13:35~14:05			
「医療従事者における新型コロナウイルス検査後のHIV抗体持続期間に関する検討」	北海道大学病院 検査・輸血部 細越吉宏		
演題② 14:05~14:35			
「当院における肝臓・胆膵事例のデータ分析と課題」			岩崎 健夫 先生
「札幌医科大学附属病院 感染制御部、感染管理認定看護師」			中江 舞美 先生
14:35~15:05			
「病院大規模改修工事における院内感染対策」			長倉 竜也 先生
「社会福祉法人 文徳会 札幌北監病院 感染管理認定看護師」			
～休憩(全量展示)～			
特別講演 15:30~16:30	司会・北海道大学病院 手術部 高橋 典幸		
「周術期感染症を少しでも減らすために ～いま手術部や材料部でできること～」			
大阪大学医学部附属病院 手術部 部長・病院教授 南 正人 先生			
*なお、当学術講演会は北海道医師会認定生涯学習センター(以下略)にて開催いたします。 ※会場：北海道自治労働会館4Fホール(〒058-8501 札幌市北區北が丘七丁目五番地) 電話：011-747-1457 ※交通：JR東線千歳線北が丘駅より徒歩約10分。地下鉄南北線北が丘駅より徒歩約10分。 ※駐車場：本会館敷内には駐車スペースが限られており、満車の際は近隣の公共駐車場をご利用ください。 ※お問い合わせ先：北海道医師会 感染対策委員会事務局(〒058-8501 札幌市北區北が丘七丁目五番地) 電話：011-747-1457			



関連病院紹介

関連病院紹介

学会資格

平成30年 1月現在

卒業年	氏 名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本乳癌学会			日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本内視鏡外科学会	日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	技術認定医	認定医
S43	圓谷 敏彦		●	●																			
S46	米川 元樹		●	●	●		●	●	●														
S50	井齋 偉矢		●																				
S49	目黒 順一		●	●	●		●																
S49	久木田和丘		●	●																			
S52	櫛田 隆久		●		●								●										
S53	熊谷 文昭		●		●																		
S54	高橋 昌宏		●	●			●																
S55	伊藤 浩二		●																				
S55	木村 純																						
S55	松江 弘一	●																					
S56	川向 裕司		●																				
S56	田口 宏一		●	●																			
S56	松岡 伸一	●	●	●		●	●	●	●														
S57	伊藤 美夫		●																				
S57	長洲 英介	●																					
S58	有里 仁志		●																				
S58	小笠原和宏	●	●	●		●	●	●	●		●												●
S58	小池 雅彦				●																		
S58	西川 眞		●	●	●					●													
S58	堀江 卓																						
S59	阿部 厚憲		●																				
S59	石津 寛之		●	●		●	●						●										
S59	大森 一吉			●			●	●															
S59	上泉 洋		●	●	●					●													
S59	倉内 宣明		●			●	●		●								●					●	
S59	田中 康夫		●																				
S59	田村 元		●	●							●	●											●
S59	浜田 朋倫	●	●	●	●	●	●																●
S59	浜田 弘巳	●	●	●			●	●		●										●	●		●
S59	三澤 一仁		●	●		●	●	●	●														●
S60	数井 啓蔵	●	●	●																			
S60	神山 俊哉		●	●		●	●	●	●				●					●					●
S60	高橋 宏明	●	●	●		●		●	●														
S61	内藤 昌明		●																				
S61	中野 詩朗		●		●					●													
S61	益子 博幸		●			●	●																●
S61	山本 浩史		●		●																		
S62	赤羽 弘充		●		●					●													
S62	大川 由美		●	●							●	●											●
S62	川上 雅人																						
S62	嶋村 剛		●	●	●								●										
S62	高橋 学		●								●												
S62	福島 剛		●	●		●	●			●													●
S63	小川 秀彰																						
S63	高田 譲二		●	●		●	●	●	●													●	
S63	増子 佳弘																						
S63	鈴木 知巳	●	●	●									●										
H1	安念 和哉																						
H1	飯田 潤一	●	●		●	●	●																
H1	池田由加利																						

卒業年	氏 名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本乳癌学会			日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本内視鏡外科学会	日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	技術認定医	認定医
H1	大島 隆宏		●		●																		
H1	高橋 典彦		●		●																		
H1	武田 圭佐		●			●		●															
H1	高橋 将人		●	●							●	●											●
H1	中川 隆公		●	●		●	●											●					
H1	中山 雅人		●		●																		
H1	秦 庸壮		●		●						●			●	●								
H1	広瀬 邦弘	●	●	●		●	●																
H1	柳田 尚之		●		●																	●	
H1	山賀 昭二																						
H1	渡辺 健一		●							●	●												●
H2	小林 清二		●	●	●	●																●	
H2	篠原 敏樹	●	●	●	●	●	●	●								●	●						
H2	武富 紹信	●	●	●	●	●	●	●					●					●					●
H2	中西 一彰		●	●		●	●	●										●					●
H2	羽田 力		●	●																			
H2	越前谷勇人		●	●	●																		
H3	蒲池 浩文		●			●												●					
H3	川村 秀樹		●	●		●	●	●														●	●
H3	今 裕史		●	●		●		●														●	
H3	津田 一郎		●																				
H3	富岡 伸元	●	●			●					●												●
H3	中村 貴久	●	●		●																		
H4	松久 忠史		●	●		●	●																●
H4	横尾 英樹		●	●		●		●	●					●				●					●
H5	植村 一仁	●	●			●	●															●	
H5	高橋 周作		●	●		●	●															●	●
H5	野村 克		●																				
H5	服部 優宏	●	●	●		●		●					●										
H5	前田 好章	●	●	●	●	●	●					●										●	●
H5	渡辺 義人		●		●																		
H5	横山 良司		●																				
H6	河合 朋昭		●	●		●				●													
H6	崎浜 秀康		●																				
H6	砂原 正男	●	●	●		●	●	●					●									●	●
H6	橋本 卓																						
H6	深井 原		●																				
H6	横田 良一		●	●		●	●	●														●	
H7	林 俊治		●	●																			
H7	細田 充主		●	●							●	●											
H8	安達 大史		●																				●
H8	正村 裕紀	●	●	●		●	●	●							●							●	
H8	田原 宗徳		●			●	●											●					
H9	今井 敦		●	●		●																	
H9	許 理威		●																				
H9	花本 尊之	●	●	●		●																	
H9	本間 重紀	●	●	●		●	●	●	●						●	●						●	●
H9	森田 恒彦		●																				
H10	植木 伸也		●			●																	
H10	片山 知也	●	●	●		●	●	●															●
H10	菊地 弘展		●																				

卒業年	氏 名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本乳癌学会			日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆脾外科学会		日本小児外科学会		日本内視鏡外科学会	日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	技術認定医	認定医
H10	喜納 政哉																						
H10	工藤 岳秋		●			●																	●
H10	下国 達志		●	●		●	●	●								●				●	●		●
H10	本多 昌平		●	●																●	●		●
H11	折茂 達也		●	●		●	●						●						●				●
H11	柿坂 達彦		●			●		●					●						●				●
H11	谷 安弘		●																			●	
H11	敦賀 陽介	●	●			●																	●
H11	皆川のぞみ	●	●			●	●	●														●	
H11	山本 貢		●								●												●
H12	葛西 弘規		●																				
H12	後藤 了一		●																				
H12	高橋 徹		●			●																	
H12	三野 和宏	●	●	●		●		●															
H13	大浦 哲		●																				
H13	佐々木彩美		●																				
H13	寺崎 康展		●																				
H13	渡辺 正明																						
H14	蔵谷 大輔		●			●																	●
H14	腰塚 靖之		●																				
H14	佐藤 正法		●			●																	
H14	上徳ひろみ		●								●												●
H14	柴崎 晋		●			●	●	●														●	●
H14	船越 徹		●			●																●	●
H14	若山 颯治		●	●		●		●					●										●
H15	市川 伸樹		●			●																●	●
H15	川村 典生		●			●																	
H15	木村 鐘康		●																				
H15	財津 雅昭		●																				
H15	常俊 雄介		●																				
H15	馬場 基		●								●												
H15	藤好 真人		●																				
H15	宮城 久之		●																	●			
H15	吉田 雅		●			●		●														●	
H16	島田 慎吾		●			●	●	●					●										
H17	旭 火華		●																				●
H17	大場 豪		●			●														●			
H17	川俣 太		●			●																	●
H17	長津 明久		●			●																●	
H17	山田 健司		●																				
H18	大畑多嘉宣		●			●		●															●
H18	江本 慎		●			●																	
H18	大野 陽介		●			●																	
H18	小丹枝裕二		●			●																●	
H18	小柳 要		●																				
H18	小野 仁		●																				
H18	湊 雅嗣		●																				
H19	相山 健		●																				●
H19	荒 桃子		●																				
H19	石川 隆壽		●			●																	
H19	正司 裕隆		●																				
H19	高橋 秀徳																						
H19	水上 達三		●																				
H19	本間 友樹		●																				

卒業年	氏 名	日本外科学会			日本消化器外科学会			日本消化器病学会		日本乳癌学会			日本肝臓学会			日本大腸肛門病学会		日本肝胆膵外科学会		日本小児外科学会		日本内視鏡外科学会	日本癌治療認定医機構
		認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	認定医	専門医	指導医	専門医	指導医	高度技能指導医	高度技能専門医	専門医	指導医	技術認定医	認定医
H19	深作 慶友		●																				
H20	辻 健志																						
H20	石黒 友唯		●																				
H20	梅本 浩平																						
H20	豊島雄一郎		●																				
H20	松澤 文彦		●					●		●													
H21	岡田 尚樹		●																				
H21	巖築 慶一		●																				
H22	蔵谷 勇樹		●																				
H21	鈴木 崇史		●																				
H21	藤好 直		●																				
H22	今泉 健		●																				
H22	木井 修平																						
H22	坂本 譲		●																				
H22	沢田 堯史		●																				
H22	柴田 賢吾		●																				
H22	渋谷 一陽		●																				
H22	杉山 昂		●																				
H22	藤居 勇貴		●																				
H22	宮岡 陽一																						
H22	脇坂 和貴		●			●																	
H23	大平 将史		●																				
H23	奥村 一慶																						
H23	加藤 紘一																						
H23	金沢 亮		●																				
H23	谷 道夫																						
H23	松井 博紀		●																				
H24	石川 倫啓																						
H24	太田 拓児																						
H24	柏倉さゆり																						
H24	加藤 拓也																						
H24	近藤 享史																						
H24	坂本 沙織																						
H24	坂本 聡大																						
H24	志智 俊介		●																				
H24	村田 竜平																						
H24	吉田 祐一																						
H25	大淵 桂祐																						
H25	河北 一誠																						
H25	小林 展大																						
H25	佐野 修平																						
H25	田仲 大樹																						
H25	矢部 沙織																						
H26	海老沼翔太																						
H26	阪田 敏聖																						
H26	田中 友香																						
H26	中本 裕紀																						
H27	小林 正幸																						
H27	斎藤 智哉																						
H27	佐藤 彩																						
H27	白川智沙斗																						
H27	羽田 光輝																						

2016年関連病院手術数

▼施設名▼		全身 麻酔	脊椎 麻酔	局所 麻酔	食道癌	鏡視下	胃癌	鏡視下	結腸癌	鏡視下	直腸癌	鏡視下	原発性 肝 癌	鏡視下	転移性 肝 癌	鏡視下	脾癌	鏡視下
がん セン ター 道	呼吸器外科	238	0	32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	消化器外科	258	0	39	4	0	40	25	54	44	37	31	3	0	12	0	11	0
	乳 腺 外 科	384	0	75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
市 立 札 幌		689	8	205	1	0	34	8	96	62	27	15	10	1	12	0	9	0
岩 見 沢 市 立		427	24	396	0	0	29	12	55	33	27	22	3	0	3	0	1	0
市 立 苫 小 牧		390	10	36	1	0	21	3	40	26	17	13	10	0	3	0	7	0
釧 路 労 災		563	2	43	4	0	36	28	74	55	32	22	5	1	8	1	11	0
札 幌 厚 生		1003	1	34	0	0	119	69	115	83	47	37	63	17	12	4	15	0
旭 川 厚 生		726	0	2	4	2	79	17	90	38	47	36	5	0	11	0	18	0
帯 広 協 会		488	15	5	0	0	31	8	61	24	23	17	3	0	5	0	4	0
K K R 札 幌		715	1	146	1	0	37	20	67	57	24	20	2	0	6	1	8	0
JCHO札幌北辰病院 (旧 社 保 総 合)		270	2	1	0	0	15	7	49	27	10	8	4	1	8	2	3	0
日 鋼 記 念		421	13	27	0	0	26	11	31	15	14	2	6	0	1	0	5	0
函 館 市 立		662	10	32	0	0	61	0	95	95	36	34	17	2	4	2	17	0
北海道医療センター (旧 国 立 西 札 幌)		492	3	66	0	0	31	20	56	42	25	21	5	0	5	0	2	0
市 立 稚 内		129	6	75	0	0	9	3	0	9	6	4	0	0	0	0	0	0
市 立 士 別		18	0	82	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
砂 川 市 立		425	6	71	1	0	33	22	54	37	22	19	4	3	3	1	6	0
小 樽 市 立		453	13	107	0	0	31	21	51	28	25	19	4	0	2	0	12	0
千 歳 市 民		224	6	2	0	0	20	11	37	16	10	3	0	0	0	0	0	0
網 走 厚 生		326	7	39	0	0	24	13	33	26	15	14	2	0	2	0	2	0
JCHO北海道病院 (北 海 道 社 保)		436	0	16	0	0	28	4	60	31	11	9	5	0	11	1	7	0
天 使		611	0	3	0	0	17	1	28	18	13	12	8	0	1	0	6	0
溪 和 会 江 別		301	32	222	0	0	25	3	26	7	24	2	4	0	1	0	9	0
北 檜		439	114	1009	0	0	23	9	56	40	20	19	4	2	10	7	0	0
恵 み 野		359	2	16	0	0	21	5	43	24	20	15	4	0	1	0	3	0
苫 小 牧 日 翔		173	0	132	0	0	3	1	20	10	14	7	0	0	1	1	1	0
市 立 美 唄		2	8	37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
市 立 三 笠		22	17	40	0	0	0	0	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0
中 標 津 町 立		134	6	9	0	0	4	2	8	5	8	4	0	0	0	0	0	0
森 町 国 保		0	0	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静 和 記 念		127	0	23	0	0	8	1	10	4	7	1	0	0	1	0	0	0
対 ガ ン 協 会		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
洞 爺 協 会		47	3	100	0	0	2	2	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0
網 走 中 央		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北 クリニック		0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北 札 幌 病 院		0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
すずかけセントラル		122	0	66	0	0	4	4	5	5	1	1	0	0	2	0	1	0
は ま な す 医 院		56	0	34	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静 仁 会 静 内 病 院		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新 札 幌 聖 陵 ホ ス ピ タ ル		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J C H O 登 別		0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計		11892	309	3436	16	2	813	330	1330	864	565	407	171	27	126	20	158	0

胆道癌	鏡視下	乳癌	鏡視下	甲状腺癌	鏡視下	肺癌	鏡視下	胆石症	鏡視下	虫垂切除	鏡視下	小腸切除	鏡視下	鼠径ヘルニア根治術	鏡視下	その他	鏡視下
—	—	—	—	—	—	179	144	—	—	—	—	—	—	—	—	42	41
7	0	0	0	0	0	0	0	7	7	2	2	32	4	27	0	49	11
0	0	325	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	82	0	0	0	0	0	79	65	44	33	12	0	62	32	多数	0
10	0	28	0	0	0	8	7	65	57	45	8	17	2	77	39	479	0
7	0	37	0	0	0	16	10	61	52	33	30	22	2	50	24	36	0
4	0	79	0	0	0	2	2	93	70	32	29	14	3	85	44	129	33
19	1	53	0	73	0	26	20	115	95	39	12	23	2	59	23		
10	0	75	0	0	0	46	28	82	65	46	30	10	0	108	38	141	56
3	0	62	0	1	0	1	0	77	72	62	36	8	2	120	42	49	6
2	0	106	0	0	0	56	48	96	85	55	54	11	3	64	50	328	76
4	0	22	0	6	0	0	0	42	33	24	21	8	0	78	19	0	0
5	0	41	0	0	0	9	6	46	39	18	17	1	0	43	15	215	43
13	0	67	0	2	0	0	0	111	99	51	49	30	9	76	46	0	0
2	0	20	0	1	0	27	21	86	80	37	37	28	3	60	43	176	26
0	0	5	0	0	0	0	0	22	14	15	14	5	0	26	17	101	2
0	0	1	0	0	0	0	0	4	4	2	2	4	1	4	0	82	0
1	0	54	0	1	0	(33)	(33)	66	60	33	32	22	6	78	34	124	23
4	0	33	0	5	0	12	8	58	56	28	14	12	9	72	37	220	0
1	0	19	0	0	0	0	0	37	28	28	27	10	1	35	21	35	1
6	0	30	0	0	0	0	0	59	54	36	33	12	5	54	23	51	36
6	0	8	0	4	0	42	36	75	70	28	10	10	0	56	0	85	42
0	0	19	0	0	0	12	12	31	31	33	33	9	1	219	211	223	15
2	0	10	0	2	0	9	5	73	50	28	7	1	0	35	0	276	6
2	0	1	0	0	0	2	2	64	58	20	20	6	4	44	37	1009	0
1	0	9	0	2	0	1	1	75	74	26	22	12	2	69	44	75	20
2	0	17	0	0	0	0	0	19	16	14	8	0	0	48	30	165	5
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	5	0	1	0
0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	2	0	0	0	4	0	60	0
0	0	10	0	0	0	0	0	20	18	23	18	9	1	37	12	30	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	200	0
0	0	0	0	0	0	0	0	33	10	44	20	1	0	6	0	76	15
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	0	0	7	7	4	3	2	0	3	3	23	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	30	0	6	0	3	3	21	21	7	7	1	1	37	23	70	3
0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	9	0	1	0	10	0	59	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	213	45
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0
121	1	1245	0	103	0	273	210	1634	1400	870	628	333	61	1751	907	4806	464

■ 関連病院総手術件数（2008年～2016年）

施設名	2008年			2009年			2010年			2011年			2012年			2013年			2014年			2015年			2016年		
	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔
がんセンター1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	261	0	16	245	0	21	330	0	40	243	0	26	238	0	32
北海道がんセンター	443	7	59	501	4	57	526	3	47	206	3	37	286	0	31	282	1	47	232	0	22	247	0	22	258	0	39
乳がんセンター	—	—	—	259	0	119	280	0	180	300	0	120	300	0	150	312	0	141	270	0	50	349	0	106	384	0	75
市立札幌病院	568	46	138	544	36	156	604	34	161	625	33	217	617	48	223	609	38	280	641	24	287	732	5	272	689	8	205
岩見沢市立病院	303	60	62	332	77	37	383	73	43	311	71	34	328	75	35	313	28	19	403	34	18	437	33	349	427	24	396
苫小牧市立総合病院	463	63	40	426	62	36	395	50	28	424	42	16	355	18	22	371	14	16	376	9	5	454	12	9	390	10	36
釧路労災病院	575	6	99	645	4	87	639	4	93	590	3	73	629	1	43	663	3	42	583	1	56	537	1	42	563	2	43
札幌厚生病院	917	2	11	944	—	23	934	2	32	964	1	27	953	1	38	1034	0	32	1058	0	29	1017	0	17	1003	1	34
旭川厚生病院	773	54	23	694	70	8	652	80	16	719	0	0	702	0	0	711	5	12	753	6	6	758	0	4	726	0	2
帯広協栄病院	390	100	37	474	0	36	427	0	20	436	3	22	459	10	10	438	13	12	468	27	9	447	21	13	488	15	5
KKR札幌医療センター	602	0	46	708	0	49	740	0	26	704	0	90	720	0	6	693	2	36	693	3	34	681	—	149	715	1	146
JCHO札幌北辰病院 (社 保 総 合)	422	3	26	430	1	27	360	0	22	387	0	21	383	0	22	320	0	33	317	6	45	405	2	25	270	2	1
日鋼記念病院	574	60	53	560	39	34	583	31	24	540	33	22	514	35	22	602	23	23	503	25	21	478	3	1	421	13	27
市立函館病院	682	52	61	775	18	96	765	21	89	683	32	69	703	32	72	641	60	83	707	56	53	706	11	45	662	10	32
北海道医療センター	358	2	53	405	6	72	484	1	58	415	5	48	440	12	49	463	2	39	419	0	86	487	0	60	492	3	66
市立稚内病院	198	49	10	171	45	5	226	42	7	226	32	2	225	11	0	240	0	0	208	4	0	183	2	47	129	6	75
市立士別病院	89	36	85	84	41	75	91	46	79	123	26	76	147	1	91	106	2	100	127	2	109	76	9	118	18	0	82
砂川市立病院	396	12	7	397	10	3	370	0	30	395	7	32	430	5	34	389	3	35	434	5	34	415	3	20	425	6	71
小樽市立病院	260	31	117	235	38	114	244	26	130	265	38	137	276	29	135	299	31	105	346	20	122	420	34	158	453	13	107
千歳市市民病院	201	41	5	225	21	10	206	40	6	245	4	12	201	25	5	215	17	9	208	8	13	226	3	6	224	6	2
網走厚生病院	360	11	45	352	7	23	312	12	27	315	4	19	316	6	22	316	6	12	318	5	18	298	2	9	326	7	39
JCHO北海道病院 (北 海 道 社 保)	451	5	26	381	7	25	399	3	14	450	3	11	385	2	3	424	—	8	408	0	13	394	0	8	436	0	16
天 使 病 院	404	2	17	363	—	24	407	1	20	412	0	14	407	0	12	489	0	13	465	0	22	516	0	19	611	0	3
湊和会江別病院	215	57	169	243	53	181	210	61	180	213	83	219	253	50	127	261	49	262	308	12	210	278	14	183	301	32	222
札幌北 検 病 院	570	10	639	471	14	744	563	14	741	548	30	768	479	20	720	345	6	840	436	143	913	432	143	900	439	114	1009
恵 み 野 病 院	304	11	35	350	5	50	339	0	28	343	0	14	329	1	20	314	2	27	348	0	25	342	2	16	359	2	16
苫小牧日翔病院	215	8	95	217	7	100	198	29	83	193	11	99	213	4	102	200	6	115	142	3	79	151	2	89	173	0	132
市立美唄病院	41	46	128	41	32	102	41	35	124	25	16	124	1	4	120	3	4	33	1	2	29	0	2	23	2	8	37
市立三笠病院	71	25	115	63	26	118	50	27	126	53	24	68	50	16	98	56	15	124	35	18	57	37	13	55	22	17	40
斜里町国保病院	17	13	24	0	0	0	12	7	5	22	18	21	16	10	23	21	15	32	15	11	31	—	—	—	*	*	*
町立中標津病院	153	9	22	165	19	14	165	21	11	168	19	11	218	3	4	193	1	3	146	3	1	165	7	8	134	6	9
十勝いけだ医療センター	0	2	2	0	4	1	0	0	0	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
厚岸町立病院	14	35	24	5	9	12	0	10	8	0	7	7	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
長万部町立病院	—	—	29	—	—	22	0	0	27	0	0	12	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
せたな町立国保病院	—	—	60	—	—	60	0	0	65	0	0	65	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
森町国保病院	0	0	200	0	0	100	0	0	100	0	0	100	0	0	0	0	0	200	—	—	—	—	—	—	0	0	200
西さっぽろ病院 (旧 河 西 外 科)	62	111	79	74	103	94	72	64	175	124	65	166	166	56	142	169	40	131	154	59	117	115	58	84	*	*	*
静和記念病院	159	0	37	164	0	29	148	0	24	150	0	21	144	2	14	121	0	15	213	1	22	136	1	16	127	0	23
洞爺協会病院	52	—	100	57	5	100	46	7	70	62	2	70	69	9	100	61	—	100	68	10	86	81	0	100	47	3	100
網走中央病院	12	19	—	12	23	—	24	21	不明	29	13	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	不明	—	—	—
北 札 幌 病 院	2	2	16	0	8	20	0	6	31	0	9	23	0	3	28	0	1	26	—	—	23	—	—	22	—	—	20
北 ク リ ニ ッ ク													—	—	—	—	—	—	0	0	10	0	0	14	0	0	10
北海道対がん協会													0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
すずかけセントラル													—	—	—	74	2	40	104	4	43	119	0	57	122	0	66
篠路はまなすクリニック													2	1	20	4	—	22	40	1	27	74	0	36	56	0	34
静仁会静内病院													83	6	66	—	—	—	3	2	7	121	17	44	0	0	0
新札幌聖隷ホスピタル																		0	0	93	—	—	173	—	—	—	—
JCHO登別病院																						10	0	15	—	—	16
総 計	11,885	1,231	3,614	12,336	992	3,515	12,429	942	3,685	12,269	788	3,552	11,799	496	2,609	11,752	389	3,067	11,950	504	2,825	12,567	400	3,360	12,130	309	3,468

旭川厚生病院



旭川厚生病院外科です。今年も北大一外から6名、旭川医大二外から2名、他2名で構成されています。

当院の診療圏は道北全般に及び、遠くは稚内市や紋別市、遠軽町などからも患者が訪れます。外来通院に片道2～3時間かかる患者もいて、外来受診のせいでかえって体調を崩さないか心配になります。

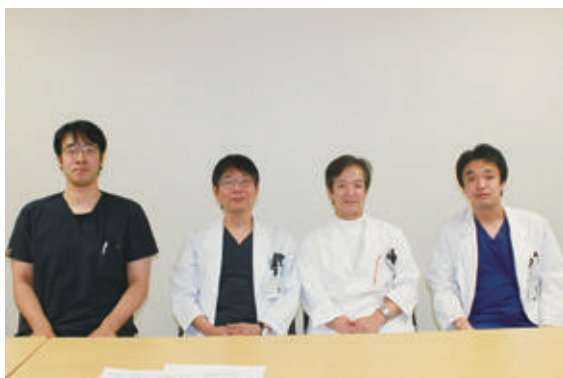
診療対象の内訳も例年通り消化器外科全般で、上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺、と多岐にわたります。高難度手術は、膵頭十二指腸切除術・膵体尾部切除術などは年間30例近くありますが、食道癌は少ないです。乳癌症例の増加も最近の傾向です。

最近の年間手術症例数は750例前後です。うち、緊急/臨時手術症例は100例前後です。当科が腹腔鏡下胃切/腸切に本格的に取り組んだのは平成19年頃からで現在LAG300例、LAC600例に達しています。当科では全胃癌/大腸癌手術に占めるラパロの割合がやや低めですが、若い外科医にとっては開腹の胃切/腸切がそれなりに経験できる病院であるとも言えます。他の腹腔鏡手術は従来からのラパアップ、ラパヘルも手がけています。

来年度は研修医の和久井君が入局予定です。期待の新人ですので皆さんよろしく願いいたします。

(文責：柳田 尚之)

網走厚生病院



今年度の網走厚生病院は西川副院長、横山、石川、中本の4名体制です。病床数は37床ですが、地域事情もあり30～70%の稼働状況です。しかし周辺地域をみても外科手術が可能な施設は当院のみで網走市内以外にも斜里、清里、小清水、常呂、美幌、川湯等から紹介を頂き、症例数も年間365件と増加傾向にあります。主な疾患は胃癌11例（うち腹腔鏡下手術6例）、結腸癌47例（43例）、直腸癌18例（15例）、胆石症68例（63例）、ヘルニア56例（29例）、虫垂炎38例（38例）、食道癌1例、肝癌4例、乳癌30例、膵癌3例、胆管癌1例、シャント手術19例（外科は手術のみ）と腹腔鏡下手術も標準的となっております。肝癌は大学から神山先生、胃癌は川村先生、大腸癌は本間先生にそれぞれ御指導頂いており、この場をお借りして感謝申し上げます。また臨時手術は61件とそれほど多くもなく時間的余裕もあり、中本は網走着任後に執筆中も含め12本論文作成しました。また4人と小所帯ながらも人繰りを付けて学会や講演会にも多数参加しております。さらに若い先生が執刀する機会を多くしており、中本は低位前方切除術を含め約100例経験しております。当院を希望してもらえる先生が増えることを期待しています。

(文責：横山 良司)

網走中央病院



当院は昭和35年に先代有里伸一（北大29期）が網走中央病院として開業し、私有有里仁志（昭和58年卒）が網走に戻ったのを機に平成9年医療法人社団網走中央病院と致しました。開院当初から夜間救急の輪番当番を担う急性期病院として診療してきましたが、地域医療のニーズに応え平成24年に入院を療養病床（86床）に転換しました。

網走市の医療は厚生病院が基幹病院となり、当院は急性期治療後の在宅復帰や施設入所への橋渡的存在となっております。以前は医局からの出張医師と全身麻酔手術施行していましたが、現在手術は行っておりません。

外来は従来通り外科（有里）と内科（2名）体制で診療しており、互いに連携の元で総合的に診断する様に心掛けて、通院患者の急性期疾患には別個に入院対応出来る様にしております。

現医局員の先生方には魅力のある病院ではありませんが、将来「総合診療医」として地方医療に貢献されたいとお考えになった際は是非ご連絡頂きたいと思っております。

(文責：有里 仁志)

岩見沢市立総合病院



岩見沢市立総合病院は人口8万3千人の岩見沢市に位置し、16の診療科、62名の常勤医からなる南空知地区（人口約16万人）の基幹病院として地域医療に取り組んでいます。病床数は484床で上泉洋副院長、羽田力、谷安弘、葛西弘規、辻健志、阪田敏聖の6人体制で診療を行っており、乳腺外科はおもに（出産、育児をしながら）柏倉さゆりが担当しています。また第一外科入局予定の難波宏征、石塚千紘、2人の研修医も多くの期間外科研修を行い戦力として働いています。当院では42床の外科病棟のみならず40床の透析病棟、200人が治療を受ける透析センターでも3名の透析医と伊藤浩二副院長（療養しながら診療）とともに診療を行っており、シャントのPTAも行なっております。2016年は約520件の手術を行い、その内約50件が透析関連の手術でした。鏡視下手術も積極的に取り組んでおり、今年はda Vinci Siが導入され、今後消化器外科での使用も検討しています。

中高生、医学部生を対象とした外科セミナー、研修医を対象とした川崎市のトレーニングセンターでのアニマルラボを開催し外科医の楽しさを伝える機会を作っています。学生時代からセミナーに参加してくれ今年当院で初期研修を行なっている石塚先生の第一外科入局という実績も出てきています。

（文責：谷 安弘）

小樽市立病院



小林展大(5年目) 川俣孝(嘱託医) 村田竜平(5年目)
渡辺義人(医療部長) 越前谷勇人(主任医療部長)

2014年12月1日、小樽市立病院は地上7階地下1階、21診療科を備えた総病床数388床（一般302床、精神80床、結核4床、感染2床）の新病院に生まれ変わり早3年が経過しました。新築特需も落ち着き病院としての実力が問われる3年目の現在、広報活動と医師会を通じたコミュニケーション活動、そして大学にご協力いただき腹腔鏡技術認定医にご指導をいただいた結果が手術件数の増加につながっていることは疑う余地がありません。2017年の総手術件数は12月22日現在で693件このうち全身麻酔下手術は548件で前年度比20%増を記録しています。外科スタッフは5年目2名を含む正職員4名、嘱託医1名でこれらの手術・外来業務・術後の補助化学療法・夜間急病センター業務・研修医の教育指導・病院職員および地域の啓蒙活動等をこなしています。当院は本年4月より北海道で2施設しかない「地域がん診療病院」に指定され勢いのある病院です。病院全体を挙げて上昇気流の機運にのり小樽後志地区を牽引する役割を担っています。

（文責：越前谷勇人）

帯広協会病院



当院は阿部院長、橋本先生、高橋先生、大畑先生、水上先生、松井の6人体制で診療を行っており、今年度は450件程度のペースで全身麻酔下手術を行っております。どちらかといえば開腹手術が得意な病院ですが、大学から川村先生、本間先生に手術応援に来ていただき腹腔鏡手術も積極的に行っております。昨年度は当院の母体である北海道社会事業協会全体の経営難のために手術機器の更新ができず、腹腔鏡手術のビデオカンファレンスではビデオの画質の悪さに会場をどよめかせるといったエピソードもありました。しかし当院一丸となって経営努力を行ったため経営状態は改善し、スコープ等の予算も通り来年度からは腹腔鏡手術の環境も改善する予定です。また、乳腺外科専門医である上徳先生に週1回来ていただいております。さらに十勝地方は近隣の外科系病院との勉強会も盛んにおこなわれており、医局の垣根を越えた交流も盛んです。以上の点から当院は特に後期研修医の研修の場として最良の環境であると自負しており、是非来年度は希望調査票に当院の名称を記載してください。よろしくお願いします。

（文責：松井 博紀）

北札幌病院



医療法人社団北札幌病院は1963年（昭和38年）開業、一般病床35床、療養病床60床で、外科スタッフは小川秀彰1人です。平成29年7月9日前理事長幾世橋経介が急逝し、理事長小川秀彰、院長幾世橋経人の新体制になりました。現在、北大消化器外科Ⅰ医局から外来診療や当直の多大なる応援を頂いており、心より感謝申し上げます。年間手術件数は20～30例で、最近は局所麻酔の小手術（CVポート留置、胃瘻造設など）のみになりました。当院の特色としては、JR学園都市線新琴似駅及び地下鉄南北線麻生駅のいずれからも徒歩数分で公共交通アクセスが良好です。また、医局の関連病院で北大病院より北に位置する病院は少ないため、札幌市北部や石狩市の患者さんの受け入れに適しています。関連病院としての北札幌病院の役割は、北大病院への外科手術症例の紹介、北大病院での手術後の転院療養継続、入院・外来での癌化学療法、入院して北大病院に通院放射線療法（送迎あり）、癌終末期緩和ケアなどと考えております。今後も医局との連携を維持して頂きながら、地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、何卒御協力の程宜しく申し上げます。

（文責：小川 秀彰）

釧路労災病院



病棟ナースステーションにて
後列左から 江本 佐野 石川 坂本
前列左から 小林 小笠原 河合

今年は積雪が早かったのですが、溶けた雪が凍って歩道はツルツルです。一方、車道はというと幹線道路ではアスファルトが露出し一見走りやすそう。しかし、見た目だけで判断するのは何事も危険。朝晩のブラック・アイスバーンにはご用心。釧路労災病院はがん診療連携拠点病院・地域医療支援病院・臨床研修指定病院として道東地域医療の中核を担っています。外は寒くても中は熱く頑張っています。

当科は、消化器・乳腺・緩和ケアを三本の柱として診療しています。2016年度に1名減となった定員は、2017年後半から7名の診療体制に復帰しました。2017年の手術実績（一部予定を含む）は608件（全身麻酔549件、臨時88件）でした。主な疾患は胃癌38例、結腸癌69例、直腸癌40例、肝胆膵癌12例、乳癌82例、虫垂炎37例、胆石症78例、鼠径ヘルニア90例でした。大学の事情で麻酔科常勤医が減ったため全身麻酔の枠が減り、手術件数の維持に苦労していますが、パフォーマンスを落とさぬよう努力を続けております。より確実な診療のため、乳癌診断機器の更新と手術用エネルギーデバイスの増設を予定しています。総合的な臨床外科医の育成を念頭に、多くの手術を経験したい方を待ってます。

（文責：小笠原和宏）

KKR札幌医療センター



KKR札幌医療センターは幌南地区の医療を支える急性期病院として日々診療しております。2017年度のスタッフは、小池副院長・田村（乳腺）・武田・今・桑原（呼吸器）・財津・河北・田中・植田の9名であり、2017年の手術件数は720件ほどで、このうち消化器外科・一般外科が500件、乳腺外科100件、呼吸器外科100件という内訳で、年々増加している状況です。当院の特徴としては、積極的に鏡視下手術に取り組むだけでなく、大学より川村先生・本間先生に手術応援に来ていただき、技術認定医所得を目標に優しく・厳しくご指導いただいております。また、血液透析も外科で管理しており、シャント造設術・シャントPTAも数多く行っております。透析認定医・専門医所得も可能です。さらに本年度より、救急症例を積極的に増やすことが病院の具体的目標となり、今後は腹部外傷や急性腹症の手術症例が増加すると予想されます。ますますアクティブになるKKR札幌医療センターにご期待ください。

（文責：河北 一誠）

溪和会江別病院



江別病院は昭和62年11月に野幌地区住民の念願であった総合病院として故品田佳秀先生が開院されました。先日開院30周年を迎え、地域医療を支えるべく日夜診療を行っております。スタッフは大森一吉、野村克、佐々木彩実、小野仁、高橋秀徳の5名です。毎週水曜日は肝胆膵Gの蒲池先生に、第一土曜日は乳腺外科の馬場先生に外来を行って頂くとともに、症例に関しての御指導も頂き勉強になります。週末は大学の諸先生方に当直の応援に来て頂いており感謝申し上げます。

病床数は200床でそのうち外科病棟は52床です。2016年の外科の手術件数は572件で、全身麻酔症例が301件でした。悪性疾患は胃癌24例、結腸・直腸癌52例、肝癌5例、胆管癌・膵癌7例、胆嚢癌2例、肺癌9例、乳癌8例、甲状腺癌4例でした。食道癌は2017年から2018年にかけて数例予定があり、様々な症例を経験することが出来ます。非悪性疾患に関しては鼠径ヘルニア、胆石症、虫垂炎、消化管穿孔、食道裂孔ヘルニア手術などがあり、地域の中核病院として臨時手術も積極的に行うようにしています。透析も担当し、約180名の血液透析患者さんを大森院長を中心として管理しています。内シャント作成、血管拡張なども行っております。若手の先生に積極的に手術を行って頂いており、色々な経験を積むことが出来ます。

(文責：佐々木彩実)

札幌北クリニック



札幌北クリニックは、北大に近い北区北18条で透析専門クリニックとして診療しております。昨年から津田一郎先生にもメンバーに加わっていただき、常勤医師は院長、増子佳弘、顧問、大平整爾先生と3名体制となりました。しかし、2017年9月5日に大平先生が突然ご逝去され、現在は院長と津田先生の2名のみで維持透析患者さんの診療をおこなっております。第一外科の諸先生や他科の先生方に、夜間や土曜日の他、専門診療などの応援に来ていただいております。

外科的な治療は透析関連の手術と処置のみおこなっております。今年はいまだに、主に北大第二内科から依頼を受けたシャント局所麻酔手術を10件、院内患者さんのシャント狭窄に対するエコーガイド下インターベンション治療を40件ほど行なっております。

今後も北大第一外科関連透析施設の一つとして頑張っていきますので、応援よろしくお願いします。

(文責：増子 佳弘)

札幌厚生病院



2017年の外科は高橋昌宏先生がJCHO札幌北辰病院に移られ、石津先生が副院長となり、以下田中、秦、高橋（周）、山上、田原、柿坂、野口、乾野、金沢、志智のスタッフ11名と、嘱託の高橋（弘）、安達の計13名で診療しています。

当科では臓器別に中心となる医師を決めており、甲状腺は高橋（弘）、胃は高橋（周）、大腸は山上・野口、乳腺は秦・田中、呼吸器は田中、肝は石津・柿坂、胆膵は田原が担当しています。2016年の手術件数は1038例で、甲状腺癌・甲状腺腫瘍101例、胃癌117例、大腸癌162例、炎症性腸疾患：37例、乳癌・乳腺腫瘍：60例、肺癌・肺腫瘍：44例、肝癌・肝腫瘍：84例、膵癌・膵腫瘍：31例、胆道悪性腫瘍：23例、胆嚢良性疾病：95例、虫垂炎：36例、鼠径ヘルニア：65例でした。

昨今の医療情勢から当科を取り巻く環境も厳しい部分もありますが、当科は臓器別スタッフが若手Drに十分な指導ができる体制になっています。手術手技習得に熱心な若手先生と是非一緒に仕事ができればと思います。

今年もスタッフの怪我などで、第一外科から本間医局長を初め手術応援など頂きました。この場をお借りして御礼をさせていただきます。

(文責：高橋 周作)

札幌北楡病院



当院は一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。総病床数は281床で、15の診療科があります。外科は米川元樹、目黒順一、久木田和丘、小野寺一彦、堀江卓、飯田潤一、服部優宏、谷山宜之、佐藤正法、石黒友唯の10名です。透析・血管外科チームと消化器外科チームに分かれて、お互いに協力し合って診療しています。消化器外科は内視鏡外科を重点的に行っており、2017年は当院から内視鏡外科学会技術認定医を2名輩出いたしました。本年10月、当院の内視鏡外科の礎を築いて下さった土橋誠一郎先生が退職され、戦力ダウンとなりましたが、今後も技術の向上に務めていく所存です。また、一時停滞していたダビンチによるロボット支援下手術も今後発展させていきます。

透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ています。

2016年の外科の手術件数は1183例で消化器系の全麻手術は約260例です。現在、症例数の増加傾向があり、今後も、地域の方々からの信頼に応えられるように臨床と研究に日々精進していく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

(文責：服部 優宏)

士別市立病院



当科は現在、平成元年卒の山賀1名体制です。外科、透析、一部一般内科の診療を行っております。当院では一昨年慢性期のベッドを増やし急性期のベッドを減らすという病棟再編を行いました。

週末の緊急手術や長時間の手術はできないことになり、名寄や旭川市内の病院に協力お願いして当院で対応できない患者さんを受け入れて頂いております。

その代わり急性期の治療が終了したりBSCとなった方はすぐに全て受け入れて、療養、リハビリ、退院調整、緩和治療を行っております。

その連携が軌道に乗り、昨年と比較して他院からの転院患者が10倍に増え、目標である入院患者数120名をキープ出来ています。

その結果、市から繰入金金を減らすことができ今年はその額が約6千万円ほどになる見込みです。

その方針に従って、内科で見つかった患者さんは旭川厚生病院を中心に希望の病院に紹介していただいています。

ただ中にはどうしても士別で手術を受けたいという高齢者の方がいて、その場合には昭和57年卒の澤谷先生と自治医大卒の消化器内科の先生にお手伝い頂いて手術をしています。

平成29年の全麻手術は12月中旬現在で52例、主な消化器癌は胃癌6例、結腸直腸癌10例でした。

私個人は、12月の検査でも画像上は再発の所見なく元気に仕事をしています。食欲もあり体重も増えました。

これもひとえに大学からのご支援と同門の先生方のご協力の賜物と深く感謝しております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(文責：山賀 昭二)

市立札幌病院



病院全体747床のうち、一般消化器外科・乳腺外科として52床程度を任されています。

外科スタッフは三澤一仁理事をはじめ計10名で診療しています。4月からは片山友也と谷道夫が赴任しました。当院赴任3年目に入った寺崎康展も脂がのっています。

4月から乳腺疾患センターが発足しました。大川由美部長を中心として乳腺疾患患者さんへさらに充実した医療を提供できる体制が整っております。

2015年の全麻手術件数は689件（臨時・緊急手術は160件）でした。主な手術の件数は、乳癌：85例、胃癌：35例（腹腔鏡下16）、大腸癌：123例（腹腔鏡下73）、胆摘：82例（腹腔鏡下62）、肝切除26例（原発10例）（腹腔鏡下1）、PD 9例、DP 6例、成人の鼠径/大腿ヘルニア：46例（TAPP：31例）です。手術以外では、CVポート留置が他科からの依頼が多く117例でした。

患者さんは中央区、北区、西区、JR沿線の方が多いですが、総合病院であることから重篤な基礎疾患がある患者さんの手術や、精神医療センターで管理が必要な患者さんの手術の受け入れも行っております。ハイボリュームセンターと目されている他院外科からハイリスクの患者さんの手術依頼をいただくこともしばしばです。

ここ数年病院として地域連携の構築に力を入れており、当番日以外の2次救急受け入れやドクター to ドクターの直通電話がスタートしております。

（文責：大島 隆宏）

市立千歳市民病院



2017年度、市立千歳市民病院外科は大きな節目を迎えました。

2004年より13年の長きに渡って当科を支えてくださった川向裕司先生が、千歳市総合保健センター長となって現場を離れることになったのです。

当時110例前後で推移していた年間全麻手術件数を、赴任後一気に200例超とし、さらに現在までそのペースを維持してきたわけですから、まさに当科における最大の功労者。その大きな柱を失ったうえに、前年度の4名から3名に減員となつてのいささか心細い船出となったわけですが、川向先生に代わって副院長となられた福島剛先生のリーダーシップのもと、安念・許と3名で何とかがんばっています。

ここ数年は、大学から、あるいは近隣の関連施設から、各分野のエキスパートの先生方に鏡視下手術のご指導をいただいています。この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

前任の谷安弘先生が日本内視鏡外科学会の技術認定を取得することができましたのも、ご協力いただいた先生方のお陰です。ありがとうございました。

今後も教室の若い先生方が一層スキルアップできるよう、よりよい環境づくりに尽力したいと思っています。

千歳は札幌にも空港にも近く、自然にも恵まれた住みやすいところです。

研修先として当科を希望する先生がひとりでも多く増えることを願っていますので、よろしくお願いします。

（文責：安念 和哉）

市立函館病院



市立函館病院は地域がん診療連携拠点病院、3次救命救急センターなどとして、道南全域から下北半島北部までの広い医療圏をドクヘリも運用しながらカバーしております。

H29年度よりは 北大第一外科5名（木村純院長、中西一彰、植木伸也、正司裕隆、吉田祐一）と弘前大学消化器外科5名の計10名で、日常診療や手術を1チームとして協力して行っています。上部消化管・下部消化管・肝胆膵のそれぞれチーフが治療方針を決定し、若手・中堅が手術・病棟管理を担当、上級医がサポートするシステムとしました。若手には研修医教育も担当してもらい、一緒に外科の基礎から勉強してもらっています。消化管から肝胆膵まで万遍なく経験できるように配慮しておりますが、3次救急施設のため若手が外傷・救急疾患を多く経験できるものの特徴です。年間手術件数780件程度の8～9割が若手の手術症例となっています。H29年度の象徴的な出来事は植木先生の執刀のPDを弘前大学の袴田教授に前立ちしていただく機会があったこと、がん研有明病院の比企先生の協力でしばらく途絶えていたLADGの再開ができたことだと思っています。今後も様々な方々の協力を得て、さらに“異文化交流”を進めていきたいと思っています。

（文責：中西 一彰）

市立三笠総合病院



三笠市は、空知地方南部にあり、岩見沢市に隣接した旧炭鉱町です。少子高齢化、人口減少が進んでおり、現在約8800人の人口のうち、65歳以上の高齢化率は45%を超えました。病院の患者さんも例外ではなく、一般病棟、療養病棟、回復リハビリに別れて治療している、80人ほどの入院患者さんの平均年齢は80歳を超えました。

外科は、石黒先生のサポートを頂きながら診療を続けております。手術件数は、年々減ってきていますが、熱傷、外傷などの外科系疾患はもとより、必要に応じ、椎骨圧迫骨折などの整形外科疾患の入院患者さんも受けています。

外科以外は、内科6名、透析科1名の常勤医および他科出張医により運営を続けていますが、現在、地域包括ケアシステムとして、病院、訪問看護、周辺施設の連携を強化し、まちぐるみで、患者さんを診ていく準備を進めているところです。

（文責：内藤 昌明）

市立稚内病院



市立稚内病院は、宗谷管内唯一の総合病院で、離島を含めた同地域の医療をすべてカバーしております。診療は、高橋学、菊地弘展、小柳要、押野智博の4人で行っております。

総病床数362床のうち外科は28床で、年間手術件数は200件とそれ程多くはありませんが、臨時手術の割合は40%に達しております。2016年1年間の腹腔鏡手術施行率は、胃33%（3/9）、大腸48%（13/27）、ヘルニア65%（17/26）、虫垂93%（14/15）胆摘63%（14/22）（カッコ内は症例数）でした。

腹部外科以外にも血液透析患者の診療を兼任しており、約100名の患者に対しシャントトラブル等の対応を行っております。

警察の検案嘱託医も行っており、年間80件前後の検案業務も施行しております。

常勤の循環器内科医、泌尿器科医不在のため、循環器疾患や泌尿器科疾患が発生した場合には各科で協力して搬送業務を行っております。特に冬はヘリは天候不良で飛ばないことも多く、陸路で搬送することが多くなっております（名寄まで片道2～3時間）。

以上のように多種多様な業務を行っておりますが、他科医師との連携も非常に良好なため、手術に支障を来すことなく業務を行っております。

（文責：菊地弘展）

JCHO札幌北辰病院



JCHO札幌北辰病院は、地下鉄新札幌駅徒歩1分と好立地にあり、買い物・飲み屋に事欠くこと無く、札幌市内・千歳空港への交通の便は非常に良いです。また立地柄、札幌市内だけでなく、石狩・江別・北広島・恵庭・長沼・果ては夕張からも患者さんが来院されます。2017年度の外科メンバーは、高橋昌宏先生が院長に就任され、中川隆公副院長、下國達志外科部長、小丹枝裕二、奥村一慶の5名で診療に当たっています。高度技能を要する肝胆膵領域の拡大手術、胃・大腸・肝臓・ヘルニア領域での積極的な腹腔鏡手術、他にも乳腺、良性疾患、緊急疾患など幅広い領域に対して安全確実な手術を遂行することをモットーにしています。日常診療・手術に関しても相談しやすい環境にあり、若手医師も上司の指導のもと高難度手術を執刀させて頂いております。当院は救急科が無く、時間外に呼ばれることはほとんどありません。学会発表や論文作成などの学術活動への指導・支援体制も充実しており、意欲のある医師には最適な環境です。2017年12月20日時点の手術件数（腹腔鏡手術率）、全体368例、肝切除20例（15%）、PD 6例、胆摘36例（89%）、胃切除18例（44%）、大腸切除61例（66%）、ヘルニア76例（74%）、虫垂27例（93%）、乳癌17例、シャント34例。

（文責：小丹枝裕二）

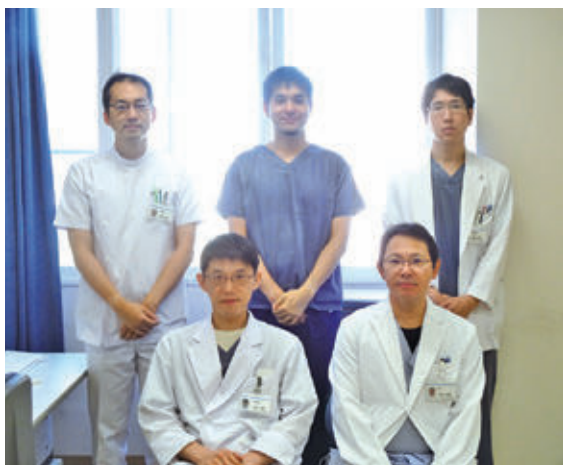
JCHO登別病院



JCHO登別病院が発足して4年目、私が赴任して2年目となりました、病院は病床数104床2棟で、内科、外科、整形外科、リハビリテーション科、麻酔科、神経内科、泌尿器科の7診療科の小規模病院です。外科は昨年度まで担当していた札幌大第一外科が撤退したので、今年度から武富教授にお願いして北大第一外科に変更して頂きました。現在リサーチのメンバーに来てもらっており、楽しくやっています。診療内容は週1回の外来、4～5人の入院患者、CVポート造設、PEG造設・交換など局麻下の手術が月2～3例で、業績は昨年より少し増加しております。以前から問題になっていた病院の移転・立替が正式に決まりました。新病院のコンセプトは白老町を含む登別市の地域医療の要としての役割を果たすことです。移転先はJR登別駅から徒歩で7～8分の場所で、現在の温泉地から比べてアクセスはかなり良くなります。病床数は110床と少し増えますが、診療内容は殆ど変更ありません。3階建ての病院を予定しており、設計は2017年9月から2018年6月まで、申請は2018年7月から9月に行われ、新築工期は2018年10月から2020年2月（17ヶ月）までを予定しております。職員一同長年の夢に向かって頑張っております。

（文責：伊藤 美夫）

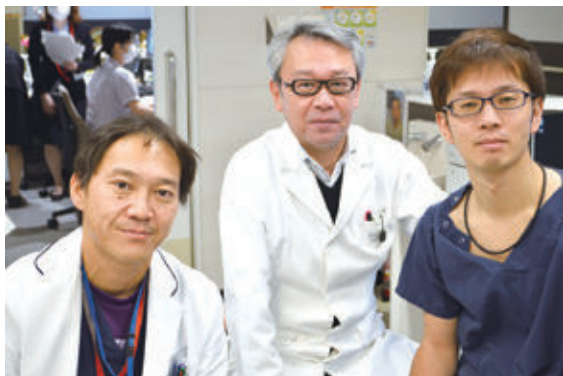
JCHO北海道病院



当院は豊平川沿いに建ち病床数322床18診療科からなる札幌市南部地域約50万人を診療圏域とした急性期病院です。外科は28床で2017年度は数井啓蔵副院長のもと、正村裕紀、敦賀陽介、藤居勇貴、坂本聡大の5名で約400例の手術を行っています。札幌市南部も高齢化が進み、当院でも心呼吸器合併症を多く抱え、認知症なども有するような高齢者の難しい手術症例が増加しています。当院で可能な限り対処する方針のもと、大学や同門の諸先生のご助力をいただきながら肝門部胆管癌、巨大な肝細胞癌、食道癌などの困難な症例も行っております。内視鏡手術は本年度も教室から毎週中間重紀先生に指導していただいています。全麻手術の約半分が鏡視下手術です。若手にはほとんどの手術に参加してもらっています。今年度4月から9月までの半年で藤居、坂本とも約70例ずつ、ヘルニア、甲状腺から開腹・鏡視下胃切除/大腸切除まで多岐にわたって執刀しています。肝切、PDも経験してもらいました。肝胆膵領域は敦賀が主体となりPD、肝切除などを約40例行っています。また呼吸器外科学会の認定施設であり、肺癌などの呼吸器疾患を数井、正村が主体となり約50例行っています。

（文責：正村 裕紀）

すずかけセントラル病院



静岡県浜松市南区に位置するすずかけセントラル病院外科 今井です。鈴木友己先生と自分で2013年4月から消化器外科として勤務し、5年目となりました。当院は病床数309床で、うち外科のベット数は20床です。手術件数ですが2013年度は116件（全身麻酔74件、全身麻酔以外42件）、2014年度は157件（全身麻酔106件、全身麻酔以外51件）、2015年度は176件（全身麻酔119件、全身麻酔以外57件）、2016年度は188件（全身麻酔122件、局所麻酔66件）と少しずつですが増加しています。手術体制としては麻酔科医が1人常勤、手術室が3室で、外科は週2日の定期手術のほか、臨時手術は随時行っており、柴崎先生に週1回手伝いに来ていただき鏡視下手術も頑張っている行っております。柴崎先生に来ていただいたおかげで鏡視下で行える手術も増えました。さらに現在は応援として毎週大学から派遣していただき感謝しております。周囲の開業医からの紹介も徐々に増えてきており、少しずつですが手術件数が増えてきてます。施設としても日本外科学会、日本消化器外科の関連施設の認定は取得しております。北海道は2017年12月末で降雪がひどいようですが、こちらは全く雪とは無縁です。浜松は夏の暑さにはちょっと閉口しますが、気候はよく住みやすい街だと思います。

（文責：今井 敦）

砂川市立病院



当院は中空知のセンター病院としての機能を担っている総合病院です。

本年度のスタッフは4月から9月までは前年度より1人減り、田口宏一副院長・横田良一・細田充主・本間友樹・千田圭悟の5名でした。10月からは大学院生の杉山昂が加わり、6人体制で診療にあたっています。地域の平均年齢の上昇と人口減少は続いていますが、市立芦別病院から消化器外科が撤退したこともあり、芦別市からの紹介も増加し、手術数は増えております。消化器疾患（食道癌、胃癌、肝胆膵悪性疾患、小腸、大腸癌、肛門疾患）、乳癌、ヘルニアなどの手術を行っており、2017年の手術は550件程度（局所麻酔手術を含む）となる見込みです（2017年1月～12月現在）。救急外来から紹介となる緊急手術や外傷手術も数多く行っています。急性胆嚢炎を急性期に臨時手術として治療していることが特徴で、急性期の腹腔鏡下胆嚢摘出術の有用性も当院に赴任したからこそ経験できたものであると思っています。定期手術は横田先生と中心として腹腔鏡手術が主体となっています。術後合併症は少なく、質の高い手術が行われていると感じます。初期研修病院としても有名であり、毎月必ず研修医がローテーションします。外科に興味のある研修医も多く、毎年当院から第一外科への入局者が出ておりますが、外科チームの雰囲気の良さが外科への興味をさらに強めているのではないのでしょうか。外傷・悪性疾患まで非常に多岐にわたる手術を経験でき、若手医師の総合的な力を培うのに適した病院であると思われれます。

（文責：千田 圭悟）

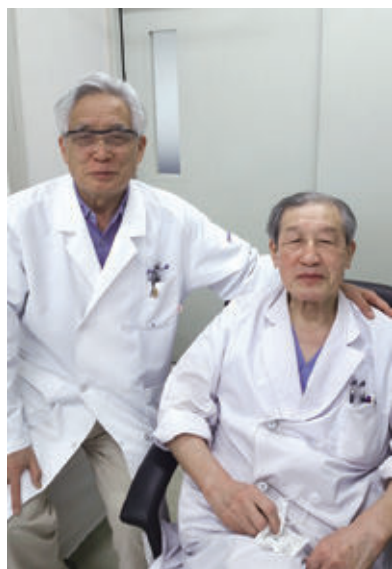
医療法人静仁会 静仁会静内病院



医療法人静仁会 静仁会静内病院は、日高振興局の中心に位置し、199床は管内最大の病床数です。急性期60床、障害者50床、療養89床のケアミックスです。常勤医は7人（漢方内科、内科、小児科、循環器内科、腎臓内科）で、外科医は不在です。従って手術内容は、シャント増設と整形外科非常勤医師によるばね指手術などせいぜい20例くらいです。病院の特徴は何と言っても院長の井齋偉矢（1975年卒、第一外科同門）オリジナルの「サイエンス漢方処方」という考え方に基づいて、救急・急性期治療に漢方薬（超多成分を服用することで、熱産生・免疫・微小循環・水分出納などのシステムの変調を正常化する応答が宿主から引き出される）を積極的に活用していることです。2018年2月1日には、本邦で保険収載されている全ての漢方薬の解説書『147処方を味方にする 見ひらき漢方整理帳』が南山堂から発売されます。4月からは常勤医が一人減って6人となり、業務がキツくなることが予想されます。外科医の入職が強く望まれる状況です。2018年末までには医療法人静仁会から医療法人徳洲会に変わりますので、病院名も例えば「日高徳洲会病院」というように改名される予定です。

（文責：井齋 偉矢）

医療法人社団 静和会静和記念病院



植上先生と私のsenior surgeonが健在だ。そして月曜に本多先生、水曜に嶋村先生、そして1外科の若手による当直、これらの強力なbackup無くして当院の外科は成り立たない。川上理事長は週2回昆布温泉病院の地域医療を長年にわたり継続している。雨が降ろうが雪がどんなに降ろうが休むことがない。まさに赤ひげDr.として蘭越地区の患者さんの信頼も厚い。

当院は外科、内科が一体となった消化器系全般の診療をカバーしている。上、下消化管の内視鏡、ERCP、ESTさらには肝腫瘍に対するTACE、巨脾に対してのPSEなども行った。現在、慶応大学遺伝子診断センターに赴任した西原教授と北大遺伝子部門の林先生らの支援で、遺伝子診断のための肝生検などが組織生検、遺伝子解析に基づいた抗がん剤治療も積極的に行っている。消化器医の小野、二瓶、林Drs.の日本消化器病学会総会、地方会、札幌医師会学会発表、そして草野は昨年、日本臨床外科学会の名誉会員に推薦されるなど、学会、研究会活動も盛んだ。ICG蛍光の臨床応用に関しても、小野先生と外科のコラボの胃がんにおけるICG蛍光法によるmarking法が日本消化器病学会雑誌に掲載される。また、小柳先生との共同研究で、切除標本からの微小リンパ節の新たなharvest法を脂肪融解液との併用を試みている。1mm程度のリンパ節が光って見える。

この2月には心臓移植を本邦で初めて施行した故和田寿郎教授が立ち上げ、小生もその理事長として長年関わってきた、Pan-Pacific Surgical Association-Japan Chapterがホノルルで開催される。今回から武富教授も出席される。若手（でなくても）外科医の英語でのpresentationの登壇門として、来年からの皆さんの参加を期待したい。

先般ご報告した通り、新病院構想も順調に進んでおり、新年度には教室からの応援スタッフを派遣いただけることを期待している。前にここで一緒に働いた川俣君がこの3月に教室に戻ってくる。わが病院が賑わって来ている。

（文責：草野 満夫）

町立中標津病院



町立中標津病院は、道東の酪農を中心とした中標津町にある199床の地域中核・災害拠点病院です。周囲には酪農が盛んな別海町のほか漁業を中心とした標津町・羅臼町があり、約4万人の医療圏をカバーしています。また知床までは80km程度、釧路市までは100km程度の距離があるものの、町内には空港もあり札幌・東京へのアクセスも可能で、開陽台（町内の高台にある観光地）からは北方領土である国後島も眺望できる自然豊かな地域です。ご存知の方も多いかと思いますが、今年は昨年まで長きにわたり当病院を支えていただいた長洲英介前院長、中川智徳全副院長の退職に伴い、外科スタッフは相山健、深作慶友の2名となり、嘱託医である宇根良衛先生と共に3名で外科の診療にあたっています。

今年の手術件数は100件程度と例年に比べるとやや少なくなっていますが、宇根先生からのアドバイスと大学の消化管グループの先生方の協力のもと、地域のニーズに応えた手術を行うことができています。まだまだ経験の浅い同期二人で手術を含めた外科診療に当たれるのも、諸先生方の協力のおかげと考えています。手術応援・当直業務など、忙しいながらも大学より出張していただきありがとうございました。

（文責：深作 慶友）

天使病院



現在外科スタッフは、山本浩史、中山雅人、大場豪、湊雅嗣、佐藤彩、芦名一茂の6名で診療しています。周産期医療を中心としていることから、小児外科の手術件数は道内で一番多く、昨年は342件の小児外科手術を行っています。外科手術は昨年269件で、あわせて全身麻酔手術611件と年々増加傾向にあります。成人悪性腫瘍手術は胃癌18例、大腸癌28例、肝癌6件、膵癌6件、乳癌19件、肺癌12件と、ひとつひとつの件数は決して多くはないものの、幅広い範囲で手術を行っています。

また、教育に注力しているのも特徴で、初期研修医の教育はもちろんですが、学生の見学も昨年は150名ほどを数えました。2006年から現在までの初期研修医の北大第一外科入局者は7名（大場、湊、梅本、藤好、奥村、海老沼、佐藤）です。今後も外科医の養成に貢献していきたいと考えています。外科医として成長していくのみでなく、指導医として、また病院の運営などに関しても知識や技能を身につけることの出来る病院です。

（文責：大場 豪）

洞爺協会病院



当院は、社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する7病院（函館、小樽、余市、岩内、帯広、富良野、洞爺）の一つとして、昭和5年に創立された歴史と伝統のある病院で公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々に大変親しまれております。

当地は洞爺湖、有珠山、昭和新山等有す道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来にも多数受診し、国際色豊かな病院となっています。

診療科は、内科、外科、整形外科、リハビリ科、泌尿器科、小児科、麻酔科、歯科口腔外科で、北海道大学、札幌医科大学の関連施設（北海道地域大学循環型専門研修プログラム関連教育病院）となっています。

外科スタッフは2名で、科を問わず何でも診るようにしています。外科全麻件数は年間60から70例で腸切始め鏡視下手術を積極的に取り入れています。血液透析も外科で管理しており、シャント手術、PTAとも当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に答えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約90人前後の透析患者さんの治療をしています。

外科に限らず幅広く知識と技術を身につけたい伸び盛りのあなたには最適な病院だと思います。

（文責：青木 茂）

苫小牧市立病院



当院は苫小牧市を中心とする東胆振～日高地方の1市11町、人口約30万人を医療圏とする広域中核病院です。苫小牧市は道央自動車道を利用すれば札幌市から車で約1時間と近く、千歳空港とのアクセスも便利です。総病床数は372床（外科24床）で、外来出張のみの科も含めると全診療科は18科です。2016年10月、新築移転の際にPET-CT、デジタルMMG、放射線治療装置（リニアック）なども導入され、放射線科専門医も常勤しているので高い画像診断能力とIVRも可能です。2017年度の診療スタッフは松岡院長、佐治副院長以下、広瀬、花本、蔵谷、太田の計6名です。初期研修医は病院全体で計14名、その中、1～2名が交代で当科ヘローテーションしています。最近3年間の手術件数は2015年475件、2016年436件、2017年（10月まで）386件と目立った変化はないようです。2017年（10月まで）の主な内訳は胃癌20例（腹腔鏡下8例）、大腸癌67例（腹腔鏡下47例）、乳癌30例、肝切除術17例（原発性肝癌13例、転移性肝癌4例）、膵頭十二指腸切除術4例、膵体尾部切除術4例、胆嚢摘出術59例（腹腔鏡下49例）、虫垂切除術33例（腹腔鏡下30例）、鼠径ヘルニア53例（腹腔鏡下20例）などです。

（文責：広瀬 邦弘）

医療法人社団養生館苫小牧日翔病院



当院は、札幌市の南東約65km、苫小牧駅のやや西側に位置しています。病床数は168、透析センター97床あり、11の診療科を有する病院です。胆振地方において、血液透析治療を積極的に行っています。

スタッフは、熊谷先生、櫛田先生、崎浜の3名に加え、2017年4月より松久忠史先生（平成4年卒）が透析センター科長として着任されました。また、一昨年に麻酔科医が退職し、櫛田先生が孤軍奮闘しておられました。昨年4月より麻酔科医3名が、非常勤医として来られています。更に2018年4月より、新任の麻酔科医が常勤される予定です。大学から移植G（後藤、腰塚、渡辺、川村典生）、肝胆脾G（若山）、リサーチの先生が、手術の手伝い、当直などで応援に来ていただいています。また消化管Gの先生に鏡視下手術の応援にきていただいております。

2017年の手術件数は296件（内全麻156）でした。主な手術の内訳は食道癌1、原発胃癌9（鏡視下9）＋残胃癌1、大腸癌28（鏡視下25）、肝癌3、十二指腸癌2（内PD1）、胆石胆嚢炎13（鏡視下13）、虫垂炎7（鏡視下7）、鼠径ヘルニア35（鏡視下33）、腹壁癒痕/白線ヘルニア5（鏡視下5）でした。腹腔鏡手術の割合が増えております。

今後も近隣の医療機関と連携しながら、胆振～日高地方を支える病院としてその役割を担っていきたいと思います。

（文責：崎浜 秀康）

日鋼記念病院



当院は「地域がん診療連携拠点病院」、「地域周産期母子医療センター」、「災害拠点病院」として、西胆振地域の急性期医療の一翼を担っております。

地方病院への医局派遣撤退が増える中で、室蘭市内で唯一の形成外科・皮膚科・眼科・耳鼻科・口腔外科などが充実しております。

2016年の手術件数は461件で、消化器・呼吸器・乳腺などの手術に加え、透析患者さんのブラッドアクセスの手術もおこなっております。室蘭市の高齢化に伴い、定期・臨時手術ともに80歳以上の高齢者が多いのが特徴です。また院内のCV port作成は、ほとんどが外科でおこなっています。

今年は病院再建の功労者でありました勝木良雄先生（S48卒）が11月2日に亡くなりました。先生は昨年6月に理事長退任後も緩和病棟で勤務され、我々にとっては心の支えでありました。

外科は益子博幸（S61卒）、高田譲二（S63卒）、喜納政哉（H10卒）、旭火華（H17卒）、沢田亮史（H22卒）が勤務しております。柳谷晶仁院長は札幌医大の心血管外科医であります。第一外科同門会に所属しております。

病院の理念である「医療人として組織として社会に貢献する」を胸に、勝木先生が残した病院をさらに発展させていきたいと思っております。

（文責：益子 博幸）

医療法人はまなす



- ・篠路はまなすクリニック（札幌市北区）：院長 工藤岳秋（74期）、栗林弘（45期）
- ・はまなす医院（石狩市花畔）：院長 工藤立史（80期、北大第2内科同門）、会長 工藤謙三（46期）

篠路はまなすクリニックは、血液透析に加え入院・手術を可能にしてからまもなく3年となります。口コミ、近隣の先生方からの紹介などで外来診療も徐々に忙しくなっており、地域に定着しつつある実感が出てきました。シャントのみならず消化器手術件数も増えてきています。周辺のクリニックとの連携を大切にしながら、地元で医療を完結させるための一翼を担っていきたいと思います。

はまなす医院は開院から23年が経過し、大幅な増改築工事を行いました。血液透析ベッドの増床、リハビリテーション室の開設、手術室の改装、と設備を拡充・リニューアルし、入院受け入れを2年半ぶりに再開しました。病床はすでにフル稼働であり、石狩市北部地区の入院に対するニーズが大きいことを再確認しました。写真は記念祝賀会のものです。

両院とも第一外科医局から手厚い診療応援を頂戴しており、改めて感謝申し上げます。今後とも教室、同門の皆様の御支援を賜れば幸いです。

（文責：工藤 岳秋）

北農会恵み野病院



恵み野病院は、千歳市と札幌市の中間に位置する総病床数199床の急性期病院で、恵庭・千歳・北広島を中心とした地域の急性期医療の中核を担っております。当院の特徴として、糖尿病生活習慣病センターの外来患者1700名、透析センターの維持透析患者100名、内視鏡センター 6000件/年の内視鏡検査・治療を行っており、各部署それぞれが活発に活動しております。

外科スタッフは、今年度から一人増員となり、中村貴久副院長を中心に、林俊治、森田恒彦、松澤文彦の4人で診療にあたっております。麻酔科医2名常勤体制であり、日中・夜間の緊急手術に対応しております。

全麻手術件数は昨年度まで、350件前後でしたが、今年度は410件を超えました。急性虫垂炎、胆嚢結石症・急性胆嚢炎、成人鼠径ヘルニアは、ほぼ全例鏡視下手術で行っており、大腸癌も閉塞症例・悪性疾患開腹歴のある症例を除いて、鏡視下で行っており、鏡視下手術は全体の6割に達しました。胃癌は、早期癌の症例にのみ鏡視下手術の適応としているため、症例数は少ないのですが、手術手技の安定に伴い、徐々に適応を拡大していく予定です。高齢な患者が多いのですが、安全かつ根治的手術を心掛けて、診療にあたっております。

（文責：森田 恒彦）

北海道医療センター



当院は、27診療科、500床（一般410（外科35）、精神40、結核50）で構成されており、外科5名、呼吸器外科2名で協力して診療を行っております。

2016年度の年間手術件数は563件（臨時18%）で、いわゆるメジャー手術は大腸120（腹腔鏡75%）、胃32（腹腔鏡53%（残胃癌を含めた胃癌では71%））、肝10、膵5でした。

他院と同様に腹腔鏡手術には力を入れておりますが、特に胃に関しては技術認定医（胃）である植村医師、川村医師（手術支援）のもと、進行胃癌に対する腹腔鏡手術も行っております。胃で技術認定医習得を目指す環境としては教室内随一であると考えられ、私もいまだに手術毎に新たな発見があり成長を実感しております。

また、当院は3次救急併設のため重篤な患者の手術も多く、さらに結核、精神・神経内科的疾患の患者さんへの診療の機会もあり、若い先生が診療の幅を広げるには非常に良い環境であると思われます。

研修医は各学年8名程度で、外科は必修です。彼らには手術（写真下中）、学会発表、飲み会などで活躍してもらっています。その中から、今年は当教室の仲間として市村健太郎先生（写真下右）が加わってくれました。

（文責：三野 和宏）

北海道がんセンター呼吸器外科



新病院完成予想図（平成32年10月 運用開始予定）

北海道がんセンター呼吸器外科は平成10年4月に単科として診療を開始してから、原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍などを対象に、現在病床数18床で年間250件超の全身麻酔手術を行う道内有数の施設になっています。

当時呼吸器外科医長として当科を立ち上げ、その発展に尽力された近藤啓史先生が2017年6月24日に急逝されました。近藤先生は胸腔鏡手術の黎明期から、手術術式や手技、手術器具の開発などを積極的に行い、現在当科では手術患者の8割以上で胸腔鏡手術を施行するまでになっています。

今後は原発性肺癌の世界にもロボット手術の導入が噂されており、またあらたな技術革新がおきるかもしれません。

近藤先生を失った悲しみをのりこえて、次の時代を見据えながら、診療に取り組んでゆきたいと思っています。

また臨床研究も引き続き積極的に行っております。

呼吸器外科分野にご興味のある方はぜひご相談ください。

（文責：安達 大史）

北海道がんセンター消化器外科



濱田朋倫、篠原敏樹、前田好章、砂原正男、皆川のぞみ

私共の施設は、2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在へ至っています。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、純粋に消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。ほとんどが消化器のmajor手術です。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は結腸癌はbulkyなものを以外はほぼ全例に適応にしています。胃癌についても原則早期胃癌から、進行癌へ適応を広げつつあります。

2015年11月からダビンチシステムを使用した胃癌に対するロボット支援手術を開始し、現在まで8例に合併症なく施行しました。日常診療になるにはまだ多くのステップがあると思いますが、これからも慎重にこの新しい手術に取り組んでいきたいと思っています。

研究・学術活動も積極的に行っており、2017年までの6年間に6編の英文論文が当科からacceptされました。全国学会上級演題・国際学会での発表も多くなっています。

これらの学術活動を行うにはData baseの充実が不可欠であり、国立札幌病院のころのパンチカードの時代からの受け継がれている自分達のデータで発表するというスタイルを大切にしています。この伝統を大切にしつつ今後とも、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。

（文責：前田 好章）

北海道がんセンター乳腺外科



前列左から山本、寺井、高橋、渡邊、太刀川、富岡
後列左から4人目 前田、5人目 佐藤

当科は、関連病院ではほぼ唯一の乳癌診療に特化した診療科です。

スタッフは、高橋将人（副院長・平成元年卒）、渡邊健一（医長・平成元年卒）、富岡伸元（医長・平成3年卒）、佐藤雅子（平成7年卒）、山本貢（平成11年卒）、前田豪樹（平成12年卒）の常勤医6名に太刀川花恵（平成25年卒）、寺井小百合（平成27年卒）の2名のレジデントを加えた計8人体制で、高橋、渡邊、富岡、山本の4名が第一外科同門です。

2016年は、新規乳癌手術335例、入院患者31.6人、外来数85.4名、乳癌化学療法4070件で9割以上を外来で実施しました。

形成外科と連携し乳房再建を実施しています。遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）に関するカウンセリング・遺伝子検査に対応し、HBOCに対するリスク低減乳房切除も実施可能です。治験・臨床試験への参加を重視しており、症例登録数は全国有数です。新規薬剤・治療の開発、エビデンスの創出に貢献したいと考えています。当科は、確定診断前の症例から、初期治療、転移再発乳癌を含め、すべての症例をお断りするなく診療する方針です。お困りの症例などございましたらいつでもご連絡ください。

（文責：渡邊 健一）

北海道対がん協会



北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は1名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約3万例、道内各地で行われるバス検診は約2万5千例です。

2017年度から厚生労働省の指針がかわり視触診がなくなりました。大学や関連病院の先生方には今まで大変お世話になりました。今後とも読影や精査でお助けいただけたらと存じます。

（文責：池田由加利）

森町国民健康保険病院



スタッフ数：3名（主任外科医長1名と69歳の嘱託医師2名）

病床数：60床（内科との混合病棟）

年間手術件数：全身麻酔・腰椎麻酔0、局所麻酔150件

病院の特色：平成29年10月1日の森町の人口は、15,956人です。そのうち65歳以上の方は5,686人で、高齢化率は35.64%です。森町国保病院を訪れる受診者も高齢の方が中心です。

内科医3名、外科医3名の計6名が常勤医です。その他、週2回の整形外科医、週1回の泌尿器科医がいます。以上の陣容で、入院・外来・救急を支えています。

救急車は年間547台で、1日平均1.5台です。医療機器としては、MRI（永久磁石・0.4テスラ）・CT（16列・ヘリカルCT）・一般撮影・マンモグラフィ・US・骨密度計が稼働しています。CF、GIS、PEG造設を内科で担っています。GISは、細径の経鼻ルートに人気があります。病床稼働率は76%前後で経過しています。

高齢者の整形外科疾患及び労災を中心とした外傷が7割を占めています。今年は、大きな交通事故が少なかった印象があります。この傾向が続いていくことを願っています。

高齢者が安心してかけられる医療を行うよう努力しています。

（文責：川崎 和雄）

北海道では、冬季オリンピック（平昌）で複数のメダルを獲得した高木姉妹、史上初の銅メダルを獲得したカーリング女子日本代表チームなど、感動の余韻が路肩の雪を溶かしている3月です。

教室年報も5年目を迎えました。今回も教室や関連病院の先生方から活気ある御報告を沢山頂戴しております。お忙しい中、誠にありがとうございました。私ごととしましては、英国留学の機会を頂戴し、休みにはアイラ島へウイスキー蒸留所の見学をして参りました。ウイスキーがグラスに注がれ途中で静かに微笑みはじめるように、この教室年報も皆様の中で愛おしく読まれることを、さらには年を経て深みを増していくことを願ってやみません。

今回の編集に際しまして御協力を頂きました編集委員の市川伸樹先生、秘書の生野和子さんにはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。またこのような重要な任務を任せて頂きました武富教授に深く御礼申し上げます。次年度以降も、より沢山の御報告ができる教室年報を発刊できますよう努力していきたいと存じます。今後とも皆様より御指導・御鞭撻を頂けますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

（文責：宮城 久之）



消化器外科学教室Ⅰ 教室年報2017

平成30年3月発行

発 行 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰ

TEL: 011-706-5927

FAX: 011-717-7515

ホームページ: <http://surg1-hokudai.jp/>

印 刷 北大生協 印刷・情報サービス部

